
SHADE-I

青山 由梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H A D E - I

【Nコード】

N 3 2 3 2 D

【作者名】

青山 由梨

【あらすじ】

分岐型小説SHADEの続編。SHADE-Iルートを選んだ方はこちらが続きです。物語のあらすじはSHADEの記載をご覧ください。

EPISODE i - 1

ア・レ・は、雑音

何も聞こえない

違う、

あんなモノを気にしていたら

私は ゼザと同じ事をした

考えるな

ダメだ、

オレを 忘れないでくれ

消えたくない

消すんだ そこには何も無い

グッ !!

リュクシーの手を取ると、イチシはあの部屋の外へと引つ張り出した。

「あんたの選択は正しい。 だから、息をしろ」
リュクシーは、何も感じてはならないと思い込む余り、呼吸さえも

殺して無を演じていた。

「息をしろ、リユクシー!!」

目を閉じたまま小刻みに震えている姿に、イチシは一瞬躊躇したが、そのまま固く抱きしめた。

「息をしろ !!」

反応のないリユクシーに、イチシは自分の口から空気を送り込んだ。

「…………。ハアッ!!ハアッ、ハアッ 」

意識を取り戻したリユクシーは、眼前に迫るイチシの顔を見つめる。

「イチシ 」

「オレの事を考える。 ジンたちと合流するまででいい。オレの事だけ考えてろ」

「…………」

そう、背後には誰もいない。リユクシーのそばには、イチシしかない。

「 これでいいのさ。誰もあんたを責めやしない」

元より、2人を引き離そうとしていたイチシには、願ったりの結果だろう。

「ほら、つかまってろ」

イチシが差し出した右手を リュクシーはしっかりと握り締めた。

「行くぞ」

急にイチシがリュクシーから視線をそらすと、短く言った。

イチシも忘れなくてはならなかったのだ

リュクシーの唇の温もり、そして手のひらから伝わる熱への衝動を。

ジンの住居を後にし、2人は大通りに身を紛れ込ませる

2人の間は終始無言のまま、足早に歩き続ける だが、2人を繋ぐ部分から感じている熱は、偽りではなく本物だった。

「イチシ 」

少し先を歩くイチシを、リュクシーは呼び止めた。

今、言わなければならないと思った。

2人はまだ、生きているから……生きていられるから、1秒でも時間が惜しいと思った。

「イチシ　ヘリオンを助け出したら」

言葉の先が予想できなかったのか、イチシは眉間にシワを寄せた。

「あの2人を安全な所へ送り届けたら」

《ゼザ》と同じ道　それだけはできない

「デスタイトへ行こう。そして治療を受けよう。お前を襲ったシェイドを　2人で」

最後の言葉を言う前に、イチシに声を奪われた。

痛いほどに抱き締められ、彼が自分をどれだけ求めていたかを知った。

分かっていたつもりだが　改めて知った。

「2人で 戦おう。お前をあのシェイドに渡しはしない」

カライのように

「手遅れにしない」

何て身勝手な行動だろう カライを見限って、イチシに乗り換えるというのか？

カラ を救えなくて、イチシを救えるのか？

リュクシーに 誰かを救うなど、できるのか？

「ああ ああ」

だが、イチシはリュクシーでいいと言った。
こんなリュクシーでもいいと リュクシーでなくてはダメだと。

「イチシ、約束してくれ。生きる為に努力すると。絶対に諦めない
と」

「ああ ああ」

ならば、リユクシーも信じよう。

イチシを生かす為に、イチシと生きる為に、イチシの事だけを考えよう。

それが他の犠牲を生む事になろうとも

「ねっ、ちょっと見て！あの人、超カッコよくない!？」

「えー、マジで？っていうか、何かの撮影じゃないのー、アレ」

突然、群衆がざわめき出す

《やはり

無駄だったか》

その声の正体に気づいた瞬間、リュクシーは海の中にいた。

ゴポゴポッ

！！！！

（溺れ死ぬ　　！！）

シェイドの直撃を食らい、リュクシーは喉を押さえ付けた。

「ゴポッ！！ガッ、ハッ

！！」

「な、何！？どうしたの！？」

事態の認識できない人間たちが、迂闊にもシェイドの領域に踏み込み、窒息して倒れる。

苦しい 意識が……薄れていく

「息をしろ!!」

海底沈み行くシェイドの渦の中、何者かの声が聞こえる イチシだ。

イチシの声だ

だがイチシを認識したものの、溺死のシェイドの中で、それ以上の抵抗は出来なかった。

「さっきと同じだ、息をしろ、リュクシー!!」
だがイチシはリュクシーの元までたどり着くと、先刻と同じように唇を重ねた

「ガハッ!!」 ゲホッ、ゲホッ!!」
「そうだ 息を吸え」
イチシがリユクシーを支える腕に力を込めると、周りを取り囲んでいた海のイメージは次第に薄れていく。

《水の幻想は効かぬか 》

シェイドの攻撃を破られ、静かに佇む男 ハガルは言った。

「イチシ お前は平気なのか」
「居眠りしてて、海に落ちた」
「……今は笑っている場合じゃない」
イチシは至って真面目に答えたようだが、確かに笑っている状況ではなかった。

《ならば その身、貫くしかあるまい》

ハガルは無表情のまま、剣を抜く

（剣勝負なら……まだ何とかなるかもしれない）

リュクシーは左後方にあるオープンカフェまで飛びのくと、テーブルの上のナイフを2本、両の手に持った。
刃先を地に向け、己のシェイドを走らせる

《行くぞ》

ハガルが踏み込むと同時に、リュクシーも地を蹴った。

ガキィ
ン！！！

2人の武器が交わる
その向こうで、ハガルの瞳がリュクシー

を捕らえていた。

《光の罪人よ 闇に眠る魂を呼び覚まし、利用して捨ておく。
そなたは生の理を乱しているのが、まだ分からないか》

ググッ

！！

全身でハガルの剣を受けるリュクシーに、返事をする余裕などない。

(やはり、強い ！！)

リュクシーもメダリア内では、かなり高度な小刀術を身に付けていた1人だったが、それでもハガルには敵うかどうか。

キンッ

ガキンッ！！

イチシも加勢しようとしたが、騒ぎを嗅ぎつけた軍人たち（恐らく先程2人を襲った部隊の増援だろう）が集まるのに気づき、そつちを片付ける事にした。

ちょうど、溺れた時の記憶が呼び覚まされた事だ 奴らにも、
同じ苦しみを味わってもらおう事しよう。
イチシは増援部隊に、溺のシェイドを放つ。

「ウツ」

「ガッ、ゲホゲホッ」

イチシの《溺》は死に至るほどの威力はないが、足止めには十分だ。

キンッ ガキンッ！！

力で押し負けそうになったリュクシーは、剣筋を避け後退する。
(強い)

《筋は良いようだ。さすがは我が血と連なる者、といったところか
だが》

ガキンッ ギンッ、ギインッ ！！

ハガルは再び猛攻を始め、リュクシーの心の臓への追求を止める事はない。

キンッ……キインッ ！！

剣を交えると全身にハガルのシェイドが響き渡り、その度にリュクシーは武器を落としてしまいそうになるほどの衝撃を受ける。

キンッ

ガキンッ、ドカツッ！！

何度目かの激突時に、リュクシーは弾き飛ばされ尻もちをついた。ハガルがその隙を逃すはずもなく、鋭い剣先がリュクシーを捕らえる
！！

《　そこをどけ》

《いいえ　いいえ、ハガル様》

だが　あの時と同じ、刃からリュクシーを守るかの如く、立ち
はだかつていたのは。

《肉を失えど、私はそなたに剣を向ける事は許されぬ》

《どうか　どうか、ハガル様。この娘の命を奪う事だけは……》

《レミ、どけ。グノーシスを取り返せば、我らも消滅する事ができ
よう》

《どうしても 無理だとおっしゃいますのか》

必死に自分をかばってくれるシティアラ女性

リュクシーは今、やはりこの女性が《母》なのだ……ジンがヘリオンを想うように、自分を想ってくれる存在なのだ。 実感した。

実感したが 彼女は既に、生と決別した存在だった。それが悲しかった。

《そなたがどかぬと言うのなら、私はいつまでも待つぞ。その娘の肉体が朽ち果てる程の永き時でも》

《分かりました 私はこちらを動きませぬ》

2人のシェイド体が睨み合う中、ゴデチヤ軍人たちを片付けたイチシも、リュクシーの元に駆け寄る。

「イチシ、お前は逃げる。勝つ手段が……見つからない」

「バカ言え。 あんたが先に死んだら、何の意味もあるもんか」
ようやく手の届いたリュクシーを、殺させるつもりは毛頭なかった。

《リュクシー、聞きなさい》
突然、レミが小声で囁いた

《今から教える言葉を、ハガル様に向かって言うのです》

そして更に声を潜めると いや、その言葉はリュクシーにしか聞こえなかったに違いない。

レミはシェイドで心に語りかけていた。

「……」

《ハガル様は激高して、直進して来るでしょう。その一撃に耐えたら 右側から、首に斬りつけなさい》

「でも 私は……」

《最後に、水に落とすのです》

レミは娘の横にいる少年を見つめて言う。

（私には できない……！！）

ハガルを打ち破る呪文とは、リュクシーが決して口にしてはならないものだった。

《言いなさい、リュクシー。 生きる為に。私たちはこの世に

あらざる者……そんな者に縛られる必要はないのよ》

「でも ……」

その呪文を口にしたら リュクシーは壊れてしまうかもしれない

い。

今の自分が消えてなくなってしまうかもしれないのだ。

《言いなさい。あなたにはまだ、この世に引き留めてくれる人がいる》

母の言葉に リュクシーはレミとイチシを交互に見た。

「あんたは一撃を全力で受ける。オレが右から斬りつける」

イチシは 知らないからだ。

この言葉を発すれば、リュクシーはもはや言い訳はできない。

「言え、リュクシー。乗り越えろ。あんたはオレと戦うと言ったなら、言え。今を生き延びろ」

それでも それでも。

この禁忌を犯せば、リュクシーは リュクシーは。

全てを理解していた その上で、リュクシーは決断しなければならなかった。

一度ゆっくりと呼吸し、立ち上がる

「 イチシ。サポートしてくれ」

そう リュクシーはイチシを選んだ。

イチシを選び続けるために、今から鬼になる 全てを承知の上で、生きる道を選ぶ。

カラント ！！

リュクシーはナイフを1本投げ捨て 残りのナイフの刃先をハガルへと向けた。
かつて目にした あの最強の捕縛士と同じ構えで。

《 ！！ 》

ハガルの表情に変化が現れた そう、ハガルも知っている。
今蘇るのは、自分を殺した者の残像だ。

ここは護送船の上 目の前に在るは、一匹の獲物。

見渡す限りは海 我が名はソーク＝デュエル。

刃向かう者は抹殺するのみ。

リククシーは大きく息を吸い込むと 禁断の呪文を唱え始めた。

「全てはシュラウドの意思の中 貴様も踊らされているに過ぎ
ん」

あの男は ソーク＝デュエルはきつと、顔の筋肉を動かす事も
せず、言つてのけた。
そして、激高するハガルの姿を冷やかな目で見ていた。

《黙れ！！我らは光に目を潰しはしない！！シティアラは貴様らの支配は受けぬ！！》

ハガルは過去の記憶に取り込まれた リュクシーに最大の敵の姿を重ね、かつての対峙の中に完全に支配された。

《去れ！！ 光の罪人よ！！我が手で葬ってくれる！！》

ソークはきつと、ハガルの決死の攻撃でさえ、軽く受けたに違いないのだ

ガキンッ！！！！！！

ザシュッ

!!

そしてイチシが演じたソークの反撃の一手が、ハガルの首を切り裂く。

《グ

うおおおお!!》

血潮と絶叫と共に、更にソークに斬りかかるうとするハガルにイチシは溺のシェイドをぶつけた。

ザパンッ!!ゴポゴポゴポッ.....

「.....っ!!」

動揺してはならない
反応すらない。

ソークはきつと、ハガルが死に逝く姿に
憎悪の瞳から、光が失われていく姿を見ても
海が赤く染まる
のを見ても、何も感じるはずがない。

（　　っ、無理だ.....!!）

だが、これ以上ソークを演じ続ける事ができずに、リュクシーは顔をそらした。

（無理だ　無理だ!!なぜ無感情でいられる!!人が死に逝く瞬間に　あれだけ残酷な死に様を前にして、どうして平気でい

られる！！）

「もういい、見るな」

吐き気を催してうずくまったりリユクシーを、イチシはそつと抱き締めた。

リユクシーは震えていた　　だが、その本当の理由をイチシは知らなかった。

リユクシーは　　最も忌むべき行為をした。
ソーク「デュエルと同じ事を　　あれだけ嫌悪を感じていた禁忌を犯したのだ。

その事実がリユクシーの心を蝕み、汚染し始める

《顔を上げなさい　　リユクシー、ハガル様を殺したのはあなたではありません。だから　　顔をお上げなさい》

レミの言葉に　　リユクシーは彼女を見た。

《悲しい事だけれど　　ハガル様を……あの方を眠りにつかせて差し上げられるのは、同じ血を持つあなただけだったのかもしれない》

「同じ血　　あの男もあなたの子供なのか。　　ハガルは私の

兄だったのか？」

レミは寂しげに微笑んだだけだった。

《私たちの事は　忘れなさい。私も……行かなければなりません》

レミはイチシに静かに告げた。

《さあ　私を水に落としなさい》

「待ってくれ！話を　……！」

何か　何か聞かなくては。何か話さなくては。

シェイドを知るこの人に　自分を産んだこの女性に。

《何も　必要ありません。あなたの成長を見る事が叶った
これ以上は必要ないのでしょ》

穏やかだけれど、悲しいレミの口調にリュクシーも悟った　これ以上、自分に引き留める事はできない。
してはいけない事なのだ　新たなシェイドを現世に留めてはならない。

（ハガルの言った事はもつともだ　初めから……初めから、シェイドを呼び覚ましてはいけなかったんだ）

リュクシーは　イチシと顔を合わせ、ゆっくりと立ち上がった。

「生きているあなたに　会いたかった。私はもう失いたくない。
大事な人を　失いたくない」

これからは　イチシがきつとそうなる。
リュクシーにとって、かけがえのない人間になる。

「だから　大丈夫だ。私は負けない。《声》に押し潰されたり
しない」

レミの前で、リュクシーは精一杯強がってみせた。
母に未練を与えてはいけない　　2人はここで決別せねばなら
ない。

「イチシ　頼む……」
「ああ」

《我らシティアラの民　　守護者レムノスと運命を共に致しまし
よう》

レミは死の呪文を唱え、独特の祈りの仕草を見せると、地を
彼女の命を吸い込んだ海面を見つめ、飛び込んだ。

「行こう。今は時間が惜しい」

「平気か？」

イチシの問いに、一呼吸置いた後、リュクシーは微笑んだ。

「ああ　大丈夫だ。そう…約束したからな」

「……………」

そんなリュクシーを見て、イチシは何故か妙な表情を浮かべた。

「何だ？」

「何でもないから放っておいてくれ」

イチシは反対を向いて、覗き込もうとするリュクシーを押し返す。

「何だ、気持ち悪い」

「あんたって自分の言動がどう見えるのか、全然気づいてないんだな」

「それは私が向こう見ずで考えなしだって言いたいのか」

イチシはリュクシーを見ていて、急に小恥ずかしい気分になっただけなのだが わざわざ説明なんてしてやるはずがない。

「そんな事言ってないだろ」

「じゃあ、何だ」

食い下がるリュクシーに、イチシはボソッとつぶやいた。

「2人きりになったら教えてやるさ」

その言葉に、男にありがちな良からぬ妄想の類かと勘違いしたリュクシーは、イチシの脛を軽く蹴飛ばした。

「いいから行くぞ！ ジンたちが心配だ」

「いてえ……」

「そんなモノ、大して痛くないだろう！ さっさと行くぞ！！」

リュクシーも、イチシが自分をそういう対象に見ているのだと認識し、妙に恥ずかしい気分になった。

でも きつと、これでいい。

リュクシーはきつと、イチシを受け入れる事ができる。
イチシとなら 触れ合える。愛し合える……

《力》
《
《
《
……

お前を救いたいという気持ちは嘘じゃなかった

こうしてイチシを選んだ今でも、どこかで負い目を感じている

でも この世を彷徨う事が邪悪なら

お前にとっても苦痛でしかなくなるのなら

私はお前を記憶から消さなければならぬんだ

イチシと生きていこうと思う度
像。 まとわりつく存在……その残

オレは救われないなんて思ってたねえ

オレから逃げるために、そいつを選ぶのか

お前にオレを計るなんてできるもんか

オレの気持ちを、お前がどれだけ理解してるって？

消せるもんか ケセルモノカ！！

オレハ オマエガ

だが、その言葉の先はリクシーにまで届かなかった。
完全に拒絶され、カライの想いは封じられた。

（オレは消えねえ このまま消えるわけにはいかねーんだ）

もう手段は選ばない リクシーはカライのものだ。

カライには関係ないのだ

己の生死も、リユクシーの生死も。

（そうだ 関係ない）

今までは、わずかに残っていた人間の良識が邪魔をして気づかなかった。

答えはこんなに簡単だった
り込めばいいのだ。

リユクシーも、こちら側に引きず

ピッ ガッ…ガガ

『 か』

突然、通信が入る だが音声途切れて、よく聞き取れない。

ッ ガッ…ガガ、ガ

『聞こえるか、ゼザ』シアター』
「はい、聞こえます」

新しい命令だろうか 正直、安堵している自分がいた。

これ以上　彼女を見張っていて、何の得があるというのだ。
メダリアにとっても　自分にとっても。

『傍受される危険があるので手短に言う。ウブル地区の科学工場前
に向かえ。君にも作戦に参加してもらう』

「了解しました」
『では通信を終わる』

彼女の抹殺命令ではない　その事実には、ゼザは複雑な感情を抱
いていた。

メダリアは未だ、彼女を　裏切り者を生かしている。それは何
故だ。

何故、自分に　それは、元パートナーだからなのだろうが
こんな無意味とも思える監視をさせるのだ。

「……………」
だが、ようやく事態は発展するらしい。

（何の作戦でも構わない　こんなバカげた任務はもう終わりだ）
無意味な事に時間を浪費する事は、ゼザにとっては苦痛以外の何物
でもなかった。

「……………」
唐突に脳裏に蘇ったのは、《彼女》とそれを求める少年の
人で敵と戦う姿。
2

（監視をさせるという事は オレの変化を試されているのだろ
うな）

ゼザは メダリアで生まれた。
優生学の研究の末、あの研究室で誕生した子供たちは、感情が欠落
している場合が多々あるのは事実だ。

そしてゼザも 確かに、思う。自分には理解し難い感情が存在
している。
だからといって、困った記憶もないのだが。

メダリアの学者たちは、彼女を監視させている間、ゼザの脳はのデ
ータでも集めていたに違いない。

（うつとうしい話だ。そんなデータを取っても、何も出はしない）
ゼザは動揺などしない 《彼女》が自分と正反対の人間である
事は、最初から分かっていた事だ。

見えている世界が違うのも、考えが違うのも、何もかも知っていた。知っていて 受け入れたのだから。

相手を理解したのではない 違うという事実を受け入れたのだ。

だから、別れを受け入れる事にも抵抗などない。敵となれば戦う。

中途な感情など必要ない。 メダリアが求めるのは、分野に秀でた人間だ。

どんな場合にも支配されない冷静さ ゼザが要求されているのはそれだ。

《彼女》たち、外から来た捕縛士たちはこう言うだろう 『己の意志を持て』と。『自分の意志で捕縛士になりたいのか』と。

だが、それは愚問だ。

ゼザたちには この生き方しか用意されていない。だから疑問も感じずに、突き進む事ができる。

それこそが、メダリア人に求められる生き方なのだ。

「……………」

この時、ゼザはまだ認めようとはしなかった。

自分の中に存在する感情を　　そして捕縛士を貫くためには、予想とはかけ離れた激痛を強いられるのだという事を。
認めないままで　　生きていけると思っていた。

EPISODE i - 2

「ホーリー？戻ってたのか」

セントクオリスが擁する巨大研究施設メダリア その廊下で同期の男とすれ違う。

ホーリーは真実を求めて、メダリアに帰還していた。だが、こいつに用はない。

「ちつ。相変わらず、お高いヤツだぜ」

あっさり無視されて舌打ちしたが ホーリーが無言で立ち止まったので、聞こえてしまったかと焦ってしまう。

「な、何だよ。だってお前が無視するから……！！」

癪癪を起こされるかと思い、弁解の言葉を発したが 意外や意外、ホーリーはこっちを見ようとせず、足早に去って行く。

「な、何だ ？珍しい……大災害でも起きんじゃないのか」

「ねえ！ちょっと聞いた！？」

啞然していると、背後からパートナーに声をかけられる。

「何がだよ」

「同期から《Sランク》が出たって！ すごくない！？《S》

なんて、特級捕縛士への審査が行われるのよ！？しかも正式に捕縛士になってから、まだ3ヶ月も経ってないのに！」

「えー、その話、本当！？」

特級捕縛士に継ぐ地位　限りなく有り得ない話に、近くにいた若い捕縛士たちが集まって来た。

「そりゃ、すごいけど　で、誰なんだよ？」

「リユクシーだって、リユクシー！」

「あー、リユクシーかぁ。納得ー、やっぱりお気に入りだったしね」
「そついや、認証式もいなかったよな　既に任務に就いてたって事か？」

「でも、いきなり《S》なんて、何やったのかしら」

ドドドドドッ

！！

「ん？」

「　　ちよつとー！！今の話、どついう事よ！？」

話を聞き付けたホーリーが、ものすごい勢いで駆けて来ると、眼前に迫る。

（あの女が《S》ですって！？　　何なの、それ！！）

逃亡者がどうして、未だ捕縛士の扱いを受けるばかりか、出世までしているのだ？

自分と大差ない同い年の女が、何故そんな扱いを受けるのか、ホーリーには全く理解できなかった。

「ちょっと暴れないでよ、ホーリー！」

「だから、どういう事かって聞いてんのよ！」

「あたしだって知らないわよ！ただ、さっきシュラウド様が」

その名前が出た瞬間、ホーリーは続きの言葉を飲み込む。

「シュラウド様いるの！？ どこに！！」

そうだ、この女に聞いても話は何も解らない リュクシーの事も、ドラセナⅡロナスの事も。

ホーリーはシュラウドに話を聞く為に、メダリアまで戻って来たのだから。

「司令室の前で 」

居場所を聞くと、ホーリーは駆け出した。

「こえっ」

「パートナー、ジラルドだっけ？同情するわね」

能天気な陰口など、今のホーリーの耳には届かなかった。
今やそんな事に時間を割く余裕はないのだ。

（シュラウド様 シュラウド様！！）

最短で司令室まで駆けて来たが、既にシュラウドの姿はなかった。
他に彼がいそうな場所は

シュンツ！！

その時、司令室から珍しい人物が現れた。

（ ソーク様！ ）

慌てて敬礼すると、その後ろに見覚えのある女性の姿があった。

「マディラ様？」

やはり先にメダリアに到着していたか しかし、問いかけたものの、マディラは神妙な顔で押し黙ったままだった。

「マディラ＝キャナリーと面識があるのか」

「あつ…はい。ゴデチャで 」

突然ソークに問いかけられ、ホーリーは少なからず動揺する。

ソーク＝デュエルに声をかけてもらったのは、初めてだった

「……………」

しかし、答えた後のソークは無反応だった。

「あの、失礼ですが、Dr・シユラウドの居場所をご存知でしょうか」

シユラウドの名を口にした瞬間、マディラが顔を上げた

「さあな」

「そうですか」

何だか　マディラの顔が、暗く影を落としているように見えるのは、気のせいだろうか。

（　　そうだ、この2人でもいいわ）

特級捕縛士と呼ばれるこの2人なら、ドラセナⅡロナスについて何か答えてくれるかもしれない。

特にマディラは　深い関わりがあるようだから。

「実は、シユラウド様にお聞きしたい事があって捜していたんです。お二人もご存知なんですか、ドラセナⅡロナス様の事」

「　　何も知らないね。上司の素性に首突っ込むんじゃないよ」
ドラセナⅡロナスの名を口にした途端、マディラが話を遮った。

これ以上、その名を口にするんじゃない　　マディラの瞳はそう威圧していたが、ホーリーは無視した。

「ドラセナ」ロナスとも面識があるのか」

「はい、ゴデチャで」

（ バカめ ）

マディラは心の奥底でそう思ったが、もう手遅れだった。

「なるほどな」

今度は反応が返って来た ドラセナ「ロナスを知る人物というのは少ないのかもしれない。

ソーク「デュエルに少なからず手ごたえを感じて、ホーリーは先を続けた。

「彼が過去に携わった任務について お尋ねしたいのですが。ここで話すのはマズイでしょうから、場所を変えませんか」

「小娘がでしゃばるんじゃないよ。あんたに何ができるってんだ」

「 いいだろう、話とやらを聞こう」

「ソーク」デュエル！」

マディラは抗議の眼差しを向けたが、やはり無駄だったようだ。

（ やったー！ やっぱり何かあるんだ。ドラセナ「ロナスの裏には何かが隠されてる そうに違いないわ！ ）

ソーク「デュエル相手にうまく話が進み、ホーリーは高揚していた。

「もういい　　好きにしな。責任は自分で取るんだね」

マディラは頭を抱え、首を横に振った　　この少女が利用される事になるうとも、それは彼女の責任だ。

ホーリーは自らの命を持って、責任を取らなければならないだろう。だが、ゴデチャでこの少女の習性を垣間見ていたから、この手の思い込みの激しい娘に、手を引かせるのは至難の技だという事も分かっていた。

（それに　　あたしも分かっていたはずだよ。ドラセナを知る者は全て……）

それが必要である事　　十分理解していたはずだ。

全てはドラセナを完全消滅させる為　　犠牲者をこれ以上、増やさない為。

この作戦は、心を殺して成功させなくてはならないのだ。

（そうだ　　心を殺せ。シュラウドの正体も、奴らへの憎悪も、今は関係ない。あたしが真っ先にしなければならぬのは、ドラセ

ナを消滅させる事だ)

シユラウドの顔を思い出す度、腹が煮えるのを感じた あの男
にはまんまと騙された。

考えるだけでも、悔しさが込み上げて来る。

(ドラセナは殺す だけど、あんたらにも覚悟してもらおう)

ソーク・デュエルの背中を見つめ、マディラは決意を新たにした。

「やはり待ち伏せされてるようだな」

追跡される恐れのあるカードは破棄し、徒歩でTV塔の見える位置
まで接近して来た2人は、路地の監視カメラの死角になる地点から、
様子を伺っていた。

「明らかに浮いているのが、何人かいる」

TV塔があるのは人の出入りの激しいオフィス街だったが、何をするでもなく、定位置を徘徊する男たちの姿が。彼らは保護地区の男にしては体が大きく、周りの風景には不釣り合いだ。

「今の所、TV塔に軍用機が出入りした気配はないようだ　　ジ
ンたちはまだ中に保護されているのかもな」

「国が手を引いてるんだろ？TV塔の連中もグルじゃないのか？」

イチシの問いに、リクシーは首を傾いで見せた。

「どうだかな　　このゴデチャは、国家監視機関なるものがあるらしいが。マスコミもその1つだというが……　　実際に機能しているかは怪しいものだな」

監視するのが人間である以上、そこには抜け道が存在するはずだ。完璧などありはしない。コネもあれば、汚職もある。

「機能している事を願うばかりだが　　」
「ジンの事か」

商品価値のあるヘリオンはともかく、ジンへの丁重な扱いを期待するのは無理だった。

既に軍に引き渡されているとしたら、どういう事態になっ
ていても不思議はない。

「まあ、大丈夫だろ。見かけ通り頑丈だぜ、あいつは」
「……………」

まだ 意識してしまう。
イチシと話しながらも、リクシーは雑念を完全に振り払えずにいた。

「おい、オレを見る」

「……ああ、大丈夫だ」

リクシーが少しでも沈黙すると、イチシが自分側へと引き戻してくれる。今の自分がかかなり危うい状態なのは解っていたが、いつかは脱する事ができるだろうという予感のようなモノもあった。

イチシがそばにいれば

「しかし 強行突破は避けたいな。相手はどうも、敵が捕縛士であると認識している可能性もあるようだし」

いくらシェイドを操るといっても、肉体が反応しきれない程の人数、武器で攻められれば、命の危険だつてある。
2人も所詮は、生身の人間なのだから。

「フンフーン 今日はどこ行こつかな〜と」

その時、リユクシーの目の前を、鼻歌交じりの少女が横切った。

「！」

「きゃあ!？」

反射的に彼女の腕をつかんだリユクシーは、そのまま路地へと引つ張り込んだ。

「シツ、静かに。危害は加えない」

「あつ?あなた えーと、リユクシーさん?」

「静かに。名前を呼ぶな」

それは、ジンのカードと異性登録済みの少女だった。

「えっ、何!なににな〜に?」

「……………」

普通は、知り合い程度の女に路地に連れ込まれたら警戒すると思うが 少女はただならぬ事態に脅えるどころか、何かの冒険劇と勘違いしているのか、目を輝かせている。

「カーフェ、お前がここにいるという事は、ジンはTV塔にいるのか？」

どうにか名前を思い出すと、リュクシーは質問を浴びせた。

「うん、表示はあそこになってるよ。え、ジン、何かあったの？」

「あつたかもしれない。それを知りたい」

「え、それでそれで！？カーフェが潜入捜査に行けばいいのね！？」

「……………」

大はしゃぎのカーフェに、リュクシーは閉口してしまう。

「ジンの奴も、変なの引つ掛けたもんだぜ」

保護地区ではこれが一般的なのか？と肩を竦めると、イチシがぼそりとつぶやいた。

「カーフェは変な男たちに追いかけられたりはなかったのか？」

ジンの住居に軍の手入れが入ったのだ 登録済みのカーフェに

手が回っていないはずはない。

それとも この少女は既に軍に命令されて、リュクシーたちを誘き出す為の餌なのだろうか。

「あ、うん。別がないよ。たぶん、この制服のせいじゃないかな」

カーフェは学生服の胸元のリボンをひらひらとして見せた。

「制服？」

「うん」。ウチの学校は、政府関係者しか通えない所だから。大抵の人は、カーフェたち見ると避けてくよ」

カーフェはお得意の能天気な口調で、話を続ける。

「だから、普通は異性登録も学校内で済ますんだけどね。ジンはそんなの全然関係ないみたい。カーフェの事も避けないで、ちゃんと話聞いてくれるし。いいよねえ、ジン」

「あー、カーフェ」

ジンへのノロケ話を始めたカーフェを、リユクシーは遮る。

「つまり、お前はゴデチヤ政府要人の娘なんだな。ならば、ジンには会うな。奴は今、マズイ状況にある。関われば、親の立場が悪くなるぞ」

リユクシーの言った意味が理解できなかったのか、カーフェはしばしの間、きょとんとしていた。

「えー、ヤダ！そんな事言って、リユクシーさん、ジンを取られないだけなんでしょ？」

「……………」

どうも思考の優先順位の異なるカーフェとは、会話が噛み合っていない気がしたリユクシーだった。

「カーフェ、絶対ジンに会ったから。止めても行くからねっ！」
「止めねーから、行つて来い」

リクシーに代わつて、イチシが諦めの言葉を発した　　が、カーフェは何故かその場を離れず、2人の顔を様子見ている。

「　　何だ？」

「ねえねえー、2人もジンに会いたいんでしょう？協力してあげようか？」

『協力？』

思わず、2人の声が重なった。

「うん、そう！協力してあげるよ！　　キャツ、何か楽しい！」

カーフェは声を上げて笑ったかと思うと、答えを待たずに、自分のカードを取り出して誰かと通信を始めた。

「お、おい　　」
「いいから、いいからー」

「お、似合うじゃんー？オレのサイズでバッチリ」
「うんうん、似合ってる、似合ってるー！」「リュクシーさんは？まだ？」

先刻まで、リュクシーとイチシが身を潜めていた路地は、カ
ーフェと同じ制服姿の若者で溢れていた。

「お」

着替え終えたリュクシーが姿を現すと、何故か皆、絶句する。

「な、中々似合ってたじゃん？」
「でも、何か犯罪っぽいカンジだな……」
「ちよつとスカート短かったかな？仕方ないか、サイズが小さいのかも」

男子学生は頬を赤らめて、スカートからスラリと伸びたリュクシー

の素足を盗み見ている。

「ちょっとー、あたしが代わりにコレ着るの？足、長いよー。引きずっちゃうって」

「じゃあ、その店で何か買ってきたげるよ」

代わりにリュクシーが着ていた服を、カーフェの友人が着る予定だったのだが、ウエストが細くて足が長いという、どう考えてもはけない作りになっているようだ。

「……………」

リュクシーはといえば、制服姿のイチシを見て、吹き出したいのを堪えるのに必死だった。

はつきり言って、似合っていない。

いや、外見には似合っていないかもしれないのだが、イチシの雰囲気ではないと言いたいのだ。

襟元をキチンと締めているのは、何となく柄じゃない。

（ ところで、何で私はカーフェの言いなりになってるんだ…
…）

この少女の口車に乗ってしまった自分の愚かさを思い、リュクシーは頭が痛くなった。

確かにリュクシーが制服を借りた少女は、肌の色は浅黒く黒髪で、パツと見には入れ替わっているのはバレないかもしれない。

（だが身長は小柄で、実物を並べると、リュクシーとは似ても似つかないのだが）

カードには、胸上の写真しか掲載されていないからだ。

イチシが服を交換した相手も、黄色人種で黒髪、大体の特徴は似ている。

「よっし！じゃ、行こう！皆、この2人を囲んで歩いてね」
カーフェの掛け声と同時に、その他大勢の友人たちが、リュクシーたちを取り囲み、TV塔に向かって歩き出す。

「カーフェ、あたしらはどーすんの？」

「えーっと、どうしょ。適当に時間潰してて」

入れ替わった2人に、また曖昧な言葉を残してカーフェは進んでいく。

「おい　　大丈夫なのか？」

イチシがリュクシーに囁く。

「恐らく　　TV塔には警備員が立っているはずだ。カーフェは登録相手だから、面会を求めれば何とかなるかもしれないが、その他は入れないだろうな」

「そしたら、オレらが引き付けといてやるから、勝手に入っちゃえよ」

「楽しみ、誰か芸能人とか会えるかな？」

周りにいるカーフェの友人たちが、やはり彼女と同じお気楽な口調で口々に答える。

「……………」
結局の所、強行突破する羽目になるだろうと、イチシと2人顔を見合わせるばかりだった。

EPISODE i - 3

TV塔の1階は、正面がガラス張りの広い空間だった

イメージキャラクターを飾り付けたエントランス、大型モニターを埋め込んだ側壁、それらを通り抜けると見栄えの良い女性たちが待ち構えるフロントがある。

「おゝ、へゝ、こんなもんか」

「あたし、エウブド地区のTV塔なら行った事あるけど、ココは初めて」

ゴデチャでは知らぬ者のいない制服に身を包んだ一団は一際目立っていたが、周りにいた人々は皆、示し合わせたかのように遠巻きになっっていく。

彼らの先頭に立つ少女　カーフェは、フロントまで真っ直ぐ歩いて行くと、受付嬢に向かって口を開いた。

「えつとゝ、登録した相手と会いたいんですけど」

リククシーたちと言えば、周りを学生たちにガードされ、少し離れた所でその様子を見ていた。

「やっぱ芸能人は正面玄関からは、入って来ねーのかな？」

「今日は　　の生放送あるじゃん！　　とかに会えるかもよ！

「？」

キヨロキヨロと辺りを見回す彼らは、制服の効果も倍増して、かなり悪目立ちしていた。

「登録相手の氏名とカードナンバーを教えてくださいませんか？」

「ジン」ヒナセ。え〜っと、1204dtws930sd432だよ」

「確認いたしますので、少々お待ち下さい。後ろの方たちは、お連れ様ですか？」

「うん、友達」

「では、お連れ様のカードも確認させていただきますね」

受付嬢がそう言うと、リクシーの胸ポケットにあったカードが、ピピッと機械音を発した。

（これでバレなければいいが）

登録写真とよく見比べれば、別人である事は丸解りだ。

リクシーは、内心ヒヤヒヤしていたのだが

「では、少々お待ち下さい」

受付嬢は、カードが正規の物であることを確認しただけで、中身まではチェックしなかったようだ。

制服効果は絶大、という事なのだろうか。

（ずさんな管理で助かったな）

リクシーはイチシと視線を交え、頷いてみせた。

場所が場所だけに、そう簡単に面会の希望が通るとは思えなかったが、相手は要人の子供たちだ。邪険に扱う事もできないと判断したのか、門前払いは免れたようだ。

「エル、OKっぽいよー」

カーフェが振り返り、こっちを見て言うので、しばし沈黙する。

そうだ、リクシーの名前は今、エレフィン＝ダタロイド。

イチシは、ツール＝ヒロカミだった。

「で、どこにいるんだ？」

「こちらです」

その時、フロントの責任者なのか、受付嬢が男を連れて戻って来た。

「これはこれは。何でも、ダタロイド議員のお嬢様までいらっ

しやるとか。お父上に面会ですか？」

シ　　ン……。

リユクシーは隣にいた少年にわき腹をつつかれ、この場で返事をすべき《お嬢様》が自分である事に気づく。

「あー、しかしですね、あいにくダタロイド議員はご覧の通り、報道番組に生出演中として　　」

しかし男は、お嬢様の返事を待たずに先を続ける。

男の視線の先には、壁面の大型モニター　映っていたのは、この局のニュースだった。

どうやらダタロイド議員というのは、画面内で熱弁しているスーツ姿の男の事らしい。

「放送が終わるまで、一般見学コースでも回られてはいかがですか？」

「おっしやゝ！」

「やったー！行く！行く行きまゝす！」

中に入れると聞き、若者たちが歓声を上げる。

本当はあまり大声を上げたり、飛び跳ねたりしないほしいのだが
何故なら調和を図るために、リユクシーやイチシも同じ行動

を取らなくてはいけなくなるからだ。

「では、フロントで本日付の入館証を受け取って下さい。有効期限は入館証に記載されている通り、当日限りとなっておりますので」

ご大層な名前とは裏腹に、受付嬢によって配られた入館証とは、ただの厚紙に日付とテレビ塔のキャラクターが印字されただけの簡単なモノだった。

（いいのか、こんなに簡単で？ 制服に騙されてるという事か）

リクシーとて、強行突破を望んでいたわけではないが ころもあつけないと拍子抜けだった。

自分の足を見下ろし、その短すぎるスカートを見て、嘆息する。

「ところでジンは？ カーフェ、ジンに会いに来ただけど！」

うまく話を誤魔化したつもりだったのか、カーフェが話をジンに押し戻したのを見て、男は短く舌打ちした。

「え？ ああ、登録相手との面会でしたね。しかし、私どもと致しましては、そういうったご用件での面会にご遠慮いただいております。特殊業界だけに、誰でも簡単に面会を許すわけにも参りませんので。お相手は職員ですか？ 勤務が終わるまでお待ち下さい」

制服に惑わされて、ここにいる不審者2人を見逃しているくせに、

よく舌の回る事だ

「違うよ！ジンはこんな所で働いてないもん！ジンだって、外来客でしょ！何で呼び出しかけてくれないの！」

「え、あ　カードで直接ご本人と交信されてみては？」

「交信OFFになってるんだもん！だから、放送かけて呼び出してよ」

「いえ、生放送中ですので、それは　」

言葉を濁し続ける男に、カーフェは全く引く気配がない。

「と、とにかく　少々、お待ちを。上の者にまずは確認を取ってみますので……」

「えー、まだ待たされるのー！？」

「あ、お連れの方たちは、どうぞ見学コースにお進み下さい」

男は議員の娘に、うつろな愛想笑いを浮かべると、上司を呼びに奥へと引っ込んで行った。

「あ、ではご案内いたしますので　私について来て下さい」

「じゃ、ワリーな、カーフェ。オレら先行くから。また後でな！」
「相手と会えたら、また連絡してよ」

受付嬢の言葉に、カーフェの友人たちは薄情なセリフを残して、彼女の後ろを付いて行く。

「うん、気を付けてね」

置いていかれるカーフェは、少々ふくれっ面でリュクシーを見て言っただ。

軽く手を上げて応えようと、リュクシーも歩を進めた。

「まずは、報道ブースからご案内しますね」

「ねー、お姉さん、芸能人とかやつば見た事あんでしょ？」

「っていうか、お姉さん、年いくつ？今日は登録済み？」

受付嬢に俗っぽい質問を浴びせると、彼女は苦笑していた。

「仕事中だから、あんまり個人的なお話すると怒られちゃうのよ」

「あ、じゃあ、仕事何時に終わんの？オレ、待ってるし」

「残念ながら、今日は登録済みの。また今度ね」

人気が少なくなったら、この団体から離れようと思って様子を伺っているのだが 案内されていくエリアは、報道関係を扱う部署らしく、先刻のドーム外壁爆破事件、少女の人身売買などの新鮮で物騒なニュースを放送する為に、人が激しく行き来し、ごった返していた。

「はい、質問！ニュースで見たけど、保護した女の子ってココに
いんの？」

「いいえ、ここは階も低いし、スタッフたちが頻繁に出入りする場所だから。もっと上層の安全な所にいると思うわ」

「上層だと何で安全なの？」

「20階より上は、カードを特別登録している役職の高い職員しか、
入れないようになってるのよ」

「フーン。あつ、見ろよ、女子アナだ！！」

「大丈夫か？」

イチシが耳元で囁くので、リュクシーはハッと我に返った。

「いや 何か……」

「何だ？」

リュクシーは辺りを見回した　生放送に翻弄されるスタッフたち
が、乱雑に散らかったデスクとモニターで溢れたエリアを、忙し
なく移動している

（視線が　　）

「……………」
「やめろ、考えるな」

原因を、《残像》を無視しきれない事にあると思ったイチシは、リ
ュクシーの腕をきつくつかむと、その痛みで現実を引き戻そうとす
る。

「違う　　今までより、もっと……………」
激しい違和感を感じ、リュクシーは視線を彷徨わせる。

（何だ　　どこから見ている？）

ザ、ザザ

ガガ、ピ

ガ、

突然、周りに配置されているモニターの画面が一斉に乱れ、ノイズが入る。

《ただ今、音声が途切れました。失礼致しました》

画面内で原稿を読んでいたアナウンサーが謝罪する。

ザ、ガガガ

ピ、ビビ

ガザザ……、

しかし、ノイズは断続的に画像を乱している

「何だ？おい、どうにかしろ！」

歪むモニターを見て、スタッフの誰かが声を上げた。

「やってるんですが」

「何か……変じゃない？コレ」

そして別の不安げな声も上がる。

（しまった）

リュクシーは食い入るように画面を見つめ、己の愚かさを呪った。

ノイズと共に、何か黒い影のようなモノが、画面内を点滅しながら動いているのが分かる

（私は 《あいつ》の領域に、自ら近づいてしまったのか！）

電波の中にいるモノの正体に気づいたリュクシーは、四方をモニターに囲まれた今の状況に気づき、絶望に近い感覚を知る。

「見るな！あんたが奴を具現化させる！！」
イチシも気づいた リュクシーを胸に抱え、自身も視線をそらす。

「何か 気持ち悪いわ。この影……」
「人間みたいにも でも、羽？何なの、コレは……」

（ダメだ 私たちが目を背けたとしても……）

「何なんだ、この化け物は……」

（そんな言葉 やめろ……！）
誰かがその者を《化け物》と呼んだ瞬間、背中に悪寒が走る。

バ・ケ・モ・ノ

化け物だ！！！！

その場にいる人間たちの恐怖心を吸収し、影は具現化を始める。
人々が連想する、影の魔人の姿へと

影はリュクシーの正面にあつた大型モニターから煙のように立ち上り、新たな肉体を具現化し始める。
その体はどす黒く、ただ不安と恐怖を駆り立てる《人であらざるモノ》だった。

だが　その身に帯びている電撃の波が、かつての……リュクシーが知っていた者を思い出させて胸が痛む。

（そう　胸が痛い……）

リュクシーは　イチシにつかまる手に力を込める。

これが　リュクシーが選んだ者。そして捨てた者
どちらを選んだとしても、自分は後悔した事だろう。

「キャアアア……！」

「おい、カメラ回ってるんだろっな！」

逃げ出す者、この光景を映像に残そうとする者　魔人はその中
心で、まるで深呼吸でもしているような動作で、電撃のシェイドを
体の中心に集めていた。

（　　　来る……！）

狙いが自分に定まっている事実には、リュクシーは叫んだ。

「イチシ、避ける！防御ではムリだ……！」

ケタ違いのシェイドに、2人は逃げるしか方法がなかった。

バチバチバチッ！！！！！！！！！

ほとばしる光の線が、リククシー目がけて放たれる。

イチシはリククシーを抱えたまま、間一髪の所で電撃をかわした。

「チッ！！」

イチシは攻撃を避けながら　　巻き添えを食らった人間たちがバタバタと倒れるのを見て、忌々しげに舌打ちした。

（あれを浴びたら、即死だ　　）

リククシーも、シェイドに耐性のない人間たちの最期を思い、魔人の恐ろしさを再確認する。

バチッ、バチ、チッ！！！！！！！！

だが魔人は既に、第二撃の準備にとりかかっていた。

複数の人間のイメージによって得た姿 恐怖の象徴。

電波の飛び交うこの環境、人間という粹を捨てたモノの強さ
どれもが魔人を最強とさせていた。

《人》の姿だった時のシェイドの容量を遥かに超える力を、リユク
シーを手に入れる為だけに使ってくる。

（これがお前を捨てた私への罰か ）

リユクシーは 魔人と化した《カライ》を見た。

そこには、あのふてぶてしい笑みや、アンバランスな感情、何もかもが無くなっていた。

（私は 間違っていたのか？カライ……）

スベテヲ

コ

ワ

セ

破

壊

そこにあるのは、かつて恐怖を覚えたどす黒い意識
理解し得
ない負の感情。

リユクシーがカライをあの意識の中へ突き落としたのだ。

「 奴を殺そう」

その時、イチシが言った。

「二度とあなたに憑きまとわないように
今この場で殺そう」

「無理だ」
「無理じゃない」

やっとの事が出た言葉を、イチシは否定した。

「あいつは死の瞬間を 電撃のシェイドを乗り越えた」
「無理じゃない」

「あいつは、人に手を下されたわけじゃない 」
「無理じゃない」

「ハガルとは違う 私は2ヶ月も、カライと一緒にいた」
「やるんだ」

「あいつのシェイドを浴びた 夢も見た」
「やるんだ、リユクシー」

イチシの瞳はいつだって強かった そして、リユクシーに選ばれる。
どちらかを捨てるくらいなら、自分が消え去りたいと思うほどの、
厳しい選択でさえも

バチツツ、バチチツツ！！！！！！！！

一方、魔人にもはや迷いはないようだった　リュクシーを死の世界へ引きずり込もうという意識を、肌突き刺さんばかりに感じていた。

「やるんだ　あんたが呼び覚ましたシェイドだ。あんたが葬れ。そう決めたんだろう」

「……………！！！」

そう、イチシの言う通り、リュクシーは決心したはずだったなのに、何故こんなにも迷う。何故、カライの顔ばかりが蘇る

「　オレはあんたの味方だ。だから恐れるな」
イチシはリュクシーをきつく抱き締めた　彼女を幻想の世界から断ち切るべく、自分の熱を伝えたかった。

「イチシ」

リュクシーにだって分かっていた　魔人はもう、自分が名を呼んだくらいでは、元の姿を取り戻せないだろう。

リュクシーが死ぬか、魔人が消滅するか。

早く決着を付けねば、この場にいる人間の全てがショック死するだろう。

バチバチバチッ！！！！！！

その時、自分を見つめるイチシの後ろに、充電を終えた魔人が再びリュクシー目掛けて電撃を放つのが見えた。

「くっ　　！！」

避け切れないと判断したリクシーは、あの時の
カライが防
御シールドに焼かれた時の記憶を蘇らせた。

（ 壁よ！！！ ）

自身のシェイドで見えない壁を創り出し、魔人の電撃を受け止める

バチバチバチッ！！！！！！！

「ああああっ！！！！」
「ぐっ……………！！！」

だが電撃と接触した瞬間、あの頃に支配されていた意識が、脳裏に入り込んで来る　　リユクシーをかばったイチシも、あまりの衝撃にうなり声を上げた。

（　　持ちこたえられない！！）
リユクシー１人のシェイドでは、到底支えきれない　　だが隣には、全てを分かち合うと誓った新しいパートナーがいた。

「くっ……！！」
リユクシーがシェイドの防壁を創り出しているのが分かった、イチシも自身のシェイドのイメージをそれに重ね合わせる。

「長くは持たないぜ　　この後はどうするんだ」
「……逃げるしかない」

「まだそんな事を言ってるのか！！」
イチシは声を荒げて言ったが、リユクシーは本当に知らないのだ
カライの死の瞬間を。

「私は見ていないんだ　　気絶してしまったから……」

「くっ……じゃあ、他に方法を考えるしかない！」

死の瞬間を再現するには、リクシーでは役不足だった　電撃
が直接の死亡原因だったとしたら、それを無効化してしまったカラ
イに効果があるとは思えない。

（　銃だ。カライは銃で撃たれた事がある……！）

まだ1%でも、人であった時の意識が残っているのなら　撃た
れて倒れた記憶を呼び起こせるかもしれない。

「　おい！！どこかに銃はないのか！？」

リクシーは、遠巻きにしながらカメラを回している男に怒鳴りつ
けた。

「そんな化け物に銃なんて効くのか！？」

「あるのか、ないのか！！」

電撃のシェイドの重みを全身に感じながら、リクシーは声を張り
上げた。

「あるぞ！その奥の棚に……でも、鍵がかかって　」

終わりまで聞かずに、リユクシーはイチシと顔を見合わせた。

「一気にはねのけるぞ。武器を取って、モニターのない場所へ移動しよう」

「よし やるぞ」

破 壊！！！！

2人は全身をシェイドで覆うと、魔人のシェイドを天井に向かって叩きつけた。
ターゲットをそれた電撃は、一瞬にして霧散するかのようにかき消える。

ダッ

!!

肉体機能を限界まで高め、リユクシーは銃のある棚まで瞬時に移動すると、手刀で鉄製の扉を砕いた。

「うわああ!!」

棚の陰に隠れていた男が、リユクシーの背中に迫る魔人におののき、腰を抜かしていた。

「魔人を葬る！」

誰も付いて来るな!!」

カメラを担いで後を付いて来かねないTV塔の人間たちに一喝し、リユクシーたちは報道ブースを飛び出し、廊下を走り始めた。

電撃の魔人はその身をモニターの中にねじり込んだかと思うと、獲物のそばのモニターへと移動し、あっという間に2人の前に現れる。カチャ。リクシーは照準を合わし、モニターから上半身だけ抜け出た魔人に向けて連射する。

ドウンッ、ドウンッ！！！！バリッッ！！！！！！

だが銃弾はモニターを破壊しただけで、魔人は背後のモニターに移動した後だった。

「走れ！人気のない場所へ！！」

「どうする、TV塔から出るのか！？」

前方にあるモニターを銃で破壊しつつ長い廊下を走りながら、イチシは問う。

「ダメだ！外にはビルの側壁に巨大モニターが埋め込まれている！」

それに外へ出るには、あのエントランスを通らなければならない

入り口にあった大型モニターも危険だ。
別の通用口を捜している余裕はなかった。

2人は道なりに走り、天井が高く設計された食堂らしきエリアへと
出た

「……………」

そこにあったのは、高さが3メートルはあろうかという巨大モニタ
ー…………その横には、中型サイズのモニターがぎっしりと配置されて
いた。

バチンッッッ！！！

画面が波打つと、電のシェイドが食堂中に響き渡る。

「あっ ？」

「うぐっ」

ただそれだけで、食堂に残っていた人間たちがバタバタと倒れていく。

チツツ、バチチツツツ、バチン！！

オ マ エ ヲ テ ニ
イ レ ル

TV塔の中に、モニターのない空間など端から存在しなかったのだ

各画面からこちらを見据えている魔人の姿。

目などないただの黒い塊だったが、リユクシーは金縛りにあったように動けずにいた。

「イチシ」

お互いの手を取り、そのシェイドを確かめる
余力はほとんど残っていなかった。

バチッ、バチバチバチッ!!!

これが最後だ

残された力を全て注ぎ込み、リユクシーは銃を

構えイチシが手を添えた。

心の奥底では、2人とも分かっていた　銃は効かない。
魔人の肉体が滅びたその時間を再現させなければ、勝ち目はない。

バチバチバチツツツツ！！！！

（カライ　　お前は勝てない。私が死んでも、お前のモノにはならない）

たとえ肉体が滅びても　　心は誰にも支配されない。
リュクシーは覚悟を決めて、魔人に向けて銃弾を放った。

EPISODE i - 4

「ポイントに到着。目標物を捕らえました。ただ今から作戦を開始します」

画面の向こうにいるシュラウドにそう報告したが、彼は微動だにせず短く答えたただだった。

「始める」

「はっ！！」

操縦席の一对の捕縛士が敬礼のポーズを取ると、メディアとの通信はブツンと切れた。

「全員、体を固定！急降下する！」

なぜ

お前は逃げようとしらない？

ウ・ル・サ・イ

ダ
マ
レ

なぜ
何も感じないフリをする

ダ
マ
レ

消える

私の名を呼べ

お前を救ってやろう

ダマレダマレダマレダマレダマレキエテナクナレキサマナド
ニダレガキエロキエロキエロキエロオレノナカカラデタイケ
ニドトスガヲアラワスナアトカタモナクシヨウメツシテシマエダ
レガキサマニスクワレタマルカイイカゲンキエロキエテナクナレ
キサマハダレダ

私の名を呼べ

知っているはずだ

「ねえ、ジン ねえってば！起きて！いい加減、起きてよ！！」

この間まで隔離されていた部屋とは別の応接室のソファに寝かされていたヘリオンは、部屋にあるテレビ画面を見ながら、横で大いびきをかいているジンをゆさゆさと揺さぶった。

「ぐおーっ、ふごーっ」

「……もう！起きろってば！！」

ようやく痺れ薬の抜けて来た体を起こし、床の上で（体がソファに乗らなかったので、床上に直に寝かせられていたようだ）仰向けに寝転がっているジンの腹に乗り上がる。

ペチペチペチペチッ！！！！

そして何度も往復で平手打ちを浴びせるが、ジンは一向に目覚める気配を見せない。

「こうなったら　ごめんね、ジン」

ヘリオンは辺りを見回し、部屋の隅に丁度いい高さの台を発見した
上に飾ってある花瓶をどかせると、ジンの近くにまで引きず
って来る。

そして、おもむろに台の上に飛び乗ると、勢いをつけてジンの腹に
飛び降りた。

「　　ぐおっ！！！！げえっ、ゲホッ！！！！」

突然、呼吸が出来なくなったジンは、咳き込みながら飛び起きた。

「　　やった！起きた！ねえ、ジン見て！！」

「な、何だ今のは　　はっ、そっいゃ、ヘル……ヘル！！」

「ここにいるよ！ねえ見て！」

「無事なんだな！！」

「ジン、アレ見て！！イチシじゃないの！？」

自分を力任せに抱き締め、話を聞いていない父の姿に、ヘリオンは
声を張り上げた。

「　　イチシ？」

「何か様子が変だよ！」

それは、2人がいるこのTV塔内部の映像のようだった。

《ちゃんと撮ってるんだろうな！カメラ、逃すなよ！！》
《キャー！！！！誰か！！》

悲鳴と逃げ惑う人々の中　　イチシがいた。イチシはそばにいる肌の麻黒い少女と会話しながら、目に見えない何かから逃げているようだった。

「リユーとイチシ！？オレたちを助けに来てくれたのか！？」

そのはずだったが　　明らかに様子がおかしい。

2人が見えない何かと……例えば、映像には残らない《何か》と戦っているのが、船上で亡霊たちと遭遇したジンには瞬時に理解できた。

「くそつ　　とにかく行くぞ！」

ジンはまずは合流すべきと立ち上がろうとしたが、本来は対魔獣に

使われる麻酔針を腕に受けて、数時間寝たくらいではまだ体と言う事を聞かなかった。

「しっかり！ボクに捕まってー！」

ヘリオンがその小さい体でジンを支えようとするが、どう考えても無理があった。

「くそっ、こんな時に」

役立たずな自分を呪いかけたその時、ふっと室内の明度が落ちた。

ウィ……ウィイイイイイイイン

！！！

「なっ……!!」

壁一枚分がガラス張りになっている応接室　さっきまでは、そこにはお世辞でもきれいとは言えない灰色の空が映っていたのだが、それを塗り潰していたのは、今まで見た事もないような巨大な戦闘機だった。

防弾ガラスをも通す激しい騒音　　戦闘機は空中で体を水平に保ちながら、こちらに接近してくる。

「ぶつかる!!」

ヘリオンが叫んだが、戦闘機はTV塔スレスレの位置で、空中待機を続けている　　その時、下層部の扉が開くと、中から人間が姿を現した。

複数の男女　　彼らは皆、大人と子供の間で、青い髪をしていた。

彼らは何か合図をしたかと思うと、ゆうに4メートルは離れている戦闘機の扉から、こちらに向かって次々とジャンプした。

「あっ!？」

ビッツ……ガシャ

ンッツ！！！！！

集団自殺かとも思えたその行動だが、遙か下の地面に叩きつけられた者は一人もおらず、彼らは自らの体で防弾ガラスを突き破って、2人のいる応接室に侵入して来た。

「A班、向かえ！敵を仕留めろ！！」

その言葉に何名かが応接室から飛び出し、残りがこの部屋に残る。

「ホーリー、確認しろ」

「……ヘル、オレの後ろにいる！いいな！！」

青い髪の少年少女　その正体を知っていたジンは娘を背後に隠し、彼らの目的を推し量ろうとする。

（リユーの奴を捕まえに来たのか？……オレたちを人質にするつもりなのか？）

「ちょっと。後ろのガキの顔を見せてもらっわよ！」

「てめえら、人買いか！？ヘルには指一本触れさせねえぞ！！！！」

「誰が人買いだったのよ！いいから、どいて！！」

その声に聞き覚えのあったヘリオンは、ジンの後ろから顔を覗かせた。

「あんた……あの時の？」

軍事基地から逃げ出した時に出逢った ヘリオンをこのTV塔まで送り届けた……青髪の少女。

「そうよ、ホーリーよ。 間違いない、この娘よ」

「よし、保護しろ！！」

ホーリーが頷くと、その仲間がヘリオンをジンから奪い取るうと手を伸ばす。

「 何しやがる！！何だ、ヘル！！こいつ、知ってんのか！？」
「ボクが売られそうになった時 助けてもらったんだ」

「だからって、何なんだ！こいつはどこにもやらねえぞ！！！」
威嚇し続けるジンに、捕縛士たちは強攻策に出ようとする気配が感じられた。

「ガキ、あんたに聞かなくちゃならない事があるのよ。あんたの故郷を襲った《バケモノ》についてね。 隣の男は恋人？悪いけど、一緒に面倒見切れないのよね」

「オレはこいつの父親だ！！！！何だ！？カレドを襲った犯人が何だ

つてんだ!？」

ホーリーの言葉に、ジンも少なからず興味を覚えた
カレド壊滅について、今更捕縛士が何を調べるといふのか？

「父親も目撃者か？
いいだろう、とりあえず2人とも保護しろ」

「一々命令しないでよね、あたしはあんたの部下じゃないわ」
この作戦の責任者である一番年上の捕縛士に向かってホーリーは不満げに言い放つ。

「ホーリー、口答えするな!! 作戦を失敗させるわけにはいかないのよ!!」

(うるさいわね)
腹の底でそう思ったが、これ以上時間をかけるのも危険だったので、黙っていた。

ここは他国の保護地区の中
そこにセントクオリスの軍用機が入り込んだとあれば、国際問題にもなりかねない。
(まあそうなった所で、セントクオリスがゴデチャに負けるという事はあるえないとは思っているが 戦争すれば勝つと解っているのに、無駄なエネルギー消費に手を出すというのもバカげた話だ)

「さあ、大人しくして下さい」

捕縛士の一人が視界から消えたと思った瞬間、ジンとヘリオンは首筋に衝撃を受け、声もなく倒れた。

「よし、オレたちは退避するぞ！レッソ、ラテラ、2人でこの大男を背負って飛べ！落ちるなよ！」

「了解。 見る、A班の方も始まったみたいだぜ」

レッソが示した先のモニター画面には、古く質感の悪い映像が途切れ途切れに映し出されていた
その場にいた捕縛士たちは皆、ホーリーも含めて一瞬画面に見入った。

「本当に あんな任務、あいつに出来るのか？」

「シュラウド様がそう言ったんだ。出来るのさ」

シュラウド直々の命令 それを受けるのが、彼ら捕縛士にとってどんなに名誉な事か。

今回の作戦で、その名誉が与えられたのが自分でない事に、彼らは嫉妬した。

「さあ、戻るわよ」

ホーリーは言った。

近いうちに自分も シュラウドに選ばれてみせる。

嫉妬だけでは、上へは行けない 真実を見つけないければ。

ドゥンッッッ

ドゥウンッ……！！！！

2人のシェイドが込められた弾丸が、魔人へと伸びていく
妙な感覚に支配され、まるでこのまま時間が停止してしまうのではと
思っくらい、ゆっくりとゆっくりと

（コレは カライの……シェイド体の感じている時間の過ぎ方
なのか？）

自分の時間は何もかもが動かず 動く弾道を見る事で、かろう
じて此処が生ある現の世界である事を知る。

（ 引きずられてたまるか）

リュクシーは歯を食いしばり、腹に力を入れた。

（私はまだ生きている……！）

次に瞬きした瞬間、リュクシーの時間が動き出す

ビシッ

ビシッ、バリッ……！！！！！！

だが弾丸はダメージを与える事なく敵を突き抜け、魔人の背後にある一番巨大なモニターを破壊しただけに終わった。

破
壊

魔人は大きく空気を吸い込むような仕草を見せ、その直後リュクシーに向かって死の電撃を放つ。その光景はやはり時間が止まったかのようにスローで、リュクシーは再び魔人の時に支配される。

（やはり、ダメか、！？）

絶望がリュクシーを襲いかけた時、魔人の背後にある複数のモニターに、古い。そして確かに見覚えのある、でも今更思い出したくもない映像が映し出されているのに気づく。

（アレは、！！！！）

《…ザ　今の悪魔…!!》

《　、　だと言ったはずだ》

《違う!!今は　　》

破
壊

(ラジエ
ンダの映像
　　!!)
(

あの映像が何故今?

メダリアしかない、捕縛士が近くにいる。メダリアがカライを殺そうとしている　　ゼザがそばにいる！！！！！！

映像が視界に入った一瞬で、様々な思考が頭の中を駆け巡りその隙が魔人のシェイドを避ける暇を与えなかった。

いや　　リュクシーは既に完全に支配されていたのか？
1年前の、あの時間に

「ああああああ！！！！！！」
「リュクシー！！！！」

無防備にシェイドの直撃を受けたリュクシーを、信じられない思いでイチシは自身のシェイドで防護する。

「ぐっ　　！！！！」

「や、やめろ、イチシ 私をかばうな!!」

メダリアがカライを抹殺しようと考えている以上 リュクシー
は死の瞬間を再現させる為の駒でしかない。

留めを刺した別の人間が存在するはずだ。

「バカ言うな つ!!!!」

しかし、イチシはリュクシーをかばい続ける。

命続く限り イチシは自分を守ろうとするだろう…それを感じ
たリュクシーは、もう一度自身のシェイドを奮い立たせた。

(気絶してはならない カライの最期をこの目で見るんだ!!
!)

それがカライと真に決別する方法 あの時のように、気を失っ
てはならない!

「イチシ、お前も見てくれ !!!」
「!?!」

過去の映像に引き込まれない第三者に目撃させる事も、気休めなが
らもシェイド汚染を防ぐ手段となる。リュクシーは目の前にいる魔
人ではなく、過去を映し出すモニターへと視線を合わせた。

《ああああああ!!!》

過去のリュクシーも、カライの意識に絶叫を上げている

《リュクシー！！！！》

そして横にいるのは 青髪鮮やかなリュクシーのパートナー…
…ゼザ。

カライ、やめろ！

おい、カライを止めるんだ！

その二人は人質にしろ！

こうなったら、一気に攻め落とせ！

（ああ、この声までは覚えている この先だ！！！！）

「あれは あんたか……！！？」

自分が目撃する事の意味が分からず、イチシはつぶやく

（どこだ どこから現れる！！長くは これ以上は、持た
ない！！）

カライの暴走を止めた者 カライを殺した者。近くにいるはず
だ！！

バリンッッッ！！！

弾痕でヒビの入った巨大モニターが砕け、飛び散る液晶と共にその者は現れた。

「……………」

その姿を見て リュクシーは息を呑む。

幾度も幾度も考えた 彼を再び目にした時……自分は何を感じ、何を想うのだろう。

《ミスエル、カライを止めて!!!!》

ミスエル!!

蘇る声

記憶。

だがこれは、リュクシーの記憶ではない。

リュクシーの横にいた ゼザの記憶。
カライを殺した 《ミスエル》の記憶。

その2つは今、ここに在る！！

ザンッッ！！！

《ぐおおおおお！！！！》

空中を舞う捕縛士 彼の剣から放たれた一閃が、魔人を真つ二
つに切り裂いた。

ダンッ！！！！

シェイドを携えた捕縛士 彼が着地した後、リユクシーとの間
を遮っていた影の魔人の体がゆっくりと傾く。

（ああ、ゼザ　再び巡り合った……）

これは誰の支配する時間だろう。
魔人がゆつくりと倒れて行き、その後ろに佇むゼザの姿が徐々に露になる

ドザッッッ！！！！！！

魔人の肉体は、地に着いた瞬間、霧散していった

そして目の前にあるのは、新たな敵　　リュクシーが牙向く事叶わぬ、唯一の敵。

（敵　　敵、敵だ）

リュクシーは電撃のシェイドを浴び、膝の力が抜け、立つ事もままならぬ体をどうにかして動かそうとした。

「……………」

ドサッ……！！

しかし、逆に倒れ込んでそれきり動けなくなる。

ハガルと戦い、カライのシェイドを浴び、リユクシーは己のシェイドの限界値をとうに超えていた。

カツ、ジャリッ、ジャリッ

冷たい石の床で、液晶の欠片が踏み砕かれる足音が響くのは感じた。そして、何もかもが白くなった。

EPISODE 5

さあ、己が従えるシェイドをとれ

どうした

掴まねば捕縛士にはなれないぞ

そう、解っていた

あのシェイドに触れた時から

これが、何者の《命》であるか

このシェイドの力を制し、奮うということは

さういふは……

ガバッ！！！！！！

「っ

」

夢の中にいる自分は幻のはずなのに　この胸に残る不快感は何
なのだろう。吐き気を催し、ゼザは左手で口を覆った。

「起きたか、ゼザ」

背後に、3期上の捕縛士が立っているのに気づき、ゼザは瞬時に表
情を消した。

「このまま目覚めないかと思っただけ。大物を仕留めた後ってのは、
そのまま永眠しちまうヤツも多いからな」

「……………」
「お、なんだ。別に深い意味はねーよ。言葉通りだ、気にすんな」

「……………」
ゼザが自分の言葉に嫌悪感を抱いたと思ったのか、彼は一人で弁解した。

「フツ」
そして、突然微笑を浮かべる。

「何かおかしいのか」
ゼザは簡易ベッドから起き上がると、緩められていた胸元をキツチリと締め直した。

（ここは メダリアには未だ到着していないということか）

ゼザが寝かされていたのは、母艦の仮眠室だった。
そう長く眠っていたわけではないらしい。

「いや、噂通りのヤツだと思ってな。こりゃ確かに、固くて手強そうだ」
「……………」

この男　　確か名前は《レアデス》と言ったか。
彼と一緒にいるこの狭い空間が、自分を苛立たせている事に気づく。

そして、その理由も瞬時に思い至る。

似ているのだ　　豊かな表情、人を惹きつける風貌、そして己の
存在を当たり前として、光る場所を歩き続ける者。
自分とは　　正反対の世界を生きている者。

「医務室にいるぜ」

「何の話だ」

「何って　　お前のパートナーの話さ」

予想通りの答えが返って来て、ゼザはさらに苛立ちを募らせる。

「オレにパートナーはいない」

「そう言っなよ。　　死にそうだぜ？」

ゼザは仮眠室にある小さな窓から、外の様子を伺う。

眼下には、一面に淀んだ灰色の雲が広がっていた。

「任務は果たした。それとも、次の仕事の話でも持ってきたのか」
「そーじゃねえさ。ただ、何かお前が無理してるみてーだから、オレは……」

「くだらない憶測だ。用が済んだら出て行ってくれ」
「頑固だなあ……後悔したって知らねえぜ？」

「同じ事を何度も言わせるな」

レアデスは肩を竦めてみせると、やれやれと呟きながら去っていった。

「貴様も消えろ」

ゼザは背後に在る《気配》に、苦々しげにつぶやいた。

「お前が私に話しかけたのは初めてだな」

先ほどまでゼザが寝かされていたベッドの上に、純白の羽を背に生やした女が座っていた。

今更、この事実を否定してもどうにもなるまい　　ゼザはこのシ
エイドを使って、仕事を果たしたのだから。
解ってはいたが　　忌々しい存在であるには違いなかった。

「私の問いに答える気になったのか」

ミスエルは続けて問う。
何度も何度も　　ゼザに繰り返したあの問いを。

「お前は何故否定する？自分の
「黙れ！！！」」

バキンッッッ！！！！

自分でも驚くほどの叫びだった 無意識にシェイドの込められ
た左手は、覗き窓を打ち砕き、室内の気圧が下がる。

ビーツ、ビーツ、ビーツ

非常を知らせるブザーが鳴り、ゼザは我に返った。

バタンッ！！！！

「何だ!!!」

数人の捕縛士たちが、慌てて駆けつける

「何やってんだ、ゼザ」シアター！」

「操縦席。シャッターを閉めろ。S28室の左から2番目の窓だ」

さほどの大事ではないと知り、人騒がせなと嘆息すると、操縦席に通信をして皆去っていく。

「ゼザ」シアター、目覚めたか。医務室に來い」

しかし入れ替わりにメダリアの研究者が入ってくると、短くそう告げる。

「向かいます」

どうしても、ゼザを彼女と対面させたいらしい ゼザは表情も
変えずに言っただけだ。

彼女などに翻弄されない事が判明すれば、無意味な監視命令も解除されるだろう。

調べなければ調べるがいい それで、好奇心が収まるのならば。

「 貴様も来る気か」

背を向けたまま、ゼザは尋ねた。

《どうやら私はお前から離れられぬらしい ならば聞くまでもないだろう》

ゼザにつきまとう亡霊は、透き通った声で淡々と答えた。

《あの娘を必ず救う事だ。お前が目覚めるには、あの娘が必要だ》
そして、さらに苛立ちを誘う言葉を続ける

（『救う』だと オレが、彼女を？）

あまりの戯言に、ゼザは嘲笑するしかなかった。

「っ

」

ゆっくりと重たい瞼を持ち上げると、眩しい光が飛び込んで来た。

その光量に耐え切れず、イチシは両腕で顔を覆う

「意識が戻ったようだな」

見知らぬ男の声 自分は今、どこにいるのだ？
自分はまだ油断ならぬ状況である事に気づいたイチシは、瞬時に飛び起きた。

「慌てるな まだ、普通に動くのも辛いはずだ」
「それに、逃げようもないさ」

（早く、早く慣れる ）

未だ白い世界しか映そうとしな自分の目に、イチシは苛立ちを覚えた。

だが徐々に 自分がいる世界の真実が浮かび上がる。
それはイチシが今まで見た事も触れた事もないような場所だった。

「ほう、精神汚染はされていないようだな。中々強靱な精神力だ」
「ふむ シェイドを扱うだけの事はある。まあ、幼稚で機能性に欠ける消費の仕方だな」

見た事もないような機械に囲まれ その中央にある手術台のよ
うなものに、イチシは寝かされていた。

手術台の周りには、何かの研究者だろうか 白衣を着た中年男
たちが6人立っていて、機械の付近に青髪の少年少女が1組
部屋の出入り口にもう1組。

（こいつらは、メダリアの捕縛士か オレたちは捕まったのか）

オレ、た・ち だが、リュクシーの姿はどこにも見当たら
ない。

ダンッッッ！！！！！！

イチシは一番近くにいた白衣の首をつかむと、手術台の上に叩き付
けた。

「げえほっつ！……！！！」

「リュクシーはどこだ……！！！」

逃亡者として既に抹殺されているのでは
不吉な思いがイチシの胸によぎる。

「ヤメなさい」

だが次の瞬間、イチシは四方から武器を突きつけられていた。

刀であつたり、銃であつたり、鎌であつたり
武器の姿は様々だったが、共通すべきは埋め込まれた妖しい輝きを放つ石。
これが誰かの魂である事は、イチシには当然のように理解できた。

「まだ生きてるわ。だから、その手を離しなさい」
「信用できるか」

あつさり受け入れられるはずもなく
イチシは腕にシェイドを込めた。

「げえっ……ううっ
！！！」

更にきつく首を絞められて、白衣の顔は見る見るうちに赤くなる。

「ならば、ここで殺すぞ。リュクシーと対面する事はできなくなるな」

「……………」

「うううう……………!!」

ドサッ……………

赤から青に変わりかけたその時、イチシは手を離れた。

「げえほっ、ぐえっ、げえほっ……………!!」

「大丈夫か!!おい、医務室へ!!」

「……………」

「外の連中はこれだから困るわ。状況判断ができない」

未だ武器を下ろそうとしない捕縛士の少女は見下したような目でそう言った。

それはイチシたち、外世界の人間が嫌悪を覚える 自分を《人間》と認識しようとしない、偏見の眼差しだった。

こういった連中の中で育って、よくリュクシーはまともでいられたものだ

シュンツッ!!

「イチシ、来な」

扉が開いた瞬間、その人物を確認しない内に名を呼ばれた。

「貴様は……」

「一秒も無駄にするんじゃない。リュクシーの命はそれほど長く持たないよ」

ゴデチャの港で出会った捕縛士 マディラ＝キャナリーが真実を言っているのは、そのシェイドから伝わった。

「オレが、助ける どこだ、リュクシーは……!」
「付いて来い」

リュクシーが侵されているのは、肉体の傷ではない ならば、イチシ自身のシェイドを分け与える事ができれば、救う事もできよう。

イチシには、己のシェイド全てを与える覚悟だっただけ 自分に彼女を救えぬはずがないと心底から思っていた。

「ここだ」

シュンッッ!!!

マディラがその部屋に踏み入れる前に、イチシは中に飛び込んだ。
た。

「
!？」

だが、その部屋は。

さきほどの部屋と似たような機械の壁に囲まれた中に、際立つのは
巨大なモニター、その前に佇むのは 一人の男。

男 ?

不気味なほど静かなシェイドだ いや、冷たい……そこには《
何も感情がない》のだ。

青髪の連中と違い、メダリアの制服を着てはいなかったが、シェイ
ドの剣を帯剣している姿から、男も捕縛士であるに違いない。

しかも、数段格上の いや、この男は別格だろう……この殺伐
としたシェイドには、攻撃の糸口さえ見つからない。

額を冷や汗が伝うのが分かる。

この捕縛士の前では、自分は虫ケラも同じだ。

「時間がない。イチシ、あんたは選択しなくちゃならないよ」

マディラの声に、イチシは呼吸さえ忘れていた事に気づく。

「リユクシーはどこだ……!!」

「メダリアの作戦の駒になるか。あんたが自らの意思で従うのなら、リユクシーは逃がしてやろう」

「セントクオリスの駒になれだ……!!」

「あんたが拒否しても、メダリアからは逃れられない。あんたは『依りまし』をしていたね。その体には、凶悪なシェイドが宿ろうとしている。何の事だか分かるだろう。あんたも見たはずだ」

マディラの体の周りを 見覚えのあるシェイドが……赤い記憶が巡っているのが解る。

ドクンッ

イチシに襲い掛かった狂ったような笑いを浮かべた少年
少年の姿をした化け物。
いや、

「メダリアはあの者を滅する。」

解るか、その意味が。依りま

しの少年よ
「

解らぬほど イチシは愚かではなかった。
この運命からは逃れられぬと 捕縛士たちの瞳がそう語っていた。

（リクシーは……化け物を直接見てはいない オレから多少
の影響は受けたにしても、まだ間に合う……）

「従うなら、あの娘を救うチャンスをやろう。リクシーの前に連れて行ってやる」

この少年がどう答えるか マディラには解っていたが、それでも聞くしかなかった。

人を想う心 愛しさという感情。
マディラたちが失ってしまったそれを抱いているこの少年を
ドラセナを殺す為に、利用して葬る。

死人の為に、生き人を犠牲にする 何かが狂っている。
いつから世界は、狂い始めてしまったのか。

「時間がない 早く連れて行け！！！」

イチシは叫んだ。

答えはこれしかない 選ばれたんじゃない。
イチシが望む答えもこれだったはずだ。リュクシーを守る。自分に
可能な限りの方法で、彼女を守る。

自分は逃れられそうもない鎖から、せめてリュクシーだけは解き放
つてみせる。

「 来い」

マディラは今初めて、全身全霊でドラセナが憎いと思った
いや、かつてドラセナだった《残像》が。
微かに残っていた愛は、依りましの少年の決意の前に、霧散していった。

（リユクシーに道は用意してやろう　生き延びる道を。それが
あんたの決意に対する、あたしの誠意だ）

メダリアに灼き殺される　その事実を受け入れたイチシに、マ
ディラもそつと誰にも言えない決意を固めた。

それほどまでに、マディラたちの死の記憶はおぞましく苦しいもの
だった。

全てを承知の上で、今なお前を見据えて歩く少年に心動かされぬほ
ど、マディラはまだ化け物ではなかったのだ。

「マデイラ様！ たった今、心停止しました」
「どけ！！」

医務室に着いた瞬間、治療にあたっていた医師からリュクシーが死亡したとの宣告を受ける。

イチシは医師を突き飛ばすと、リュクシーに駆け寄った。

裸体で横たえられたリュクシーは、体に様々な管を取り付けられ、血の気のない顔をしていた。

「どけ、電気ショックを 」
「いや 二人だけにしてやれ」

「はっ ！？」

「死亡させていいんですか？」

「しかし、シユラウド様からきつく、絶対殺すなど

マディラの言葉に、医師たちは次々に声を上げる。

「いいから、出な！！シエイドの精神汚染者に電気ショック与えた所で、生存率が散々なのは知ってるだろう！！」

壊れたのは肉体でなく、心　再び心臓を動かせたとしても、死に逝く心を留める事はできない。

「は、はあ」

「出るってんだ、早く！！」

マディラは医師たちを蹴飛ばすと、自分も医務室を後にした。

医務室は壁の上部と天井がガラス貼りになっており、外から様子が伺えるようになっていた　医師たちはデータだけは取ろうと、外からリユクシーに接続された機械に数値をチェックする。

マディラも医務室の外2階に移動して、リユクシーの生命力を2人の行く末を見届ける事にした。

カツツ、カツツ、カツツ

背後に人影を感じ、マディラは少しだけ視線を投げかけた。そこには、純白の羽根を持つシェイドを従えた青髪の少年が立っていた。

リクシーの様子を見物に來たのか、その後ろには捕縛士の少年少女たちがぞろぞろと姿を現した。

マディラの存在に気づくと、少年は敬礼してみせる

だが彼がマディラの興味を引く事はなく、マディラはゆっくりと視線を戻した。

（生き延びるんだ、リクシー。シェイドに食われる人間ばかりでない事を証明してくれ）

そうでなければ ドラセナを滅せたとしても、世界はいずれ闇に飲み込まれるだろう。

「リュクシー！！目を開けてオレを見る　　！！！」

ぐったりと横たわる体を抱き起こし、イチシはリュクシーを抱き締めた。

「オレを感じる　　！！死ぬのは早すぎる！！！！」

全身を持てる限りのシェイドで包み、イチシは何度も何度も口付けた。

「目を開ける！……！」

ドンシッ！……！

「オレの名を呼べ！……！」

ドンシッ！……！

「リユクシー！……！」

ドンシッ！……！

「けふっ……」

何度目かに心臓を叩いた時、リュクシーの口から小さく息が漏れた。

「!!」

胸元に耳を押し付けると　微かに聞こえた。

「リュクシー……解るか？オレのシェイドが　!!」

しかし相変わらず顔の筋肉はぴくりとも動かず、体からは力が抜けたままだ。

「……………!!」

確かに　2人にはまだ、何の記憶もなかった。

死の淵に立ったリユクシーを呼び戻せるだけの、生の記憶
触
れ合った時間、感覚。全てはこれからだったのに

「死ぬな　　死ぬな！！！」

再び弱まる鼓動に、イチシは全身のシェイドを込めて口付けする事
しかできなかった。

（あんたがオレを愛しているのなら　　気づいてくれ！！逝くな
！！！！！！）

リユクシーを死にいたらしめようとする暗く恐ろしい意志　　そ
れを打ち消す以上の、強い想いがここにある事を。

（気づけ　　飲まれるな、リユクシー！！！！）

「う……」

今 声が漏れなかったか。

イチシの頬に、弱々しい息がかからなかったか？

「そつだ、目を開ける ！！」

ぴくっ イチシの声に反応して、リュクシーのまぶたが微かに痙攣する。

「リュクシー……！！」

目を開けると…………イチシの泣きそうな顔がそこ
にあった。

いや、近すぎてよく見えない 激しく口付けされて、呼吸も思
うようにできない。

「イチ、シ……？」
「ああ オレだ」

「お前の声が 聞こえた」

リクシーはずっしりと重い腕を伸ばし、イチシの背中にしがみつ
いた。

「私を 呼んでいた」

リクシーの瞳に映る自分の姿を見て 自らの意志でイチシを
抱き締める彼女の熱を感じて……
イチシの中の全ての感情が、止め処もなく湧き上がるのを感じた。

「ちょっとちょっと……こいつら、最後まで行っちゃうんじゃないの……!？」

「な、なんか後輩のそういう現場目撃すんのって、ドキドキすんな

……」

「バカ！何まじまじと見てんのよ！！」

「だ、だってさあ　　目が勝手にそっちに……」

「医務室の方からは、こっち見えてねーからなあ……ギャラリーがいるとも知らないで、まあ」

思わぬ展開を目にして、少年少女たちは頬を赤らめつつも、しっかりとその光景に見入っていた。

「マデイラ様！もう中断させますよ！！貴重な実験体が妊娠でもしたら困ります」

「覚醒は済んだようだ、好きにしろ」

妊娠　これから一人で逃げ延びようとするには、それはリユクシーにとって大きな負担となる。

イチシにはかわいそうだが、止むを得ぬだろう。

ブチンッ！！

「いや、このまま続けさせる」

突然モニターの電源が入り、シュラウドの顔が映し出される。

「何を企んでいる？」

思惑がないはずがないと、マディラはモニター越しにシュラウドを睨み付けた。

「生まれるものは、放っておく事だ。それは新たな実験体となる」

（あたしらには　もはや何も生み出す事ができないからか。しかし…）

せつかくイチシがドラセナのシェイドを一人で背負う決意をしたのに、2人の間に子供が出来ては　　ドラセナに逃げ道を作る事にはなるまいか。

（いや　　リュクシーにあの《役目》を負わせる以上、生き延びるという事は、ドラセナの完全消滅を意味する。子供と共に死ぬか、子供と共に生き延びるか……2つに1つしかないだろう）

全ては なるようになるしかないだろう。
あの2人の子供なら、きつと……死人を乗り越える強さを持てるかもしれない。

そもそも 今の時代、健常者であつても子供を作るという行為には低い確率が伴う。
この2人にそれが成立したとしたら それはきつと意味のある事なのかもしれない。

（あたしは、見たいさ シェイドの呪いに打ち勝てる人間の誕生を。死人だから無責任にそう言える。あんたの苦勞は予測できても、そう思うさ……）

そして シュラウドよ。

お前は2人の子に、討たれるがいい。

リククシーが成さずとも、2人の子がそれを果たすだろう。
2人の意志を継ぐ子が、それを果たすだろう

EPISODE i - 6

リククシーはぼんやりと宙を見つめていた。

視界に映るのは、どこか見覚えのある天井　　リククシーは体を横にしていたが、起き上がるうという思考が働かなかった。体中が、ただただ重くだるかった。

瞬きする度に、色んな記憶が断片的に脳裏を過ぎる。

黒い魔人に追われ、TV塔を駆ける自分　　魔人が滅びた瞬間。
魔人の次に現れた、敵　　そして意識は途切れる。

その繰り返しの中に、ハガルの死に様、イチシの顔、カライの笑い
色んなモノが、リククシーの中で浮かんでは消える。

パタッ……

その時、何か温かいモノがリュクシーの体に触れた。

リュクシーはゆっくりと首を左に傾ける　　思っように動こうとしない体でも、この動作なら苦もなかった。

（　　　イチシ……）

隣でイチシが寝ていた。リュクシーは腕を伸ばし、そつと頬を撫でる

「！」

船上の時と違い眠りが浅かったのか、イチシは触れた途端、覚醒し

た。

「……オレが分かるか？」

リュクシーの顔を覗きこみ、イチシは静かに言った。

ゆっくりと頷くと、痛いほどにきつく抱き締められる。

だがその痛みが心地よかった それはまだ生きているという証
だったから。

ここがリュクシーの帰るべき場所なのだという証だったから

シュンツッ！！！

「お前ら、無事か……！」

突然、部屋のドアが開いたかと思うと、聞いた覚えのある声が飛び込んできた。

「って、うおおおっ……！！す、すまん！！」

（この声は　　そうだ、ジンだ）

この時ようやく、リユクシーは体を起こそうという意識が芽生え実行に移す　　そして、やけに動揺した姿のジンを発見する。
ジンの背後には、ほぼ隠れてしまっているが一人の少女が立っていた。

「な、何やってんだよ、イチシ……！」

「　　ヘル、お前は見るんじゃない……！」

動揺する二人の姿に、リュクシーはふと自分の体を見下ろし全裸なのに気づき、ぎょっとした。

「これ、着てろ」

イチシが何か布切れのようなモノを放ってきた。それはイチシが着ているのと同じ、布切れを前合わせで簡単に留めただけの、手術衣のようなモノだった。

（これは　　）

自分がどこにいるかを把握し、リュクシーはぼやけた頭を2、3度叩き、意識を集中させようとした。

「ジン、ヘリオン。お前たちもメダリアに捕まったのか……」

「やっぱりあの連中は捕縛士だったんだな」

リュクシーと一瞬だけ目が合い、ヘリオンは疑心の眼差しを浮かべると父の背に隠れる。

その原因は　　自分の髪を一房つかみ、ライトに透かして見て納

得がいった。

黒く染めたはずの髪が、元の色を取り戻していた。

ヘリオンからしてみれば、リユクシーは得体が知れない女に違いない。

「すまないな」

「ん？何でお前が謝るんだ？」

短く言ったりリユクシーに、ジンは怪訝な表情を浮かべた。

「一度捕まってしまったら 私には、お前たちを逃がす手段がない」

メダリアに捕まった 肉体を抹殺される事がないのは既に分かっていた。

ならば メダリアはリユクシーを洗脳し直し、別の人格を植えつける気なのかもしれない。

いや それならばまだいい。

最悪なのは、ジンやヘリオンを人質にして、今のリユクシーの人格のまま、メダリアに従わせるという方法だった。

（だが、きっと結末は《最悪》なのだろうな）

「その事だが あんたが寝ている間に、オレが交渉した」

その時、イチシが思いも寄らない言葉を口にした。

「交渉 ？メダリアとか？」

「オレとあんたが作戦に協力すれば、ジンとヘリオンはランドクレ
スに移住させてもいいってな」

（やはり 人質にする気か）

しかしランドクレスとは セントクオリスを毛嫌いしている国
であるはずであつたが。
セントクオリスを解しての移住者など、受け入れるとは到底思えな
い。

最も情報を偽ればいくらでも可能ではあつたが そこまで労力
を割いて、ジンたち親子をランドクレスに移住させるという代償と
は何なのだ。
それにリユクシーでなく、イチシと交渉した点も何かが引っかつ
た

「お前！！そんな事して、お前らはどうなるんだ！？大体作戦って言っても生きて帰れる保障なんてねえだろう！」

「これしかねーんだ！！」

イチシは声を荒げてジンを黙らせると、3人を見回して言った。

「別に死ぬ気なんて欠片もないぜ……作戦の地もランドクレスらしい。仕事が終われば、後は勝手にしろという話だ」

「胡散臭いには違いないが」

メダリアは信用ならない。これだけははっきり言えた。

「……イチシの言う通り、それしか方法はなさそうだ」

リュクシーは部屋を見回した。ここは、かつてのメダリアと同じ。

24時間監視され、自由のない実験体……

シュンツ！

「悪い話でもないさ」

再び扉が開くと　　マディラ＝キャナリーが現れた。

「……」

あれだけシュラウドを毛嫌いしていたマディラがメダリアの軍艦にいる　　その不自然さに、リユクシーは眉間にしわを寄せた。

「　　作戦とは何だ。セントクオリスはランドクレスに何をしかけるつもりだ」

「それは言えない。だがランドクレス潜入の為に、イチシには治療を受けてもらう。カタス病を発症している者は、入国審査の対象にすらならないからね」

「……………！」

イチシの命が延びる　　その事実には多少の喜びを感じたのは確かだったが……カタス病の治療には莫大な資金が必要だ。

そうまでしてイチシを利用したい作戦とは、一体何なのだ。

「 イチシ！カクス病って……」

ヘリオンが驚いて声を漏らした。

「ああ どっちにしろ、オレはそう長くない。どんなに危険な仕事だとしても、生き残りさえすれば…この女の言う通り悪い話じゃない」

「お前がやる気なら、オレはもう何も言わねえ……」

イチシが生き延びる最後のチャンス それが分かったから、ジンは言葉を飲み込んだ。

「……………」

リユクシーとイチシの歴史は浅い。お互いの事など、知らない事だらけだった。

だが分かる。イチシは何かを隠している。

そして彼は決意している。この秘密は誰にも漏らすまいと

「リユクシー、あんたの口からも聞いときたいね。《自分の意志で》メダリアに協力するか否か」

マディラの問いに、リユクシーは目の前にいる捕縛士を睨み付けた。

「そうやってメダリアは全て自分の意志で選んだんだと洗脳していく。汚いやり方だ」

全ての道を断っておきながら 選ばざるを得ない状況を作り上げておきながら。

お前は自分の意志で選んだのだと、刷り込ませる。

「だったら今死んでもいいんだよ。好きにしな」

そう ただ一つ残る抜け道は、全てを放棄する事だった。

「 やるな」

死を選べば、メダリアに屈服する事になる。

「私を生かす道を用意した事を後悔させてやる」

自分を貫く嫌悪の眼差し 憎しみでもいい。それが生きる意志に繋がるならば。

いつかこの娘がシユラウドを倒す者へと変貌するならば、マ
ディラの望みも果たされよう。

（生きているからこそ 可能性がある。生き延びろ、リュクシ
ー。生きて真実を突き止める）

マディラでは叶わない　この身は既に、偽りの姿。
捨てきれぬ感情に囚われた、ただの幻

「イチシが治療している間、あんたはシェイドを回復させな。ラン
ドクレス潜入には色々と下準備が必要なようだし、ゆっくり
といってもできないだろうが、養生するんだね」

リユクシーは乗り越えられるだろうか。

マディラが味わった　あの苦しくておぞましい呪われた瞬間を。

逃れる事のできなかった、《死》という化け物を。

（できなければ　あんたもソーク＝デュエルに斬られるだけだ）

「よお、リユクシー」

トレーニングルームから出て来たリユクシーを待ち伏せしていた人物がいた。

「レアデスカ」

何期か上の捕縛士だった 子供の頃、一緒に行動していた記憶がある。

彼が捕縛士になってからは、全く交流は絶えていたのだが。

「なあ、聞きたいんだけどさ」
「なんだ」

リユクシーの監視役はこのレアデスカ そんな事を思いながら
問い返す。

「随分と早いご出世うらやましい限りですが、何をやったのか教え

てくくない?」

「……………」

レアデスの言葉の意味が分からず、リユクシーは返す言葉に詰まった。

「何だ　知らないのか?」

「…………何の話だ」

リユクシーはレアデスの次の言葉に自分の耳を疑った。

「何って　お前、今《S》だぜ?何も聞いてないのかよ?」
「……………」

S　その言葉の意味は、リユクシーの知るあの《S》なのだろうか。

「そう。つまり」

レアデスはリユクシーを指すと、ニツコリと微笑んだ。

「オレなんかより、ずっとお偉いさんてわけだ。てか、口調は変えないとダメか？　ま、公式の場でなきゃ今まで通りでいいよな」

バシッ！！

汗を拭いていたタオルを床に叩き付けると、リユクシーは言った。

「　　シュラウドはどこだ」

「そりゃ無理だな」

間髪入れずに否定したレアデスを睨み上げ、リユクシーは言った。

「お前の判断など聞いていない。マディラはどこだ」

「何だ、期待外れか」

前に立ちはだかるレアデスを押しのけ、そのまま行こうとしたが、彼がつぶやいたその意味深な台詞が、リユクシーの興味を引いた。

それはまるで、「お前なら何か知っていると聞いたのに」という意味に聞こえたのだ。

「……レアデス。お前、何を考えている？」

レアデスは質問には答えなかった。

その整った顔から、魅力的な笑みを漏らしたただけだった

猜疑の眼差しを向けていたリュクシーは、この笑みに気を殺がれてしまう。

そういえば昔からそうだった

この男はその万人受けするであろう非の打ち所のない容姿と屈託のない笑顔を武器に、相手の警戒を解いてしまうのが得意なのだ。

実際、リュクシーが知るレアデスという少年は、性格も人から好かれるものだった。

いや、中には全てにおいて完璧な所が返って反感を買うのだと言う人物も多いのだろうが、そういった意見はただのやつかみとして流されてしまうくらい、レアデスには味方が多かった。

だが、それは3年以上前の話だ。

リユクシーより3年程早く捕縛士となり、色々なものを見たであろう彼は、もはや昔のよく知っていた少年ではない。

背もリユクシーより遥かに高く、かなりの手練れを感じさせる研ぎ澄まされたシェイド、少年は遅しく成長していた。

（この男は私の知っているレアデスとは違う）

この悪意など微塵も感じられない笑顔の裏で、何を考えているのか全く得体が知れないし、決して油断して良い相手ではなかった。

「この話の続きはランドクレスでな」

ここでは、話がメダリアに筒抜けだから　と、レアデスは軽くウィンクして見せた。

「で　シュラウド様には面会は不可だぜ。今回の任務はマディラ・キャナリー・ソーキューデュエルの二人が指揮を執る。シュラウド様は一切関知しないそうだ」

「何だそれは」

メダリア最高責任者であるシュラウドが《一切関知しない》とは、どういう事か。

（シュラウドは シュラウドの過去に何か関わりがあるのか？）

メダリアドームの完成と同時に、そのトップへと納まった謎の男。
。

《シュラウド》という男の過去を、末端の捕縛士たちは誰も知らない
い メダリアの研究員の間では、いくつかの噂が流れているよ
うだったが、どれも信憑性のあるものではなかった。

だがその謎の多い男を捕縛士たちは崇拜し、彼の為にその身を捧げ
戦う 何故そんなバカげた事ができるのか、リクシーには全
く理解できなかった。

（元々シュラウドは人前にあまり姿を現さず、陰で捕縛士たちを動
かしていたが ）

リクシーたちに手伝わせる任務とやらは、シュラウドにとって何
か都合の悪い事情があるのかもしれない。

「まあ、今回がそれだけ特殊な任務って事さ。今までの魔獣狩りや
偽人道支援とは全く違う」

リユクシーが考えている事を読んだのか、レアデスは色んな意味を含めて言葉を選んでるのが感じられた。

「やっぱり思った通り お前とはうまくやれそうだな」
「……………」

レアデスにとって、リユクシーの反応は予想通りの嬉しいものだっ
たようだが、リユクシーにとっては胡散臭い相手であるには違いな
かった。

「子供の頃に付き合いがあったからといって、馴れ馴れしいのは止
めてもらおう」

「ま、今はそれが正しい反応だろうな。尻の軽い女は好みじゃない」
「………… お前の好みなどどうでもいい」

あくまで冷たく言い放つリユクシーに気分を害した様子は微塵もな
く、レアデスにはこやかに言った。

「そうだな、よく知らない人間には心を許さない方がいい。相手を
信用するには、それなりの時間を必要とするもんだ」

「お前を信用する気はない。必要もない。 そこをどけ。私は
マディラの元へ行く……………」

グイッ ドンッッ！！！！

これ以上の会話を続ける気はなく、横を通り過ぎようとしたリュクシーの腕を、レアデスはいきなり捻り上げ、壁に背中を叩きつける。

「お前はまだガキだな 一つ教えておく。信用するしないと、魅かれ合うかどーかは別問題なんだぜ。あいにくとな」

「っ 何が言いたい……」

未だシェイドの回復が思うようでないリュクシーは、レアデスの体をはねのける事ができない

「お前の彼氏は、どこぞの飼い犬なのかもしれないとは思わないか？」

「それはイチシの事を言っているのか」

抵抗すればするほど、レアデスの力は強くなり、つかまれた箇所のが骨が軋むのを感じた。

「思い当たる事はないか？よく考えてみる」

「何故私にこんな真似をする お前には何も関係ないはずだ」

お互いの息がかかるくらい間近でレアデスの瞳を覗き込むとこの男には二面性がある事をリュクシーは悟った。

にこやかな笑顔を武器に、色んな場面を要領よく乗り越えてはいる

が、内面はひどく冷静で計算高い男なのかもしれない。

「見込みがありそうだから試してるのさ、オレは。お前の可能性をな」

「失せろ その手をどけないと、お前の喉を噛み切つてやる！」

「どけ」

その時、背後からイチシの声が聞こえたと同時に、レアデスの体が吹っ飛んだ。

ドサッッッ！！！！

「おっと」

3mほど廊下を飛ばされ床に叩きつけられたレアデス だがそんなに大層なダメージを受けた様子はなく、次の瞬間には身軽に起き上がってみせた。

「彼氏のご登場か」

殴られた頬を擦るレアデス。

大して堪えていないと思ったが、彼の整った顔が見事に大ダメージを受けていた。

「大丈夫か」

「お前こそ　治療はうまくいったのか？まだ安静にしていなければ……」

「オレの事はいい。今はあんたの話だ」

イチシは今までずっと、カラス病の治療の為にリユクシーたちから隔離されていた。

この軍艦に閉じ込められてから約1ヶ月弱　久しぶりに見たイ

チシの姿は、少し痩せて見えた。

(……)

治療は順調に進んでいるのだろうか　イチシは病を克服できるのだろうか。

その顔を見た瞬間、色んな感情がリユクシーの中を駆け巡る。

「あーあ、何て顔だリユクシー。お前、そんなんじゃこの先持たないぜ？」

「まだいたのか。とつとと失せる」

ひどい顔をしていると言われ、リユクシーはさらにむっとしたが、これ以上レアデスと関わりたくない気持ちをイチシが代弁してくれた。

「おい、お前。警戒する相手が違うぜ？リユクシーのパートナーはオレじゃない」

シェイドを身にまとい威嚇するイチシに臆する事もなく、レアデスは再び意図の見えぬ挑発を繰り返す。

（こいつはまた余計な事を　　どういつつもりだ）

リユクシーとイチシの間に波風を立てる事が目的としか思えない発言の数々　　彼が垣間見せる《敵意》が誰へ向けてのものが全く分からない。

「まあ、いい。全てはランドクレスに着いてから、だ」

「失せる」

イチシが短く言うと、レアデスはようやく去っていった。

「……」

リユクシーは、レアデスが消えた通路の先を見つめた。

マディラ「キャナリから聞かされた《仕事》とは、とある捕縛士の抹殺

それが如何に若い捕縛士を大勢そろえたところで、簡単には済まない仕事だという事は分かっている。

相手は《ドラセナ》ロナス》

特級捕縛士の一人。

リユクシーは気づいていた 《イチシ》を利用しようとする事
実からして、相手は生身の人間などではない。

死してなお、シェイドの色褪せないモノ。

《人》という枠を超えた、かつて《人》であったモノ

メダリアは、イチシをシェイド体の器にして、葬り去るつもりなのだ。

人質を取られ、イチシは自らの意思で決断したのだろう イチシならきつとそうだ。

普段は構われるのを嫌がる素振りをしていても、本当は人一倍身内を気にかけている事を知ってしまったリユクシーは、メダリアの卑劣なやり方に腹が煮えるのを感じた。

（イチシは私にジンとヘリオンを託し、一人で死ぬつもりかもしれない）

大いに有り得る事だ。

カラス病によって一度人生を諦めているイチシは、一人犠牲となる道を選ぶかもしれない。

（ジンとヘリオンは必ず逃がす。でも）

リュクシーはイチシに振り返り、その目をまっすぐと見据えた。

「行こう 体力は温存しておかないとな。半端な仕事じゃない。気を抜くと死ぬからな」

リュクシーはイチシと生きると決めた。

イチシの決意はどうあろうとそれが今のリュクシーの偽りない心だった。

EPISODE i - 7

「窮屈でやってられねえな…首が苦しい…」

メダリアから渡された服に着替えたジンは、肩をぐるぐると回すと不満そうに漏らす。

「こんな動きづらい服を着たのは始めてだぜ…」

ジンは鏡に映ったヴィーツリー国の正装姿の自分を見て、ため息をついた。

「あは、ジン別人みたいだね」

部屋の隅のソファに座り込み父の様子を見ていたヘリオンは、珍獣でも見るような目である。

「おー、お前は似合ってるぞ、ヘル」

ヴィーツリー国の貴族の娘が好むドレスに身を包んだヘリオンは、幼顔の少女の初々しさを残したまま、軽く施した化粧から少し小生意気さを漂わせている。

「ボク、ドレスなんて初めてだよ……」

似合っているとは言われたが、ヘリオンにとっても落ち着かない服であるには違いない。

外で《娘》である事を隠して生きてきたヘリオンには、保護地区で好まれるスカートなんて未知のものだった。

まして、こんなヒラヒラした服など 自分からは手を出さない
代物だろう。

シュンッ！！！

「思った通り似合ってたねーな」

ジンと同じような正装姿で現れたイチシは、部屋に入るなり正直な感想を述べた。

その声は心なしか普段よりも不機嫌そうで、寝起きの時のように眉間に皺を寄せている。

イチシの格好はといえば、既に襟元を緩めるなどかなり着崩していて、《ヴィーツリー国の資産家一族》という注文からは少々遠ざかってしまっていた。

「資産家なんて柄か、オレたちが」

こんな堅苦しい服似合うはずがないだろうと、イチシは端からやる気がないようだ。

「でもジンよりはイチシの方が似合ってるよ。ちょっと痩せたせいかな…」

言った後で、ヘリオンは改めてイチシの顔を見た

まだカレドに住んでいた頃、ヘリオンは今より更に幼い少女であったが、遠縁のイチシとの縁談話が持ち上がった。

カレドは居住禁止区域に不当に住み着いた者たちの町だ　保護
地区に生殖能力を持った人間はさらわれて、出生率は恐ろしく低かった。

そんなカレドで、ジンたちの家系は数少ない《血統》の一つだった。彼らは他の住人より長く生き、生殖機能のある子孫を残す確率が高かった。

ヘリオンもその血統の娘だ　　母は病弱だったが、父の生命力の方を継いだらしく健康で、恐らく生殖能力もあるだろうと予想されていた。

（こればかりは確かめる医学的手段がカレドにはない為、《第一伴侶》との結婚生活の経過を見るしかないのだが）

《第一伴侶》は初婚の者同士が組み合わされる。

うまく子孫を残せればそのまま伴侶となる場合も多いが、片方に（或いは両方に）不具があつて子が宿る気配がなければ、同じような状況の二人組と伴侶の入れ替えを行う。

三回、四回と入れ替えを行うケースもあるが寿命の問題もあり、子孫繁栄は実現せずに逝ってしまう者もいる。

自分の《第一伴侶》になるはずだったイチシ。

だが再会を果たした時の彼は、見知らぬ女と最期まで生きる事を決心していた。

父親の次くらいに信頼していた相手が、自分の知らない世界を歩んでいる事実、ヘリオンは少し寂しくなり　　相手の女、リユクシーに対してどう接していいのか分からなくなってしまう。

父とも親しげに話すリユクシーに　　ジンまで盗る気なのと叫び

たくなってしまう。

頭では分かっている　　イチシが選んだ人だ、悪い人間ではないだろう。

それはジンの接し方を見ても分かる。

ヘリオンを探す為に力になってくれた話も聞いている。
だが、ヘリオンはまだ信用しきれなかった。

憎んでも憎みきれない捕縛士に関わりがあった女だが、今は事情が違ふ事　　それもジンやイチシから聞いたが、人はそんなに簡単に変わるものだろうかと思ってしまう。

いや、捕縛士であつた事はきっと大した問題ではないのだろうと思う　　ゴデチャで、売り飛ばされそうになつたヘリオンを助けたのも捕縛士だったのだから。

（ボク　　イチシの事、好きだつたんだなあ……）

痩せて少しやつれ気味な横顔も、ぶっきらぼうな口調も、イチシの

何もかもを見つめる度にそれを実感する。

（二人が外に行くって言った時、ボクも付いていけばよかった）

実際は少女が外の世界を旅するというのは狂気の沙汰だろう

一緒に行動する二人の命も危険にさらしただろうし、有り得ない選択肢だったのは分かっていたが、その後悔せずにはいらなかった。

このまま保護地区で自由のない暮らしを送るのは耐えられない
夢だった船乗りになって世界を回ってみたい。

ジンがそう言った時、本当はヘリオンは反対したかった。
だが、必ず戻って来るのなら 期限付きならと、ジンを外の世界へ送り出した。

ジンの決意は23歳の時 外では既に余命は後数年と囁かれる年だ。

家族の為に尽くしてきたジンの願いを、ヘリオンは叶えてあげたかった。
例え離れ離れになろうとも 帰って来ると信じて、送り出してやろうと思ったのだ。

「ところで、リユウの奴はどうしたんだ？」

イチシと一緒に現れるものとばかり思っていたのか、ジンは怪訝そうな顔をする。

「マデイラ＝キャナリーに話があるそうだ」

妙な間の後、イチシは言った。

「一人でか？」

なるほど、何だかイライラして落ち着かない顔をしている理由はこれだったのかと納得しながら、ジンは尋ねた。

治療を終えて動けるようになったイチシは、リユクシーをそばから離さなかったし、離れなかった。

セントクオリスが彼女に再び洗脳を与えるのを防ぐのと、もう一つリユクシーを独占したいという気持ちの表れだとジンは思っていた。

実際、ジンの予想は当たっていた　自分の制止を振り切って、
「確かめなくてはならない事がある」とマディラ・キャナリーの元
へ行ったリュクシーの事を考えると、非常に落ち着かない気分にな
る。

この軍艦には、リュクシーのかつてのパートナーも乗船していると
いう　姿を見せずに卑怯な奴だ　リュクシーが今更セン
トクオリスになびくとは思わないが、それとこれとは別である。

リュクシーの過去を知る男　　リュクシーが過去愛した男。

それは本当に過去か？　　そう言い切れるか？

これは幼稚な嫉妬だ。

リクシーがどれだけイチシを気にかけていようが、深く愛して
ようが関係ない。

自分の他に、彼女と深く関わる者がいる という苛立ちだった。
(しかも相手は姿を見せない)

それに、イチシは分かっていた どんなにリクシーを求めよ
うと、最後の最後の一線で、イチシは彼女を切り離さなければなら
なくなる。

それができなければ、リクシーを道連れにしてしまう事になる

片時も離れずそばに置いておきたいという感情と、そうしては危険
だという焦り その両立のさせ方を、イチシは模索している最
中だった。

「イチシ 」

声をひそめ、ジンは言った。

「セントクオリスが何をやろうとしているかは知らねえが、ヤバくなったらオレに言っただぞ」

メダリアに手伝われる仕事の内容を 自分たちをこれ以上巻き込まない為に口を閉ざしているのは分かっていたが、そんな危ない橋を渡るうとしている二人を、ジンも見えていらなかったのだ。

「そんな事にはならねーさ…オレがさせるか」

マディラの出した条件は《リクシーを生かす道を用意する事》であって、この二人については何も約束されていない。

セントクオリスの軍艦に閉じ込められている今は、それについて何も問いただす事ができないでいるが、ランドクレスに降り立つた隙もできよう。

（オレの体とあのシェイドを一体化させて、葬る気なんだろうが）

セントクオリスの言いなりに動いていただけでは、ジンたちを救えない。

イチシは探さなくてはならない
をしたモノの正体を。

あの憎悪にまみれた少年の姿

アレが人間だった時の記憶の共有者を

少年をを殺した瞬間を。

（証人はあの女だ

話を聞きだせやしないだろうが）

マディラ「キャナリー」とあの少年は、同じ時期、場所、死因を共有するに違いない。

それはゴデチャの港で垣間見た、マディラ「キャナリー」の赤いシェイドが裏付けている。

あれだけ熱く、息苦しく、恐ろしく、おぞましく、この瞬間がこれ以上続くのなら早く殺してくれと訴えずにはいられない体感
あれを知る者が《生きている》とは到底思えない。

《死》によって体感したシェイドは星の数ほどあろうが、あれだけの恐怖の瞬間を持つシェイドは限られているだろう。
それが、二人のシェイドを同一と判断した理由だった。

だが 本当にもうだろうか？

《死》とは全て、耐え難い苦痛の記憶ではないだろうか？

質は違えど、《死》の苦しみなど、比較したり推し量る事のできぬものではないのか？

そう、イチシの近い未来に降り掛かるであろう《死》も例に漏れず
暗く、冷たく、体の芯から腐っていくような おぞましいものではないだろうか。

いや、マディラとあの少年が深い関わりがあるだろうという事は、シェイドの類似性の他にも第六感のようなものではあるが、確信はあった。

死人が関わる相手は全て、生前に何らかの関係があった者か、或いは死人の記憶にひどく共鳴してしまった者であるはずだからだ。

それでも 自分に襲い掛かるであろう《死》という化け物の事を思うと、あろう事かイチシは恐怖を覚える。

船の舳先で揺られていた時は、何も怖くはなかった。

全てを諦めていたし 依りましをしていたとはいえ、あれほどまでに誰かのシェイドに共鳴した事などなかったからだ。

だが、今はとてつもなく恐ろしい。

垣間見ただけで灼け爛れるほどの、ほとばしる《死》の瞬間。

あれが現実だったとしたら、イチシは正気を保っていられる自信はない。

そして死ぬという事は、もう二度と触れ合う事ができないという事

そして、いつの日かイチシの存在していた時間の記憶は誰の中からも薄れ、消えていくのだ。

リユクシーと出会って、忘れかけていた恐怖が再びイチシを捕らえて離さなかった。

そう　　イチシは死ぬのが怖いのだ……

「話つてのは何だ」

マディラ「キャナリーは振り向こうとさえしなかった　彼女は司令室の一番奥の壁に備え付けられた大きなモニターを見上げていた。

モニターには、《作戦》の舞台となるランドクレスの映像が映し出されていた。

ランドクレスという国を真上から見た衛星写真だ。水質汚染の進んだ現在でも《水神の箱庭》という異名に相応しい、緑と水に恵まれた国。

国土の半分は水没していて、人々はその上に水上都市を造り上げ生活していた。

微動だにせず、モニターを見つめるマディラの背中に　ゴデチヤの港で受けた印象と違うモノを感じた。

シュラウドの信者というわけではなさそうな彼女が今、メダリアの軍艦にいるのだ 何かしらの状況と心境の変化はあったはずだ。

（ゴデチャにいたマディラは《中立》だった。だが今は ）

本意からの行動かは分からないが、マディラはメダリアに属する者になった。

ならば、敵だ。

リクシーから自由を取り上げようとする、リクシーのシェイドまで食らい尽くそうとする敵だ。

「お前たちの考える事は分かっている。協力すれば人質は他国へ亡命させると言っているが、メダリアのやり方じゃない。一度捕らえた獲物は徹底的に搾取して、残りカスになっても肥料くらいにはする連中だ」

よく分かってるね、とマディラが相槌を打った。

「私が信用しないのも周知、私が大人しく従うはずがないのも周知、それでも私を使おうとするのは、寝首をかけられる可能性が0だと思っっているからだ」

「まあ、その通りだね。だが　それは《メダリア》の話だ」

(……)

リククシーは宣戦布告に来たはずだった。

リククシーたちをいくら利用しようとしても、必ずその呪縛から逃れてやると　だが今のマデイラの言葉には、何か含みが持たせてあった。

「シユラウドは最高責任者とはいえ、捕縛士の養育以外の政治的な部分には関与していない。そういう目立つ部分はやりたがるヤツがいくらでもいるようだ。あんたたちを利用して拳句に始末してしまえと思う連中は、どっち側だろうね　」

「それはシユラウドの真意は別にあるという事か」

「さあ？ シュラウドの考えている事なんざ、あたしは知らないね。
あんた如きに反撃を食らう事はあるまいと思っているのは同じだろ
うよ。ただ やっぱりシュラウドという男は胡散臭いと言っ
て
いるのさ」

ルドベキア

マデイラのシェイドがそう言った。

いくら盗聴されていようと、シェイドによって伝わる意識は、機械越しに読み取られるものではない。

(ルド、ベキア ?)

「さあ。ただ能書き垂れに來ただけなら、出て行きな。今のあんたたちは利用されていると分かっているにしても拒絶すらできない弱者なんだからね。悔しかったら強くなりな」

リククシーが認識したのを微妙な表情の変化で察したのか、マデイラは話を摩り替えた。

「あと S だか M だか知らないが、勘ぐらなくても他の捕縛士連中と行動を共にする予定はないよ。 あんたたちが囚。捕縛士は潜伏して様子見。あんたに上官として部下を指揮しろなんて言うつつもりもないさ」

「当たり前だ」

「まずは泳ぐ事。それからの事は追って指示を出す。それまでは精々体を休めておくことだ」

ルドベキア

マディラはゆっくりと顔をこちらに向けると、初めてリユクシーと視線を合わせる。そして再び、シェイドが脳に響く。

「私のシェイドの回復を待っているというのなら、要らぬ心配だ。こんな軍艦に籠もっている方が、生気を失う。イチシの経過に問題がないのなら、作戦とやらを始めてくれ」

「ゴデチャの上から動けないのは、政治的後始末に手間取ってるかららしいね。まあ、もう粗方済んだようだが　　ついさっき、この船はランドクレスに向かい始めた所だ。明日には着くだろう」

「軍艦でランドクレスに向かう気か？」

「いいや。あんたたちは途中でメダリアの手配した民間機に乗り移る手はずになっている。そこからは監視役を除いては、メダリアとは別行動になる」

（監視役は……なのだろうな）

「監視役は、ランドクレスへの潜入任務をこなしていたレアデスとピケの二人だ。こちらは既にランドクレス入りしている」

ピケ　　記憶にない名前だった。レアデスのパートナーなのだろうが。

子供の時のリクシーの知り合いは何故か、男が多い。
顔を見れば、見覚えがあるかもしれないが

監視役がゼザでなかった事へのとりあえずの安堵と、では彼には一体何の役目を負わせているのだろうという疑問がリクシーの中で湧き上がった。

「ランドクレス内では、ヴィーツリー国からの観光客という枠内で
適当に過ごすんだね。時が来れば 働いてもらう事になる」

「つまり、それは 私たちは、『イチシ』は、本当に罔として
の価値しかないという事だな」

マディラは肯定も否定もしない それが真実を物語っていた。

メダリアがやろうとしている事 それは、イチシが取り憑かれ
ていたあのシェイドの持ち主を、抹殺する事だ。

あのシェイド体の記憶をイチシに封じ込めて、死んでも死に切れな
いほどの苦痛の瞬間を再現する。

（ルドベキア　　10数年前に滅亡した国…）

標的のシェイドは、かつてはルドベキアに生きていたらしい

リュクシーに調べさせて、自分をも《死の再現》の駒にしようというのか？

それ以外の　　目的があるのか？

それでも、調べるしか道はない。

イチシは、リュクシーをシェイドの呪縛から解き放ってくれた。
生きると　　二人で生きると約束したのだ。

（　　イチシはメダリアにはくれてやらない。肉体も魂も、何一つとして渡さない）

「それを決めるのはあたしじゃないさ。あたしが考えるべき事は最早一つしかない」

リユクシーのシェイドを読み取ったのか、マディラが言った。

「あなたの口からは真実を聞き出せないのか」

イチシの敵と、同じシェイドの属性を持つマディラ　それは解明すべき《死の瞬間》を知っている可能性を大いに含んでいる。

「あたしは　全てを知らなかった。あいつを滅ぼすには、それでは足りない……」

シュラウド

あの男は何だ。

何故、彼があそこにいる。セントクオリスで、メダリアで何をしていた。

ルドベキアで何をした。マディラとドラセナに何をした

！！

マディラにはもう、真実を追う事はできない。
自身が既に、実体のない偽りの姿なのだから

「第一、あたしの望む結末は、あんたにとっては一番最悪なものだろうよ」

マディラはもはや、情とか後悔といった言葉は捨ててしまったようだった。

「回避したけりゃ、自分でどうにかするんだね」

まっすぐとリュクシーを見据えると、短く言い捨てる。

「言われなくてもそうさせてもらっ」

リュクシーもまた、マディラを見据えた

《人》の枠を捨てて

しまったマディラは、急速に魔人へと身を堕とすだろう。

もう、彼女は《人》ではないのだ

ハガル、カライ　そしてマディラ。

リュクシーは三度、己に関わったシェイドの残像と戦うのだろうか

EPISODE i - 8

「まもなく、緑と水の国ランドクレスの上空です。お手元にございますランドクレスの簡易法律書にもう一度お目をお通しくださいますよう重ねて申し上げます」

機内アナウンスが流れる リュクシーは何時間か前に配布された簡易法律書には一瞥もくれてやらず、窓の外を眺めていた。

どうにも気になった言葉があるからだ リュクシーが何回目かの回想をすると、自然に眉間に皺が寄った。

「
まずは死ぬなよ」

軍用機から民間機に乗り換える際、マディラはそう言った。

その言葉をどう捕らえるべきかと振り向いたリュクシーに、マディラは深く頷いたのだ。

「作戦の途中で死ぬな」という意味にも聞こえるが、何かが引っかった。

そもそも作戦とはいえ、観光客のふりをして罔になれと言われたただけで、いつどこで何を起こそうとしているのか、具体的な内容は一切知らされていないのだ。

そもそもリュクシーたちの取り合わせは、《観光客》にしてはあまりに不審だ。

ジンとヘリオンはヴィーツリー国の資産家親子、イチシはその親戚、リュクシーはエジヌスの地主の愛人というのが、メダリアが用意した肩書きだったが、肝心のリュクシーが愛人役を努める相手の姿はない。

（最初の入国審査をどうするつもりだ。このまま……ランドクレスにすんなり入国できるとは思えない）

リクシーは、他の乗客へと視線を投げかける

この民間機自体が、メダリアの用意した《偽》民間機には違いないが、どうやら何も知らされていないと思われる一般民も同乗しているらしい。

（何名かは、やはり観光客を装った捕縛士の二人連れのようなだった）

周りを見渡してみれば、一般民も 言葉の訛りや仕草が実に多様で、中には最下層に近い暮らしをしていると思われる人間もいた。

そう 《中》の人間らしくない者もいる。

ジンやイチシのように、《外》で生活してきた者の臭い。

彼らはそれを取り繕う事もせず、地のままでそこにいた。

（この雑多な人選は何か意味があるのか？ どう見ても、《観光客》なんかじゃない）

入国審査の段階で門前払いを食らいそうな集団で、本当にランドクレス入りが果たせるのか？

リクシーたちは、《上流階級》の人間としての地位を用意された。それはランドクレス内部で、イーバエルジュを歩く権利があるという事だ。

ランドクレスの国教であるイバ教へ一定価値のある供物を捧げた、優良国民だけが入れられる高級居住地区。

浸水林にそびえ立つ美しい巨塔が見下ろすイーバエルジュは、白と青を基調とした美しい町並みが続く特定保護地域だ。その周りを、一般階級の国民たちの住む居住区が取り囲んでいる。

とはいえ、優良国民と《それ以外》に対しての身分の格差があるわけではない。

実際の所、イーバエルジュに居住するのは、イバ教の関係者がほとんどである。

特別に信心深く、教団にお布施を収める財力のあるものだけが、住んでいるというだけの話だ。

（財力があっても信心深くない者は、一般居住区にいくらでもいる）

そして《観光客》は、イーバエルジュへ滞在する。

ランドクレスに入る手段はいくつかあれど、こんなご大層な肩書きを用意したのは、ランドクレスの隅々を探索できる権利を得る為だったに違いない。

観光客でも自由に入れない場所があるとすれば、それは王家が所有する浸水林の中だけだ。

この国の治安は良く、例えば真夜中に観光客が一般居住区をうろつこうとも、何かの事件に巻き込まれる事はないだろう。

ランドクレスでは犯罪は大罪に当たる。

観光客にも必ず配られる簡易法律書には、ランドクレスで罪を犯せばどうなるかという刑罰が延々と記されていた。

（リユクシーはメダリア時代に読んだ事があったので、大体は頭に入っていたがかなり特殊なものだった）

国民たちは、元々が正義感の強く純粋な人間が多く（文明危機をある程度放棄した国の特有だろうか）、国からの生活保護もしっかりと安定している為、犯罪を起こそうという者はほとんどいない。

彼らにとっての犯罪者とは、先天的に何らかの異常がある者が、外来の者 完全に抹殺し、国外へ放り捨てて然るべき者なのである。

《ランドクレスの、イバ教の法律には逆らうな》

これが、ランドクレスを訪れる者にとっての最大の訓告である。

（もつとも、他国へ踏み入れるとは常にそういう意味の事であるが…）

「おい見ろ、ヘル！見えて来たぞ！！」

「ジンが邪魔で見えないって…」

すぐ後ろの座席からは、無邪気なはしゃぎ声が聞こえてくる。
リュクシーも窓を覗き込むと、眼下には透き通るような青の中に浮かぶ、緑の大地が見えてきた。

「見えるか？イチシ」

通路側に座っているイチシには見えにくいだろつと、リュクシーは身を縮める。

イチシもリュクシーの肩越しに、外の景色を覗き込んだ

そこには、一面の原生林が広がっていた

汚染が続くスタニア

ス大陸の中で、未だ自然を多く残している国。

かつては国土の半分以上が森林だったランドクレスは、長い年月ほんの僅かずつ高さを増した海面のせいで、今では多くの森林が海水に侵された。

ランドクレスは元々いくつかの水上集落を持つ国だったが、いずれかに起きる事態に備え、全ての機能を水上都市に結集させる事にしたのだった。

国土の背面には高い山がそびえ、中心に原生林を残し、海との間を水上都市が取り囲む。

そして原生林の中央には《水神の住処》と呼ばれる幻想的な浸水林が在り、王族たちを守っているのだ。

触れただけで皮膚が爛れ、のた打ち回って息絶えるのを《海》だと認識している者から見れば、ランドクレスの情景は信じられないものだろう。

ランドクレスは《アクミナータ大陸》の海流が流れてくる清流の海に面している。

この地域は、海で泳ぐ事も可能だし漁業も行われている。

透き通る青い海の中に浮かび上がる緑を内に抱えた水上都市
それがランドクレス。

その美しき情景を求め、各国の要人たちがバカンスに訪れる等、限られた者だけではあるが、人の出入りも比較的自由な国

この水神の住処で、これからどんな惨劇が待ち受けているというのか。

リュクシーはイチシを守り、ジンたちも守り、無事にメダリアから逃れる事が出来るのだろうか。

イチシは ジンたちを逃がし、リュクシーを生かし、そして

彼女に振り切らせる事が出来るだろうか。

自分のシェイドを

「ねえ、向こうから船が来るよ」

ヘリオンの声が聞こえ、リュクシーは視線を海面に落とした

「！！」
救命具を身に付ける！」

遙か下の海上に漂っていたのは、客船でも漁船でもなかった。

甲板に据えられた大きなミサイルが、こちらに向けられているのを知ると、リュクシーは頭上の格納された救命具を引きずり出した。

「なっ、なんだ!？」

「メダリアめ　乱暴な真似をする!!」

事態の把握できないジンの顔面に救命具を叩き付けると、メダリアのやり方に思い至らなかつた自分に腹が立った。

「　本気か」

手早く救命具を身につけたものの、イチシは半信半疑のようだ。

（……他の乗客は？）

リュクシーたちは、一等客席に座っていたのだが　二等、三等席にも乗客は……いや、リュクシーたちには目の前の二人を助けるだけで精一杯だった。

「ヘリオン、こっちへ来い!!」

来た破片からヘリオンを守る為にシェイドの防御壁を張る
だが次の瞬間には、落下している自分に気づく。

下は海面といえど、この高さから叩きつけられれば、人間の体など
簡単に壊れてしまう。

「まずは死ぬなよ」

あの言葉の意味を噛み締め、込み上げる腹立たしさを糧にリュクシ
ーは己のシェイドを解放した。

視界に、ジンの首根っこをつかんだ状態で落下していくイチシの姿

も見える

ザパアア
ンンンンン
ン！！！！！！！

コポコポコポ
.....

かなり深海まで落下したリュクシーは、水を蹴って海面を目指す

「っ、げほっ!!」

海面から顔を出し、腕の中にいるヘリオンを見れば、すっかり気絶してしまっているようだった。

ジンの娘らしく、中々気の強くしつかりした少女のようだったが、落下の体験など早々あるものではなからう。

「イチシ!!どこだ!!!!!!」

だが辺りを見回したリュクシーは 言葉を失う。

そこには惨劇が広がっていた。

炎上しながら沈み行く機体
てた乗客たちが漂っていた。

その周りには無惨な姿に変わり果

（ 本物の死体だ。メダリアは本当に作戦の為に人を殺した）

彼らはどんな人間だった？

処刑されるべき悪人であつたとも言うのか？

そうは見えなかった。

リユクシーと同じ、ただの人間だった。

まだ生きている、死ぬ要因などどこにもない、まだ生きてゆける人間だった。

言い様のない怒りに襲われた。

メダリアの目的が読めない。何をしたいのか分からない。

いや、メダリアの意志は分かっている。

シュラウド以下の上層部の人間たちは、捕縛士を人間兵器として各国への侵略の駒にする気なのだ。

ただ、まだ実験段階であるというだけだ。

だから慈善事業などを手がけ、隠れ蓑にしているだけだ。

読めないのはシュラウドだ。

あの男は、捕縛士の養育への権限は行使するが、政治的権限は全て放棄している。

野心が原動力でないとするなら、何の為に捕縛士を そして今回のような理解不能な事をさせるのだ。

（この作戦にシュラウドは関知しない？そんな戯言が信用できるか
！！！！）

「ガボゴボゴボ……!!」

「おい、リュクシー」

突然、背後にあった水飛沫から声がした。

「何か捕まるものをくれ。ジンの奴、泳げねえんだ。オレまで沈む

」

「待ってる」

溺れかかっているジンがイチシに必死にしがみついているのを見て、リュクシーは短くそう言うと、ヘリオンを抱えたまま浮きそうな残骸を探しに行く

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、げぼっ!!」

「大分水を飲んだな」

「へ、ヘルはどうしたんだ？まさか」

「大丈夫、気を失っているだけだ」

むせ返りながら娘を心配するジンを見て、やはりこの二人だけは何としても逃がさねばならない
お互いがそう決意したのを、
リュクシーたちは知らなかった。

「ひでえ……!!」

海面に漂うさつきまでは人であった物体を目にし、ジンは呻いた。

「あ……!？」

「どうした、ジン」

突然、表情を変えたジンに、リュクシーは問いかけた。

「い、いや……まさかな……そんなはずは……」

「言え、ジン！なんだ!!」

「いや、オレの見間違いかもしれない…」

「細かい疑問でも全て話せ！でないと　　！！」

（生き残れない！！）

そう続けようとしたリクシーは、言葉を飲み込んだ。

ジンにそこまで背負わせてはいけない　　この親子だけは、何としても救うのだから。

「気づいた事は全て洗いざらい話せ　でないと、メダリアを出し抜けない」

声のトーンを落とし、ジンを諭すように言う。

「気のせいかもしれないが　そうじゃないかもしれない。だから話せ」

「分かった……イチシ、お前は記憶にないかもしれないが…」

ジンにしては珍しく、齒切れが悪い話し方だった。

「カレドにいた気がする。あの　今オレたちの横を漂っていったヤツの顔が…何だか見覚えがある気がしたんだ」

「カレド　お前たちの故郷だな」

「だがよ、普通に考えてこんな所にいるわけねえ。オレたちと同じ貧乏暮らししてたヤツが、こんな飛行機に乗ってるはずないぜ」

（同じカレド出身者 ジンの気のせいではないとしたら）

不吉な予感がリュクシーの中にあった。

カレド出身者が、メダリアの抹殺対象の条件の一つであったとしたら。

ジンたちは人質として連れて来られたのではなく、最初から抹殺対象であったとしたら

（待て まだそうと決まったわけじゃない。まずは、ジンから話を聞きだしてからだ…）

「おい、船が来るぜ」

イチシは船の姿を発見し、海面に漂う破片を大きく振りながら合図を送った。

「この話は後にしよう

見る。ランドクレスからの救助船だ」

結局、ランドクレスの救助船は爆撃から20分ほどで到着した。

ランドクレスは近隣の水質保護のため、遠洋500キロに渡り不可侵条約を各国と結んでいる。

とはいえ、このご時世だ。

口先だけで、そのような権利が保障されるわけがない。

ランドクレスは世界で有数の軍隊を有し、陸からも海からも侵略を

受けないよう過剰なまでの警戒をしている。

今回の爆撃は、ランドクレスの海上国境付近で起きたが、警戒中の巡回船がすぐに事態に気づき、現場に駆けつけた。

巨大な軍艦は、救助ボートを降ろすと漂流していた人々を回収し始めた。

海上に漂っていた者たちは皆、口数も少なく疲労していた。

ランドクレスの軍人たちも、それを承知しているのか、控えめな労いの言葉をかけるのみで、リュクシーたちは軍艦の休息室へと通された。

（メダリアの思惑通りということか　　）

「リュクシー、眉間に皺が寄ってるぞ。もつと疲れた様にふるまえ」
頭から毛布をかぶり床に座り込んで、軍人からもらった飲み物を傾けていたリュクシーの背後から、知らない声が聞こえた。

振り向くと、そこには同じように毛布に包まれた者たちがうずくまっていた。

（生き残ったのは皆、捕縛士たちか……）

死んだ者たちは、何故殺されたのだ？
彼らは一体、どういった人選で集められたのだ。

その中にカレド出身者がいたかもしれないという事実がリュクシーを更なる不安に陥れる。

あの光景を見て、眉間に皺くらい寄らない方がどうかしているというものだ。

ここにいる捕縛士たちは、アレを見ても何も感じないのか？
あの惨劇を見ても、自分たちは正義だと信じて疑わないのか？

「もつと水はどうだ？」

ランドクレスの兵士が、水差しを持ってやってきた。

「……」

それはレアデスだった。

「もうすぐ港に入る。そしたらちゃんとした寝床も用意してあるから、それまではここで我慢してくれな」

レアデスのもっともらしい台詞を吐いてみせる まったくもって白々しい。

この場には、リユクシーたちの他には捕縛士しかいるまいに。

「ランドクレスでゆっくり養生するといい」

（ああ、こっちの兵士は捕縛士ではないのか ）

レアデスの隣にいた男は、正真正銘ランドクレスの民のようだった。

今になってよく分かる。

捕縛士たちの独特の緊張感のあるシェイド
という強い意志。

自分は特別なのだ

存在そのものが、捕縛士である証だった。

人込みで捕縛士を見かけても、リユクシーにはすぐに分かってしま
うだろう。

自分がメダリアの中にいた時は、不思議と気づかなかった

「ランドクレスに着いたら、気分転換に酒場にも行くといい。イ
バの楽団なんかが演奏しているからな」

レアデスは、リユクシーに酒場の地図が書かれたマッチを手渡した。

「おい、レアデス。お前、職権乱用はダメだろう…」

「やだな、先輩。こんな状況で、別に下心なんてありませんよ」

リユクシーを口説こうとしていると思ったのか、隣にいる兵士が苦
言する。

「来て早々大変な目に合ったけど、きっと水神様が君を癒してくれ
るよ」

「行くぞ、レアデス。こいつ、いつもこんなんだから、あんまり気
にしないで下さい…」

リユクシーは外国の要人の関係者、余計な問題を起こしてはマズイ

とばかりに、先輩兵士はレアデスをせつつく。

「本当に気にしないで下さいね」

だがリュクシーは返事をする事すらしなかった。

九死に一生を得て放心している女を演じるにはそれで十分だろう。

（ まずは顔を覚える事からだ）

ルドベキアについて探るのに、監視がいてはやりにくい。

「イチシ 」

レアデスたちが去ったのを見届けると、リュクシーは声を潜めた。

「捕縛士たちの顔を出来る限り覚えろ。生き残った連中は十中八九捕縛士だ」

「ああ 」

「それと」

メダリアが用意した肩書き。

ヴィーツリー国の資産家の息子と、エジヌス地主の愛人。

二人はこの救助船で知り合い、恋に落ちた

「私たちはここで知り合った。いいな」

「オレはな。問題はジンだろう あいつに演技なんて無理だぜ」

「入国審査では、ジンたちからは離れておく。もしかしたら別の宿に送られるかもしれないが、そしたらイーバエルジュの時計塔の前で落ち合おう」

「わかった」

「それと 気になる事がある。ジンとヘリオンから、くれぐれも目を離すな」

「さっきの死体の事が…」

「お前たちの故郷 カレドの話聞いておきたい。待ち合わせにはイチシー人で来てくれ。あの二人は宿から出すな」

メダリアとの約束など全面的に信用ならないとは思っていたが…

ジンとヘリオン。

あの二人を端から生かすつもりがないとすれば、状況はまた変わってくる。

（水神が誰を癒すだと ？神が何をしてくれると言った）

誰もが一度は訪れたいと願う、美しく厳かな神の国

船が帰港の汽笛を鳴らす リュクシーにはそれが、不吉という
名の黒い獣の遠吠えのように聞こえた。

EPISODE i - 9

イーバエルジュの白い壁と青い屋根の町並みは、海の青と、浸水林を成しているメルイント樹の白を表している。

浸水林の中央に位置する古城を守るかのように生い茂る白肌の樹木に、イバ教典の中に登場する精霊メルイントの名が与えられた理由は、イバ神をこの世の穢れから守護するという伝承の如く、幻想的に生い茂る姿を重ねたから らしい。

（メルイント樹は精霊の化身、無闇に傷付けようものなら極刑が待ち受けている）

ランドクレスでは、白と青という組み合わせは特別な意味があるのだ。

イーバエルジュではそれが顕著に現れており、道行く人々は皆、白を基調とした服装に青い装飾品を身に付けるのが流行のようだ。（ランドクレスで使用されている青の染料は、特産である貝殻を砕いて抽出したものである）

リュクシーも例にもれず、白いドレスを着ていた。
だが、装飾品は身につけていない。

彼女には「青」がある 日の光を浴びて、彼女の髪は青黒く煌
いていた。

出逢った頃と比べると、皮肉にも健康状態は良好である事が伺えた。

巨大な時計塔の足元に広がる国定公園の中、リュクシーは「時計塔
で」との言葉通り、時計塔の正面でイチシを待っていた。

行き交う観光客の中、まだ自分を目指して徐々に距離を縮めるイチ
シの姿には気づいていないようだ。

リュクシーと出逢っていなければ、自分は今頃どんな想いで

何処にいたのだろう。

出会い、魅かれ、彼女が選んだのが自分でなかったとしたら
でも、そんな現在は想像すらできない。
？

リュクシーの表情まで見えるくらいに近づいて、珍しい事に彼女が
何かに気取られている事に気づく。
何を見ているのだろう リュクシーの視線の先にあるものを探
す。

人だかりがあつたその中心には、純白の衣装を身にまとつた男女の
二人組みがいた。

群衆は白い花びらで満たされた籠を手にし、二人の頭上に花びらの
雨を降らせている。

中心にいる男女が恋人同士であるのは、遠目に見ても分かった

（ああ あれが）

イチシが船上で生活していた頃、一週間ばかりランドクレスに停泊した事がある。

その時はもちろんイーバエルジュを歩く権利はなかったから、話に聞くだけであつたが あれがイーバエルジュ伝統の、《結婚式》というものだろう。

世界の富豪たちがランドクレスに滞在する理由の一つに、《結婚式》がある。

イバ神の前で、お互いが唯一の存在であると誓う儀式 それがランドクレス内だけの法律であると知りつつも、恋人たちは今や失われつつある貞操の証となる何かを求め、イーバエルジュの教会を訪れるのだ。

お互いが唯一の存在 今となつては、それは危険過ぎる。

本当は分かり過ぎるほど分かっている リュクシー、ジン、ヘリオン……自分の大切な人間を守る為には、一刻も早く自分から遠ざけねばならないと。

一緒にいる時間が長ければ長いほど　それが例え1秒の差であ
れ、イチシは彼等に心を許し、依存し、束縛を与えてしまう事にな
る。

だが、己の欲望を全て押さえ込むには、イチシは若過ぎた。

もっと　そう、ジンのように長く生きれば、我が身を犠牲にし
て、それで後悔しないなどと言えただろうか。

もっともっと　そう、クレストのようにシェイドの扱いに長け
ていたら、大事なモノを手放す事なく色んな道を選べたのだろうか。

ゴーン

ゴーン……

時計塔の鐘が鳴り、リュクシーが振り返った
すぐ後ろに立っ
ていたイチシにようやく気づいたようだ。

「
イチシ」

「何を見てたんだ？」

言ってしまった後で、しまったと思った
リュクシーが何を見
ていたか…そんな事は知っていたのに。

「
……」

だがリュクシーは何も応えず
視線を群衆の方へと戻した。

ゴン

ゴン……

「何だか

」

幸せそうに笑う二人　風に吹かれ、舞い上がる花びら。
それを見つめるリュクシーの横顔が、背筋がぞくぞくするほど女に
見えた。

「別世界のようだと思ったんだ」

気づいた時にはメダリアにいた
ートナーだと相手を決められた。

ある日突然、これがお前のパ

逃れられないのなら、受け入れようと思った　自分から歩み寄
る事で、選ばされたのではなく、自分で選んだのだと思いたかった。
だけど、相手はそうじゃなかった。

彼は　ゼザは《パートナー》だから受け入れた。《裏切り者》
になったから、殺そうとした。

それ以上でもそれ以下でもない。ゼザには、リユクシーの中身など
どうでも良かったのだ。

気づいてからは　自分は誰にも求められる事のない人間なのだ
と思った。

求めてくれるなら、それが亡霊でも構わないとも思った。

でも、そんなリュクシーに、イチシは救ってほしいと言った。

だから リュクシーはイチシを選んだのだ。

ふと視線に気づき、リュクシーは振り向く

「！」

その変化に気づき、リュクシーは眉間に皺を寄せた。

イチシがリュクシーから目を逸らしたのだ。
出逢った頃のように それはきっと、自分の心を覗かれまいと
するイチシの悪い癖だった。

（やはり イチシは覚悟をしている……私と一線を引こうとし

ている…)

だがそれは、自分の事を想うが故の行動だと　　リュクシーには
分かっていた。

それを強いているのは、メダリアだという事も分かっていた。

「イチシ、私を見る」

イチシの両頬に手を当てると、リュクシーは無理やり自分の方に向
けた。

ぐきつと妙な音がしたが、今はそんな事はどうでもいい。

「　　いてえ…」

「いいから聞け」

真面目な顔で言うと、イチシがようやく視線を合わせた。

「隠し事を無理に聞き出そうとはしない。何故隠そうとするか、そ
れは分かっているつもりだ」

「オレは別に隠し事なんか　　」

「いいから聞け！まだ続きがある」

リククシーが怒鳴ると、イチシは大人しく観念したようだ。

「お前にはお前の考えがあつて、行動するつもりなのは分かる。だから私にも私の考えがある事を分かれ」

どう言えば、イチシの心を溶かす事ができるのだろう　この頑固者はもう、一人で死ぬ決意をしてしまった。

でもきつと、道はある。

二人はまだ生きているのだから　イチシの決意を解き、二人で立ち向かう事ができるはずだ。

「どうして私を信用してくれない　？どうして今、私を必要としない？」

「信用するしないじゃない　信用は…している」

しているからこそ　リククシーになら、ジンとヘリオンを託せる。

リククシーなら…二人を連れて生き延びる事ができる。

「じゃあ、お前に私は必要か」

「っ あんたは」

どうしてリユクシーは、こう答え難い質問ばかりをするのだろう
イチシがどれだけリユクシーを必要としているかなんて、言葉
では表し切れるはずがない。

「隠し事は 今はいいい。でも嘘は付くな。答える」

どれほど 必要としているか。リユクシーには想像できまい。

今、この場できつく抱き締めて押し倒してしまいたいほど、自分の
身に起きた事全てをぶちまけてしまいたいほど、ジンとヘリオンを
見捨てリユクシーと二人で逃げ出してしまいたいほど

だが、そんな事をして誰も助からない。
全てが消える。イチシの愛しい者全てが、消えてなくなる。

「どうして信用しない!!!お前の気持ちだが 分かっている」と

でも思うのか!」

観光客たちは、口論する男女の姿を遠巻きに観察していたが二人が突然激しく口付けしあうのを見て、やれやれと肩を竦めて去っていった。

「頼むから　しばらく黙ってくれ」
「黙らない」

「いいから黙れ」
「答えろ、イチシ」

「いいから」

やはり何も言っではくれなかった　イチシは観念したのだ。
自分の死は免れない事を、イチシは分かってしまったのだ。

だが自分が今も激しく望まれている事　イチシと唇を重ねる度、
それを実感できる。

言葉はなくても　イチシのシェイドが伝わる。
リュクシーの中に吹き込まれる。

言葉では伝わらない、伝える事ができない苦しい感情も、シェイド
が全てを表していた。

「私は黙らない。絶対にお前を諦めないからな」

リュクシーには言える言葉がある　イチシがそれに応える事ができないとしても、リュクシーは伝え続ける。

そうしないと　イチシは遠くへ行ってしまう。
リュクシーの手の届かない遠くへ……

（絶対に諦めない）

イチシと生きる事が、自分が葬ってきたシェイドたちへの誓いだっ
た。

そのために、カライもハガルも、断ち切ってきた

今腕の中にあるイチシの体温　　リュクシーは守る。

(……)

自分を固く抱き締める力の強さに、彼女を納得させる手段なんてあるのだろうか、当惑せざるを得なかった。

イチシがリュクシーを必要とするように、自分も必要とされているそれは嬉しくもあったが、だからといって決意が揺らぐ事はなかった。

(どうしたら あんたは分かってくれるんだ)

生きるのを諦めた訳じゃない。
リュクシーを愛していない訳がない。

愛したい。そばにいたい。触れたい。生きていたい。
全ての欲望がリュクシーに向いている。リュクシーがそこにいるから、溢れ出す。

だが リュクシーを生かし続けるためには、イチシの一番大事な者を守るためには、彼女に覚悟を決めさせなくてはならない。

イチシだけの決意では、リュクシーを逃がせない。道連れにしてしまう。

(どうすれば いい?)

ゴーン ゴーン……

時計塔の鐘がなり、イチシはリュクシーを腕に抱いたまま、空を仰いだ。

ゴーン

ゴーン……

「とりあえず行くか」

二人抱き合っている間、何も事態は変わらない。
ランドクレスでの行動一つ一つが、生死を左右するものになるだろう。

「ああ、そうだ」

リユクシーは辺りを警戒してから、続きを話し始めた。

「私は《ルドベキア》について調べようと思う。マディラが
シェイドで伝えてきた言葉だ」

ルドベキア　昔そんな国があつて、そして滅んだという事くらいしかイチシは知らなかった。

それもそのはず、ルドベキアが滅亡したのはイチシがまだ生まれて間もない頃だろう。

「ジンとヘリオンは、これ以上巻き込みたくない。分かるな？」

「ああ」

「二人には言うな。私たちだけで調べよう」

「ジンがうるさそうだな」

「ヘリオンの為と言っても、納得しそうにないか？」

「あのな　　ジンの優先順位が一番がヘリオンだとしても、オレと同じくらいにはあんたの事も気にかけているんだぜ」

「ジンが私を？　　何の関係もないのに？」

血縁でもない、恋人でもない　　赤の他人であるリュクシーを、
ジンがそこまで気にかけていると言うのか？

「あいつはそういう奴だ。オレとあんたがこうなった事で、ジンはあんたを血縁として見ているだろう」

「そうか　　」

リュクシーは小さく微笑んだ　　それが、ジンに対して心を許している証だとイチシは思った。

リュクシーは気づいていなかっただろうが　　彼女が選んだのが
自分でなかったとしたら、ジンはリュクシーを《女》として見ていたままだったろう。

リュクシーも、ジンの父性ともいうのか　　彼の大きな心に魅かれていたような節があった。
だからこそ、イチシは二人を見ていると苛立ちが募ったのだから。

「ヘリオンの為、二人の為って台詞は逆効果だ」

「じゃあ、全員が助かる為と言っしかないな」

リュクシーは苦笑した。もちろん、そのつもりではあったが。

イチシも安堵した。

ジンがいれば 自分が消えた後のリュクシーの傷も癒してくれるだろう。

あの二人を救う事が、リュクシーを生かし続ける糧にもなる。

「じゃあ、行こう。カレドの話も聞いておきたいしな」
「カレドか」

「……そういえば、お前の故郷の話聞くのは初めてだな」
「話したくなるような故郷でもないからな」

転送機の重大事故で、全焼した町……炎に巻かれた町。
それだけの情報で、標的のシェイド体が関係していたのではないかと容易に想像できる。

「イチシは何か思い当たる事はないのか？」

「あの日は　　オレとジンは、町を離れていたからな。ものすごい爆音がして、町の方角から煙が上がったのを見た」

「……」

「逃げる連中とは反対にカレドに入ると、町はめっちゃくちゃになつてた。オレたちは家に帰ろうとしたが、炎でそれ以上進めなかった。周りには人間が沢山倒れていた。潰れた家の下から助けを呼ぶ声も聞こえた。ジンが狂ったように家族を探し回って、ようやくヘリオンだけ見つけた。母親のエレファは逃げ遅れたとヘリオンは言った」

正直、言葉が見つからなかった。

ジンがヘリオンを大切に思う気持ちは、守れなかった家族に対する後悔があるから、余計に強いのだろう。

普段のジンの姿からは、そんな生き地獄を経験したとは想像もできなかった。

「何か見たとすれば、ヘリオンだ。」

それでも聞くか？」

巻き込まない為には 余計な記憶は呼び起こさない方がいいの
ではないか？

「ヘリオンは あの時の事を一切しゃべろうとしない。記憶が
飛んでるのか、話したくないだけかは分からないけどな」

やはり カレド出身者は抹殺対象なのか？
だとすれば、標的を目撃した者は全て消すという事だ。

（最初から 私たちを利用するだけ利用して殺す気だったな、
メダリアめ）

しかし目撃者全てをも抹殺するとは どれだけの影響力の持ち
主なのだ、そのシェイド体は。
それに魅入られてしまったイチシを、確かにメダリアが生かしてお
くはずがない。

「聞いた方がいい。関わってしまった事実が消えない。今は少しで
も情報が欲しい」

ヘリオンが記憶を呼び覚まそうと封印したままだろうと、メダリア
は見逃してはくれない。

「しかし ターゲットが過去関わった全ての人間を抹殺しよう
というのなら…… 過去の事件を洗いざらい調べないとならないな」

ルドベキアの全ての根源となる 標的のシェイド体が《死》を
体感した事件。

そして、その事件と何かが類似する事件が存在しているはずだ。

何かとは やはり《炎》だろう。

「イーバエルジュには、イバ教の特設図書館があつたな そこ
で調べられるだろう」

「図書館？」

「なんだ、図書館を知らないのか？ あらゆるジャンルの本と、過去
の報道映像や記事が納められている場所だ。イーバエルジュの通行
権がある者なら、確か誰でも入れたはずだ」

「本、か」

何だか複雑な顔をしているイチシ あまり活字とは縁のない生
活を送っていたようだし、苦手な分野なのかもしれない。

「後は やはりこれは、ここへ来いという事なのだろうな」

ドレスの胸元から、レアデスから渡されたマッチを取り出した。

住所はイーバエルジュのものではなかった。
一般民の住まう水上都市の真ん中に、その酒場はあるらしい。

「なんだ？」

呆れたような顔をして、続けてため息をつくイチシに、リユクシーは怪訝そうな顔をした。

「頼むから、変な場所から色々と出さないでくれ」

「色々入ってない。これだけだ」

「論点が違うな」

「仕方ないだろう、こんな服しかなかったんだから」

リユクシーが着ていたのは、上からストーンとかぶるようなデザインのシンプルなドレスだった。

リユクシーの体型には少し横幅が余り過ぎてしまうようで、胸の下の位置にリボンを通して背中では結って調節している。
海風で裾がめくれてしまいそうなヒラヒラとしたドレスだ。

「その格好で暴れるのは止めろよ」

「じゃあ、後で服を買ってくれ。ランドクレスからもらった服は、全部こんなのばかりだ」

リユクシーだって早く着替えたいが、ランドクレスで自由になる金はほとんどないのだ。

今のリクシーは、ランドクレスの難民支援金で食事と寝床にありつける状態なのだから。

「オレたちは、目に光を当てるだけで支払いはしなくていいらしいが、あんたは違うのか」

「お前たちはヴィーツリー国の資産家という設定で、世界市場の網膜登録も偽造してある。偽造というか、本登録だが。私はエジヌスの愛人、何も登録がない。パトロンが死んだから、私自身は無一文だ」

「だから宿泊先も違うのか」

「そうだ。私がいるのは、病院内の宿泊施設だからな。お前たちは観光ホテルだろう」

「病院の服か。どうりで妊婦服みたいなわけだ……」

言った途中で イチシはその可能性に気づいた。

「おい　まさか」

イチシが言わんとしている事に気づき、リュクシーは苦笑した。

「いや、検査中なだけだ。若い女は皆、病院の方へ収容されているしな。ヘリオンは体が小さいから、外されただけだろう」

「結果は　まだ出ていないのか」

「何もでないと思うが」

イチシの動揺はどういう意味なのだろうと、リュクシーは少し不安を感じた……もし二人に新しい命が与えられたとしたなら、これから何が変わって行ったのだろうか。

だが、そんな事はあるまいとリュクシーは確信していた。

何故なら妊娠が可能であると示す兆しが、メダリアを逃れてからずっと現れていなかったからだ。

リュクシーの体は、リュクシー自身を保つのに精一杯で、新しい命を授かる状態ではなかった。

「というか、まだ検査はしていない。今日中に順番が回って来そうもなかったから、抜け出して来たんだ」

「検査は必ず受けておけよ」

「ああ」

自分の表情がイチシにどう見えているのかが気にかかった。な
いとは思いつつも、もしかしたらという考えは頭にこびりついてい
た。

「まあいい。とりあえず、お前たちの宿泊しているホテルへ行こう」
「ジンが今頃騒いでると思っぜ。落ち着かねえ、落ち着かねえって
な」

それはさぞ豪華なホテルなのだろう。その光景が目には浮かぶよ
うで、リユクシーは小さく笑った。

「こっちだ」

「イチシ、腕」

リユクシーに言われ、軍艦内で散々教えられた《フェミニストが多
いヴィーツリー国の一般男性像》とやらを思い出すと、ちょうどリ
ユクシーが腕を組んできた所だった。

「エスコートしろよ、イチシ」

リユクシーはふざけて命令口調を使う。

強く自分を保たないと　　少しでも明るく見せないと、暗い淵に
引きずりこまれてしまう。
それではダメだ。リユクシーは、イチシを救わないとならないのだ
から。

結果が判明するまでは　　その《可能性》については考えない方
がいいだろう。

むしろ聞かなかった事にしたいと、イチシは思っていた。

EPISODE i - 10

エントランスに踏み入れた瞬間、そこは幻想的な別世界が広がっていた。

高い吹き抜けの白い天井には、イバ教独特の紋様が青く描かれており、中心には巨大なシャンデリアが釣り下がっている。

シャンデリアの下には、白い噴水が豊かさの象徴である美しい水の流れを演出していた。

噴水からは幾重にも水路が延び、青々とした緑と共にホテル内の道を作り上げている。

水路の所々に作られた小さな橋の手すりにも、イバ教の紋様が掘り込まれていた。

エントランスには壁が作られていない。天井と同じ紋様の描かれた太い柱があるだけだ。

敷地内に広がる緑と水の美しい芸術を、広く見せるためであろう。

ふと、甘い香りが鼻先をかすめる

イーバエルジュで祝福の花と呼ばれている白い花の香りだろうか。
水辺には白い花たちがガラスの器に入れられて、沢山浮かべられていた。

夜になると、ガラスの器には蠟燭が並べられて、ゆらゆらと彷徨うのだろう。

甘い香りに包まれた瞬間、何だかこの光景を見た事があるような気がした。

遠い昔にこの幻想的な光景を見たような

既視感。

それは、かつてこの世に生きていた誰かの記憶。
空気のように漂う遠い記憶を、人々は時に己のシェイドに被らせて懐かしさを覚えるという。

これは一体誰の記憶か ここを訪れ、目を奪われた人間は一人や二人ではないだろうに。

「 確かにすごいホテルだな…」

リクシーはため息まじりにつぶやいた。
世界中の金持ちが、イーバエルジュといえばこのホテル、と言うのも分かる。

「目がとろけているぞ。花の香りにやられたか？」

その声にギクリとした。

だが同時にその動揺を抑え込まねばならないと、瞬時に理解した。

「お前でも、何かに目を奪われる事があるんだな」

声の主は、小さく笑っているようだった。

リュクシーのすぐ後ろで、《彼》の息遣いが聞こえる。

ドクン

（ ダメだ！！ ）

自分の心臓の脈打つ音が抑え切れないと知り、リュクシーは振り向いた。

「 なんだ？ 」

そこにはイチシが立っていた。
冷や汗をかいているリュクシーに気づき、イチシが肩を揺さぶって来る。

「…どうした」

だがリュクシーはその手を払いのけ、頭を抱えると目をつむった。
その様子にイチシも気づいたようだ 依りましをしていた頃、
何度かこういう事があったものだ。

（まだだ まだ覚醒してはならない。今ならまだ、何かが分かる）

もう一度、リュクシーは水の庭園へと視線を向けた。

「……」

だが、そこは既にリュクシーの知る世界に戻っていた。

「あの 声……」

ただの声ではなかった
っている。

とても良く似た声を、
リュクシーは知

（私は 誰の記憶を見たんだ？）

「何か言ったのか？」

イチシの問いに、リユクシーは言葉を思い出そうとする

「 目がとろけているぞ。花の香りにやられたか？」

何度思い返しても、あの声は

「お前でも何かに目を奪われる事があるんだな」

だが違う。リュクシーの知る声とは、質が違う。
あんな穏やかで優しい口調 同じ人物の声とは思えない。

「
知っている声か」

大して意味があるものとは思えない言葉とは裏腹に、リュクシーの
あまりの動揺ぶりを見ると、それ以外には結びつかない。

「まだ……だ。私の中で何かが一致しない」
「知ってる事は何でも話せと言ったのはあんだ。思い当たる事は
全部しゃべってもらおう」

普段リュクシーにやり込められる機会が多いせいか、こちらが弱み
を見せるとイチシはすぐにそこを突いてくる。

「
言わないとダメか？」
「当然だ」

リククシーはため息をつき、イチシの胸倉をグイと引き寄せると、耳元で小さく囁いた。

「 シュラウドの声に似ていた」

あの男の声と同じだと思ったからこそ、体が凍りついた。

だが あ の《声》には感情があつた。
記憶の持ち主に対する この光景に目を奪われている《誰か》
に対する優しげな感情を感じた。

「シュラウド。捕縛士のボスか」
「ボス というのは違う気もするが…まあ、そんなものだ」

「本当にその声がシュラウドとしたら ランドクレスと何か関係がある、少なくともここに來た事があるという事か」

「…そういう事になるな」

このホテルに滞在した事がある それは、他国でかなりの地位と財産を持っている者という事だ。

シユラウドには幾つかの噂があつて、亡国の要人であつた説も流れていたのだが あの男の出身はルドベキアだったのか？

今回、シユラウドが全く姿を見せないのは、自身の過去を暴かれる危険があるからなのか？

「ドラセナ」ロナスを調べるといふ事は 何か。何かとてつもない結果を見る事になるような気がする…」

「何故だ？ただの学者を、何故あんたはそんなに恐れるんだ？」

「私が、恐れている ？」

「見る」

リュクシーの手をつかみ、顔の前に持つてくる。

その小刻みに震えている手が、自分のものであると気づくのに少々時間を要した。

「鳥肌も立ってる」

何故だろう あれだけ信奉者も多いシュラウド。

あの男に見つめられると、リユクシーは落ち着かない気分になる。

例えて言うなら、暗い部屋の中で、不気味な人形と向かい合っているような気分になるのだ

あの男には感情がない。何を考えているのかが分からない。だから恐ろしい。

リユクシーはイチシの胸に顔をうずめる すると、力強く抱き締めてくれた。

 恐れてはいけない。強くならなければならない。
 相手がドラセナⅡロナスであろうと、シュラウドであろうと。リユクシーは戦う。

「手がかりが増えたと思う。あの声がシュラウドのものだと仮定して考える」

「大丈夫か？」

「 ああ、大丈夫だ」

シユラウドに対する恐怖
た恐怖。

メダリアで植えつけられた漠然とし

今はイチシが隣にいるから、リユクシーは強くなれる。

気を引き締めなおして、リユクシーは顔を上げた。

すると、エントランスロビーのソファに腰掛けてこちらを見ている
中年女性と目が合った。

女性はニヤニヤと笑みをこぼしている。

(……)

周りを見渡すと、自分たちがいい見世物になっているのに気づき、
リユクシーは慌ててイチシから離れた。

「早くジンたちの所に行くぞ」

「……照れてるのか？」

「いいから行くぞ！」

自分を理解してくれる者がそばにいる　　今までにそんな事がなかったせいか、リユクシーは気づけばイチシと触れたがつている自分に、戸惑いを隠せない。

だが、この浮いているような気分ではいけない。

これからリユクシーが阻止せねばならないのは、地獄の炎に灼かれたシェイドの再現劇

イチシを灰にしてなるものか。絶対に。

二人が去った後、同じ場所に立っている人物がいた
だが、彼女に気づく者はいない。

宿泊客は皆、彼女のそばを素通りしていく。

そう、彼女の記憶を覗かせる相手はただ一人
リュクシーだけだ。

花の香りにやられたか？

あの時、振り向いたマディラの後ろにいたのは。

「
……」

あの男はもういない。どこにも

「おう、来たか」

部屋に入ると、ジンが落ち着かない様子で室内をうろつろつとしていた。

ヘリオンはリビングのソファに膝を抱えて座り込んでテレビを見ていたが、二人に気づくと立ち上がった。

「お茶でも入れるよ」

「いや、いい。それより話を聞きたいんだ、ヘリオン」

リュクシーが声をかけると、驚きと猜疑の入り混じったような目でこちらを見返してくる。

「ボク ？」

「ああ」

「ジンは口を挟むなよ」

「あ？どういう意味だ」

イチシが釘を刺すと、ジンも神妙な顔になる。

「カレドの話を知りたいんだ。カレドの転送機事故の話だ」

「おい！ヘルは何も覚えてねえぞ！！」

話を中断させようとするジンを、イチシが制した。

「必要なんだ。ジンは黙っててくれ」

「んな事言ったって、覚えてねーもんは」

「ボク、思い出したよ」

「ヘル、お前……！！」

できれば思い出さないまま過ごしてほしいと思っていたのか、ジンは娘の言葉に声を失った。

ヘリオンはゆっくりとソファへと座り直すと、顔をそむけた。

「聞かせてくれないか。何か 見ていないか？」

リクシーは静かに問いかける
だがヘリオンは目を瞑り、そのまま口を閉ざしてしまう。

「少年を 見た……」

小さな小さな声で、搾り出すように……ヘリオンは語り出した。

「最初、監視塔の上から火が上がって……焼け崩れて……周りの家にも火が広がって……」

（ 監視塔から火が？ 転送機管は地中に埋め込まれていたはず

……)

ヘリオンの証言には最初から違和感があった。

「エレファと一緒に逃げようと外に出たら
監視塔の燃えてい
る瓦礫の中に人影が見えたんだ」

ヘリオンは膝を抱えて体を縮める
今、彼女の中にかつての恐
怖の体感が蘇ってきているのだろう。

「それが
少年だったのか？」

「笑ってたんだ！！炎の中で、狂ったみたいに
そこから現れて……周りの人間が瓦礫と一緒に吹き飛んだ！！ボクも……
エレファも吹き飛ばされて。壁に叩きつけられて
目を開けたら、目の前にそいつが立っていて……！！」

「もう止める、ヘル……！」

悲鳴に近い声を搾り出すヘリオンに、ジンはたまりかねて叫ぶ。
だが、まだだ。その少年の話を聞かなくては。

「続きを聞かせてくれ、ヘリオン」

「……」

すすり泣きをして、ヘリオンは黙り込んでしまった。確かに思
い出させるのはかわいそうだが、聞かなければならない。

「エレファが 逃げろって。ヘル、あなただけでも逃げなさい
って エレファがそう言った瞬間、そいつが笑いながら言った
んだ……」

『母親が子供の死を見る？ 子供が母親の死を見る？ 選ばせて
あげるよ』

ヤメテ、コノコニテヲダサナイデ

！！！！

『じゃあ、母親が死ぬといい』

悲鳴を上げて倒れるエレファ ヘリオンは、化け物から目を逸
らす事ができない。

母はしばらくもがき苦しんだ後、そのまま動かなくなった だ
がヘリオンは、化け物から目を逸らす事ができないのだ。

『そして子供は親のシェイドを手取るがいい。それが捕縛士の輪
廻だ』

アッハハハハハハ
るよー！！

！！！！捕縛士なんか、いくらでも作ってや

簡単さ！！簡単だ！！お前らの命なんて、ゴミだ！！！！

「ボクは ボクは怖くて動けなくなっ
て……」

エレファはどうやって命を奪われたんだろう

少年はエレファ

に触れはしなかった。

なのに、エレファは喉をかきむしって、もがき苦しんで

「後は　よく覚えてない。気づいたら……ジンと一緒にだった」

「ヘル　悪かった。一緒にいてやらなくて。お前たちを助けて
やらなくて」

「うっん……ジンも一緒だったらたぶん　殺されてたと思う」

ヘリオンが見たのは人間なんかじゃない。

あれは化け物だ。誰にも、どうする事もできない

「容姿は覚えていないか？　その少年の」

「もういいだろう、そんな事聞いたつてとつくに成長しちまつてる
ぜ」

「　それでも、今の容姿の手がかりにはなる」

ジンの反論には、全否定したいリクシーだったが　シェイド
体は年を取らない。

今も当時と同じ《少年》の姿のまま、凶行を繰り返しているに違
い。

「顔とか、何も　思い出せないんだ。靄がかかったみたいに……」

「そうか。辛い話を話させたな。後はなるべく忘れる様にしてくれ」
ヘリオンから聞きだせるのはこれが精一杯だろう　そして確信を得た。

今回の任務の抹殺対象に、ヘリオンも含まれている。

理由は、ヘリオンが目撃したのは《ドラセナⅡロナス》だからだ。
彼は少年の姿をしており、炎というシェイドの属性を用いて、いくつかの場所に己の死の残像をばらまいている。

《ドラセナⅡロナス》を葬る場所にランドクレスを選んだのは、彼の死の瞬間に共鳴する何かがこの地にあるから。

それは人か、土地か、形を失った記憶であるのか　それはまだ分からない。

その《何か》が共鳴する時　それが、再現劇の行われる運命の日。

その日までに、ドラセナⅡロナスの目撃者たちは様々なルートでランドクレスに集められ、舞台は作られる。

期限は一体いつか　それまでに、リュクシーはドラセナⅡロナスの秘密を暴かなくてはならない。

「ジン、ヘリオン。聞いてくれ」
「なんだ」

ヘリオンを膝に抱きかかえたまま、ジンは問う。

「私たちが今回の任務で戦わなくてはならないのは、恐らくヘリオンが目撃した《少年》なんだと思う。ヘリオンにこれ以上記憶を思い出させるのは危険だ。少年を呼び寄せてしまう危険がある。だから二人にはホテルから出ないで欲しい。ジンはヘリオンのそばにいて、守っていてやってくれ」

「お前ら二人だけで動き回るつもりか」
「お前たちが面倒に巻き込まれたら、オレたちが動けない。そういう事だ」

やはりジンを納得させるのは困難なようだ　リクシーとイチシだけで行動すると言った瞬間、ジンは眉間に皺を寄せた。

「もちろん、やってもらいたい事もある。ニュースを見て欲しい。恐らく、ランドクレス内の人口に動きがあるはずだ。他国と国民を交換したり、難民が増えたり。後はこれからランドクレス内でどんなイベントが開催されるか。イバ教の祭りや国民の行事。そういうものをチェックしてくれ」

「何か関係があるのか？」
「ああ。あるかもしれない」

「……………」

ジンは腕の中にいるヘリオンを見つめた。

それに気づいたヘリオンは、涙の跡をこすると顔を上げた。

「ボクは平気だよ。ホテルで大人しくしてるし。だからジンも行つていいよ」

「分かった」

ジンが頷いたので、リュクシーたちはこれはマズイ展開だと目を合わせた。

「オレはヘリオンとここにいるぜ」

だが、ジンの口から出たのは真逆の言葉だった。

「ジン!？」

「ゴデチャでどんな目に合ったか忘れたのか？オレはもう、お前から離れねえぞ」

自分が置いて出て行ったばかりに、ゴデチャで誘拐されかけた娘

そもそもカレドでも同じ間違いをしたのに、何故自分はヘリオンを置いて旅立ってしまったのか。

「ただし！！お前らがどこにいるのかはちゃんと書いてもらつて。夜もここに帰って来い！いいな！？」

「ああ ここを拠点にして調べるつもりだ」

「で、どこに行くつもりなんだ」

ジンとヘリオンはこれで取りあえず妥協するしかあるまい。

新たな危険から遠ざける事ができるだけ、マシというものだ。

「まず行こうと思っている場所は2箇所。イーバエルジュの特設図書館と これだ」

胸元からマッチを取り出して、机の上に放った。

その行為に、ジンも一瞬ぎよつとしたようだが、イチシをちらりと見ただけで何も言わなかった。

「なんだ？酒場のマッチか？」

「みたいだな」

「どっちから行くんだ？」

「悪いが、オレは図書館なんかに行っても役に立たないぜ？」

イチシの問いに、リュクシーは少し考え込んだ。

確かに図書館ではイチシは暇を持て余しそうな気がするが
別行動というのは避けたい。

イチシは何か手がかりを見つけても、リュクシーを遠ざけようとして隠すかもしれない。

図書館でまずはルドベキアについて調べるか。
酒場に行き、レアデスに会いに行くか

「もうすぐ夕方だしな。イーバエルジュの公共施設ってのは、夕方には閉まっちゃうのが多いぞ」

ジンの言葉に、リュクシーは決めた。

「まず図書館に行こう。酒場はその後だ」

EPISODE i - 11

イーバエルジュ国立図書館は、歴史の古い建物である。

かつては王族の離宮として使用されていたそうだが、国土が海岸線に侵食され、国民の生活の場が内陸に迫ってきていた事もあり、現在の水上都市計画が持ち上がった際に、国民に明け渡したものだらしい。

そうは言っても、国立図書館はイーバエルジュ内にあり、国民の誰もが利用できる空間ではなかったのだが。

紙という資源が無造作に使用されていた時代の書物から、世界が二分されてからの電子書類まで、あらゆる文書が保管されている場所とはいえ、現代文明を捨て、信仰だけを抱えてスタニアス大陸へ移住した宗教者たちの書物は、こちらの大陸では有害図書として破棄されていたし、各国の政治体制を脅かす危険性を秘めたものなどは、当然保管されてはいない。

都合の悪いものは全て取り除かれてしまっているとはいえ、リユクシーが調べたいのは史実などではないから問題はない。

知りたいのは 電子新聞の《ルドベキアの大火災》の記録だ。

昔は王族の別荘だったのも頷ける大きな門をくぐり、リユクシーたちは図書館へと足を踏み入れた。

入り口には網膜センサーが設置されており、入退室を監理しているようだ。

石造りの古い建造物なのに、セキュリティは最新のものになっているようだ。

スタニアス大陸で唯一独自の信仰色を残しているランドクレスだが、セントクオリスを初めとする先進国の技術を取り入れているこの国は、紛れもなく文明を捨てられず未だに浪費と破滅の未来へと突き進む《こちら側》の人間の集まりなのだ。

（何故、ランドクレスだけ特別扱いなんだろうな　　）

この国は、数少ない海産物資源を供給できる国だからだろうか？

だが、それだけでは理由にはなるまい。

海産物資源においては筆頭ではあるが、全体割合でいえばエジヌスやヴィーツリーを始めとする農業国家の方が供給率は大きい。

だがエジヌス周辺では、宗教は遺物として語られるものとなっていたし、明らかにランドクレスだけ異質だ。

（観光業のせいかな？　だが、それだけの為に死罪を適用するよ
うな法律は作らない気がする）

ランドクレスは、ラジェンダ―テーマパークのように作られたコミ
ュニティではない。

（そう シティアラの民と同じ、信仰の残る地なんだ、ここは）

リユクシーたちが網膜登録を終えると、扉の前に設置されている機械から、音声と映像が流れてきた。

館内の見取り図や、書物の検索の仕方等を説明され、二人はようやく中に入る事ができたのだった。

図書館の中は、人気があまりなく、静まり返っていた。

既に夕刻近く、日は傾いているせいか、昼間の熱気は影を潜めている。

「閉館まであまり時間がない、急ごう」

リユクシーは真っ先に《検索くん》を探す。

書物も電子文書も簡単に調べられる、この図書館の名物コンピューターの事だ。

「あれか？」

側面に妙な生き物が描かれている青い機械がいくつか並んでいるコーナーがある。

「何でキャラクターがタコなんだ？」

「さあ…」

ランドクレスで漁獲される生き物なのだろうが、何故タコを選んだのかはリユクシーに分かるはずがなかった。

館内の豪華絢爛な装飾とは明らかに馴染んでいない《検索くん》を見ていると、いくらでも疑問が沸き上がって来たが、今はどうでもいい。

ピッ。ピピッ。

画面に触れると、リクシーは検索ワードを入力した。

《ルドベキア 大火災 事件》

検索中の間、変なタコのキャラクターがくねくねと画面内で踊っている。

よく見ると、機械の片隅には”ヴィーツリー政府より寄贈”と刻印がなされている。

「この悪趣味なタコは、イチシの国からの贈り物らしいぞ」
「オレのせいにするな」

友好国からの寄贈物だから、こんなミスマッチな代物を由緒ある国立図書館に置いてあるのか。

建築美で知られるイーバエルジュに、《検索くん》を贈与したヴィーツリー政府の意向はよく分からないが。

ピピッ。

検索が終わると、薄型カードが出てきた。ゴデチャの身分証明カードと同じような造りだ。

この携帯型カード機器に、検索結果が表示される。

「検索結果は ほとんどがこれだな……」

画面に映し出されたのは、同じ事故の電子新聞記事ばかりだ。

「14年前 ルドベキア・ドームが壊滅した大事故。軍の司令塔が爆発して、ドーム内部を全て焼き尽くした……」

ドームの運営を担う軍司令部が機能しなくなり、外からの侵入者を防ぐ完全防備型のドームが仇となった。

爆発は鎮火されるどころかドーム内の酸素を食らい尽くし、ルドベキア中枢の保護地区、ルドベキア・ドームに住む生き物は死滅したのだった。

国としての基盤を失い、放射能で汚染されたルドベキアを捨て、多くの民が他国へと亡命した。

瓦礫のみとなった土地に残ったのは、どの国へ行っても重労働を強いられる生殖能力のない人間だけだった。

14年経った今、ルドベキア・跡地には、未だ瓦礫の山が横たわっている。

そして、様々な理由で迫害され、行き場のない者たちが集い、身を寄せ合って生きているという。

ルドベキアのドーム全てをコントロールしていたメインコンピューターが死に、防御システムが無効化になると、近隣国からも略奪者たちが集まり、資源を、食料を、人間を盗み、他国へと売りさばいた。

ルドベキアには他にも保護地区があったから、格好の的となったのだろう。

生殖機能を持つ人間は、闇市場で高値で取引される。
ルドベキアからさらわれた人間たちは、各国へと散り散りになった。

「あっちだ」

カードから出た光が、探し物のある場所へと伸びる。
リクシーたちは、それをただ辿ればいいのだ。

メダリアであれば、コンピューターの中でデータの収集も閲覧も済んだ話だが、ランドクレスの図書館は部分的にアナログな造りになっているようだ。

ここでは、人間が書物のある方へと出向かなければならない。

長い渡り廊下を抜けると、巨大なキャビネットがずらりと並んだ書庫へ出た。

光を辿ると、一つの引き出しへと辿り着く。

中を覗くと、ケースに入れられ番号別に並べられたICチップがぎっしりと詰まっていた。

「……これだ」

その中から一つを選ぶと、読み込み用のコンピューターの元へと持っていく。

ICチップをセットすると、映像の音漏れを防ぐため二人はヘッドフォンを装着し、映像が再生されるのを待った。

「記事は皆、似たようなものばかりだな」

ルドベキア・ドームの生存者が皆無だった為、爆発の原因は様々な憶測が飛び交ったが、確証のあるものはなかった。

（マデイラⅡキャナリーとドラセナⅡロナスがこの事件で死亡したのは確かだと思う　だが、事後調査の記事では何もつかめそうにないな）

「他の火災事故についても調べる。カレド以外にも、人の集まる場所で大規模な火災が起こらなかったか　……」

リュクシーは辺りを見回すと、真っ先に目についた《検索くん》の元へ駆けて行き、また入力を始めた。

「本当に検索機能しかないのか……この機械に映像再生機能をつければいいのに……お前の意味が分からない」

ブツブツとつぶやきながら、作業を続けているリュクシーをイチシは暇そうに眺めるだけだった。

「オレがする事はあるか？」

「事件の発端が14年前だとすると、既に電子書類しか発行されてはいないな。だとすると、ない」

マディラたちの事件はそう古いものではなさそうだ。

紙ならば、イチシにも搜索を頼めたかもしれないが、出番はなさそうだった。

「適当にうつついてるぜ。」

心配するな、図書館からは出ない」

「ああ」

検索くんと格闘しているリユクシーを残し、イチシはこの巨大な図書館の中を歩き始めた。

図書館の中は静かなものだった。

たまに書棚の影に人が立っているのに遭遇するのみで、何もおもしろい事などない。

古い本が陳列されている一帯に來ると、独特の臭いが立ち込めている。

それは古い紙の臭いだったが、イチシには初めて嗅ぐ臭いだった。埃っぽいとしが表現しようがなかった。

(……………)

ふと、通り過ぎた書棚の間に立っていた人物に何かが引っかかり、イチシは足を止めた。

3歩ばかり戻ると、そこにいた人物をもう一度確かめる

（ クレスト ）

そこには、クレストⅡシートラが立っていた。

古い本を一冊、手に取り眺めている。

その横顔は間違いなく、クレストのものだった。

久しぶりだな、クレスト

あんた、まだランドクレスにいたの

か。

そう言おうと思ったが、声は出なかった。

イチシは気付いたのだ

これが、古い記憶である事に。

クレストを取り巻くシェイドが、イチシに伝わってくる。

早く

早く見つけなければ

時間がない

きつとあるはず

オレはまだ死にたくない

絶対に死なない
やる

見つけて

どうしてカラス病がオレに

時間がない！！

クレストの横顔は真剣そのもので、手にした書物を読み漁っていた。

（ああ、クレストも　　そう、だったのか）

クレストもかつて、カラス病の恐怖に襲われ、足掻いた一人だったのか。

この場所で　　運命から逃れようと、必死だった。

だから、イチシにはこの映像が見える。
クレストの感じた恐怖が手に取るように分かる

だが 何故、今シンクロする？

イチシは今もうカタス病に恐怖は感じていない。
マディラ「キャナリー」によって一時的な治療は施されたようだが、
イチシの寿命はさらに短いものになったのだから。

死は逃れようのないものになったのだから

イチシはゆっくりとクレストのいる場所へ歩き出す 近づくに
つれ、過去の記憶は空気に溶け出し、消えていった。

イチシは書棚を見上げる。
クレストが読んでいた本はどれだ。クレストの足元に積み上がって
いた本は？

クレストが何故この地にいたのか、今初めて知った
クレスト
はカタス病を治す何かを探しにこの地へ来たのだ。
そして果てた？ 何故？ 病で？ 別の何かで？

イチシの知るクレストは 冷静で時に底意地が悪く、シェイド
を操る術を知っていて……それだけだ。
あの時は、シェイドという力の存在を知り、それだけで頭が一杯だ
った。

目の前にいる男がまさか死人かもしれないなんて、気付きもしなか
った。

クレストは生きていたのだろうか。それとも死んでいたのだろうか。
彼が何の目的で生きていたのか、それとも死んで尚そこに在ったの
か、イチシは何も知らない。

クレストはカタス病について調べる為にここにいた？

イチシは気付く。
だが上手くまとまらない。

クレストがもしカタス病で死んだのならば、この地では病を治す《何か》を見つけれなかったという事。
だが、死して尚、クレストはこの地に留まっている。

クレストがカタス病ではなく、他の要因で死んだのならば、それは何だ？
カタス病について調べている最中に、死んだ？……誰かに消された？
そして未だこの地に留まっているのか？

いや、この記憶は全く関係ないのかもしれない。
クレストがかつて、この地でカタス病について調べていたという事実だけがあつたのかもしれない。
イチシが遭遇したクレストは生きていて、この地で手がかりを見つけれなかったクレストは、他の国に旅立ったかもしれない。

しかし、すぐに矛盾に行き当たる。

あの頃のクレストは、死への恐怖に取り憑かれてはいなかった。
カタス病が治った後だったのか、それとも 既に病に倒れた後だったという事になる。

カタス病に対しては、今現在完璧な治療法は存在しない。

薬を投薬し、発病を遅らせるだけしかないと聞く。

クレストが生きてそこに在ったのなら、やはり死という化け物に背後を取られ、恐怖の中を進んでいたはずだ。

（シェイドを教えたあんた自身が …… だったのか）

邪悪な他人の意識に支配されるな、己の意識の力を操れと言ったクレストが《邪悪》そのものだったなんて。

イチシは今でも思っていた。

死して尚、この世に留まるのは邪悪であると。

例えそれが誰かの為であったとしても、結果は違うのだ。
守りたかったはずの誰かを逆に苦しみ、その場から歩めなくするだけだ。

カライをかばうリクシーを見た時、その想いは強くなった。
自分は絶対にああはならないと誓った。

だが今は自信がない。

（オレは できるだろうか）

「これだ……」

クレストが読んでいた本の背表紙を発見し、イチシはぎゅうぎゅうに詰め込まれた書棚からその1冊を引き抜いた。それと同時に、埃が辺りに広がる。相当古い本だ。

「ランドクレス王国の 伝承？」

それは、ランドクレス王家の成り立ちや浸水林に伝わる伝承文学の本だった。

イチシの解釈で言えば、昔のおとぎ話だ。

目の前にある書棚は、ランドクレスに関しての本がほとんどの様だった。

イチシはクレストが調べていたと思われる本を次々と抜き出していく。

ランドクレスの生態学、ランドクレス王家の家系図、ランドクレス王国法律書。

クレストが見ていたのはたぶんこの本たちだ。

こんな物を調べて、カラス病の何が分かるというのか？
ランドクレスに何か秘密があるのか。

《閉館１０分前になりました。ご利用の皆様は退館の準備をお願い致します》

混乱する中、図書館に音声案内が流れた。

もう時間がない　イチシはそれらの本を持ったまま、リユクシーの元へ戻る事にした。

図書館というものをリユクシーから説明してもらったが、本については貸し出しも行っているらしい。
持って行っても問題ないだろう。

リユクシーはさっきとは違う場所で、なにやら機械と格闘していた。

「どうだ？」

「今、カードに書き込みをしている。腹が立つから、全部カードにダウンロードした」

入り口で発行された電子カードに、探してきたデータを書き込む。その作業を繰り返し、リユクシーはデータそのものにはまだ目を通していなかった。

「イーバエルジュは、あまり機械的なものを持ち込みたがらないかな。それにしたって、この使いにくいシステムはどうにかならないのか」

リユクシーは文句を言っていたが、イチシには何故そんなに苛立っているのか理解できなかった。

分かったのは、この図書館での情報探しは面倒らしいということだけだ。

「その本を借りるのか？」

リユクシーがイチシが本を抱えているのに気付き、問う。

「ああ」

クレストの記憶を見た事は、後で話そうと思い、短く返事をした。今のリユクシーは別の事で忙しい。

「あっちのカウンターに管理人がいる。手続きはそこだ。私はこれが終わらせる。閉館5分前に入り口で会おう」
「分かった」

振り向きもせず、カウンターの方向を指したりユクシーを置いて、手には伝承学の本を、残りは右脇の下に挟み、古い本をパラパラとめくりながらゆっくりと歩き出す。

本にはいくつかの挿絵があった。

物語を描写しているのだろう　　竜神が現世に降り立ち、人と交わる姿。

エルイントの精霊が竜神の住処を守るために、樹木となり侵入者たちを阻む姿。

エルイント樹を焼き払おうとした敵国の人間が、竜神に殺される姿。

そこには確かに、おとぎ話しか書かれていなかった。
カラス病なんて、この物語が生まれた遙か未来に起こる不治の病の手がかりなんて、どこにも書かれていないはずがない。

もつともイチシは口語ならば何大陸語かは理解できるが、文書となると簡単な単語しか分からなかった。

だが、挿絵といくつかの単語を拾い上げるだけでも、物語の筋くらいは分かる。

これは単なる昔話だ。

「……」

イチシはその挿絵を見た時、自然と足が止まった。

そこに描かれていたのは 戦争で傷付いた民に、自らの血を与え、人々を救ったエルイントの精霊の姿。

髪が地に着くほど長い、若い女の姿で描かれるエルイントの精霊

この女はエルイント樹木そのものを現している。

この女の血が、人間を救った？

その時、イチシは思い出した 入国に際して手渡されたランド
クレスの簡易法律書。

イーバエルジュ法第17条「王家所有の浸水林」第1項 「い
かなる地位の者、いかなる事由をもつても、エルイント樹を傷
つける事があつてはならない。エルイント樹に危害を加えた者、死
刑に処す。

エルイント樹は、法律によって守られるべき存在 それは信仰
だけが理由ではない？

そこには、別の理由が存在するのか？

（オレは何を 今はカタス病について調べている場合じゃない

はずだ)

何故《今》なのか
もっと違う時であれば、世界を変えられた
かもしれないのに。

「……」

イチシは食い入るように、エルイントの精霊の絵を見つめた。

世界を変える カタス病の薬を見つける。
それはどれだけの人間の希望となる事だろう。 しかし、それを巡っ
てどれだけの争いが起きる事だろう。

世界は大きく変わってしまう。
次に戦争が起きれば、残された大地も海も汚染され、人間の寿命は
さらに縮むかもしれない。

「どっちにしる 結末は同じなのかもな」

だが、先に進まないわけにはいかないのだ。
それは生きている限りは誰についても言える事だった。

生きている限りは。

では、死して尚そこに在る者たちは何を思うのだろうか。
何の為に在り続けるのだろうか

（クレスト オレとあんたが出逢ったのは、この為だったのか
？）

だが、今のイチシには何もできない。
イチシには、他にやらなくてはならない事がある。

退館時刻ギリギリに図書館を出た二人は、酒場が開くまでにまだ時間があつたので、イーバエルジュの高級料理店に入る事にした。

高級店ならば個室の店がほとんどだ。

尾行の捕縛士たちを少しでも遠ざけ、資料に目を通したかった。

「こちらはエジヌスの有機野菜のみで育てられたジーナ牛のステーキでございます」

料理を運ぶ給仕が、一々と料理の説明をしてくれる。

世界的な食糧難の時代に、家畜に最高級の食材を食わせるとはどういう事だと二人は思ったが、このいびつに偏った世界の頂点に経つ《資産家》たちは、実際にこういう生活をしているのだらう。

外の人間はその日に食べるものを確保するためだけに、毎日働いている。

腹が膨れればいい。明日に繋がればいい。

そうして蓄積された有害物質が体を蝕み、また人間の寿命は縮む。

かつて人の寿命は100年あったそうだが、今はその3分の1を生
きればいい方だ。

「説明はいらない。二人きりにしてくれないか」

「失礼致しました。それではごゆっくりおくつろぎ下さい」

給仕を追い払うと、二人は目の前の料理を見つめた。

「とりあえず…食つか」

「ああ」

食べ物を残すなんて言語道断の行為であったから、食べないという
選択肢はなかったが、こんな特殊な食事は味も分からなくなりそう
なほど、複雑な思いで一杯になった。

カチャ

上品にナイフとフォークで食べていたイチシだが、そのうちナイフ
は皿の上に置きっぱなしになり、料理にフォークを突き立てて、大
きいままの塊を口に詰め込み始めた。

外で育った人間は皆、早食いの傾向がある。

誰かに盗られないように、手に入れた食事は早く腹の中へ入れてし
まいたいのだろう。

昔図鑑で見た頬に袋を隠した小動物のようだと、リユクシーはイチ

シの食べっぷりを見ながら思った。

リユクシーはというと、食事をしつつ、カードに詰め込んだルドベキア大火災についての電子新聞に目を通していた。

ルドベキアが滅んだ原因となったのは、軍事機関の中枢が収められたシックザール・ドームが大火災により機能停止した事。

《保護地区》という特殊区域を作り、ドーム型都市を連結させるという現代において主流となった都市構成を初めに取り入れたルドベキアは、政府機関によって構成されたシックザール・ドームのマザーコンピューターが全てのドームの制御をコントロールしていた。

人口の流出を恐れ、コンピューターによって《保護》された住居地区。

シックザール・ドームの大爆発により発生した噴煙は他のドーム内にまで侵入し、閉じ込められた人々は煙を吸い込み、喉を焼かれて次々と倒れたのだった。

シックザールの中心には、指令塔である高層ビルが構え、その眼下に空軍基地が配備されていたらしい。

火種は司令塔にあったと記録に残されている。

高層ビルの上層部で爆発があったのを、生き延びた人々が目撃していた。

花火のように碎けて散ったビルの欠片がドーム内に降り注ぎ、ミサイル倉庫へと引火した。

軍用機が離着陸する時のように、ドームの天井を大きく開けてしまえば、脱出できた人間もいたはずだった。

他ドームへの連結路を遮断してしまえば、被害はシックザールだけで済むはずだった。

だが、それは不可能だった。
マザーコンピューターは完全に機能を停止していた。

（そういえば　　ヘリオンが、最初の火災は火の手のない見張り塔から出たと言っていたな……）

塔　　《その瞬間》を作り出す要素の一つに、《高い場所》というのがあるのかもしれない。

（カレドの火災も、ドラセナⅡロナスの仕業であるとしたら
ドラセナⅡロナスは《そこ》にいたという事になる）

ドラセナⅡロナスは12、3歳くらいの少年の姿をしていたという。
軍事施設内部に《子供》がいた……それは何を意味するのか。

リュクシー自身がそうであったから、答えは明白だった。

ドラセナⅡロナスはルドベキアの研究対象だったのだ　恐らくは、メダリア・ドームと同じくシェイド研究の被験者だった。

（　　こんな偶然あるわけがない）

ルドベキアでシェイド実験されていたドラセナⅡロナスが、今はメダリアから特級捕縛士とされている。

ルドベキアとメダリアには繋がりがある　そしてその繋がりとは。

（シュラウドしかない　　！）

シュラウドには元々いくつかの噂があった。

亡国の科学者であり、メダリア完成と同時にその責任者に収まった

あれは根も葉もない噂ではなかったのだ。

（だから、今回の作戦にシュラウドは参加しない　何故ならルドベキア壊滅の真相を知っているからだ）

真相を知っているのだ　　いつ如何なる時に、ドラセナⅡロナスを呼び起こしてしまうかもしれない。

相手は、人々に己の死の体験を撒き散らすような魔人だ　　迂闊に共鳴してしまえば命取りになる。

シュラウドの過去に近づいている　　それは奇妙な感覚だった。

あの男にそんなものがあるなんて。リクシーにはどうしても連想できなかった。

だが連想できなくても、それは事実なのだろう。

イーバエルジュのホテルで感じたあの《声》の主は、やっぱりシュラウドだったのかもしれない。

あれはまだ生きていた頃のシュラウドだったという事が。

肉体を失って時間が過ぎてしまえば、人間とはあんなに無感情になれるものなのか。

（シュラウドは今置いておこう。今は　　そう、ランドクレスで《再現》したら、どこがターゲットになるかという事……）

ランドクレスの水上都市には高層の建築物はない。

すると、陸地であるイーバエルジュが王家の領地に絞られる。

イーバエルジュで目に付く高層の建築物といえば、やはりリュクシ
ーたちが待ち合わせに使った時計塔だろう。

真っ白な壁と、身に付ければ幸福が訪れるという青色に塗られた屋
根は、イバ教でいう所の平和のシンボルである。

もう一つ、ランドクレスの中では高層といえる建物がある。

それは王家所有の浸水林の奥に佇むランドクレス王宮である。

ランドクレス王宮には、滅多な事では近づけない 作戦を実行
するにはリスクが大きいように感じられた。

（ドラセナⅡロナスを追い込む場所 時計塔か……）

「さっき図書館でクレストを見た」

カシャンッ

「……なんだって？」

突然のイチシの告白に、リュクシーは思わずナイフを皿の上に落と
した。

「クレストもカタス病患者だった。治療法を探して図書館にいたらしい。これがその時読んでいた本だ」

イチシの口調は《過去形》である。

それは イチシが見たのは生身のクレストではなく、クレストの《記憶》であつた事を現していた。

ドサドサドサツ!!!

イチシは床に積んであつた本を、テーブルの上に乗せた。

古い本からは何か粉煙のようなものが飛散していたが、そのすぐ隣でイチシは平然と食事続ける。

「クレストは クレストも、なのか？」

イチシが出会つたという特級捕縛士クレストⅡシエトラは生身の間であつたのか？

それとも マデイラⅡキャナリーやドラセナⅡロナスと同じく、肉体を失つたシェイド体だけの存在なのか。

リククシーはクレストⅡシエトラが読んでいたという古い本を手にとつた。

「オレが出逢つた時のクレストは、図書館で見た時と別人だった。

自分の寿命に焦っている様子は一切なかった」

リククシーはランドクレスの伝承文学の本を手にとった。
元は白かったのだろうが、黄ばんでしまった背表紙には、王家を現す紋章が描かれている。

パラパラとめくると、内容は王家に伝わる伝承のようだった。

そして やはりイチシの時と同じように、一枚の挿絵に目が留まる。

エルイント樹。

壊れかけた命に再び力を与えた精霊の血。

「何故宗教が排除されたこの大陸で、ランドクレスだけが信仰色を残しているのか ずっと不思議だった」

スタニアス大陸連合会が了承していないはずがないのだ。

この大陸に残った国のトップが集う連合会 その了承なしに、ランドクレスが今の状況を保てるはずがない。

「連合会を納得させるだけの《理由》があったはずなんだ」

それが《エルイント樹》だったら？

連合会は既に、カラス病の特効薬を発見しているのだとしたら？
それを分けてもらうつ見返りに、ランドクレスは独特の風習を残す事を許されたとしたら？

王家の血族しか踏み入る事を許されない浸水林　　禁を犯した者
には極刑を課す。

それは信仰だけが理由ではなかったのか。

ランドクレス王家は、世界と渡り合うとっておきの切り札を、ずっと隠し持っていたのか。

（だが今は　……）

今この可能性に気付いた所で、自分たちには何もできなかった。

クレストを探し出し、真実を確かめる時間なんてない。
優先順位は別にある。

「クレストは　　今もここにいるはずだ。あいつはきっと、ランドクレスの秘密を追ってたんだ」

脇道にそれる時間がない事は分かっていた。

だが、偶然なのか？何故今なのだ？それに意味はないのか？

イチシにはずつと何かが引つかかっていた。

「オレは納得できてない。何故今なんだ？今のオレたちに必要のない情報ならば、何故オレはあいつを見たんだ？」

「繋がっている と？」

「分からねえ」

そう、何もかもが分からないのだ。

繋がっているのか繋がっていないのか。そんな討論は無駄だ。

「分からないなら確かめに行こう。考えていても何も変わらないしな……」

リュクシーも残った料理を無理やり口に詰め込んだ。
悠長に食事をしている時間はない。

「私も情報から気付いた事がある。ドラセナⅡロナスは高層の建物の中で死んだんだと思う。ヘリオンの目撃証言にもあった。最初の火の手は監視塔から上がったと。カレド火災の原因とされる転送機管は地中深くに埋め込まれていた。ヘリオンが見たものと明らかに違う」

「高い場所 それが重要なのか？」

「理由は分からないが。恐らくは」

「ランドクレスで高いといえば」
「そう、時計台だ」

人々が待ち合わせに使うあの場所が、火の海になる　あそこが
ドラセナⅡロナスの死の再現場所になる。

（　だからランドクレスなのか？）

一瞬、リユクシーは考えてしまった。

ドーム型都市で作戦を遂行すれば、ルドベキアと同じくかなりの人間が死ぬだろう。

ランドクレスは特殊な国だ。

イーバエルジュを取り囲むのは原生林と水上都市。

時計塔で大火災が起きても、水上都市だけは機能を損なわず生き延びる。

だが人々は生き残ったとしても、数少ない自然が　汚染から免れた僅かな希望を、またしても人の手によって破壊してしまおうというのか。

「まさか……」
「どうした？」

セントクオリスなら有り得る可能性に、リユクシーは気付いてしまった。

「時計台で大火災が起きれば、軍は水上都市を陸地から切り離してやり過ぐす。そして陸地は孤立する。浸水林を守るのは、残った軍隊だけになる」

「王宮を……制圧する気か」

どこまでも 自己中心的で浅ましい上層部の連中ならば、やりかねない。

「繋がったじゃないか」

浸水林の秘密を追っていた人物 それは誰だ？
イチシもすぐに気付いたようだ。

「よし、イチシがクレストと出逢った場所へ行こう。案内してくれ」
「じゃあ、水上都市の酒場だ。ランドクレスでは一番治安が悪い。気をつけるよ」

「治安が悪いと言っても 酔っ払いがいるくらいだろう？」
「あんたは今、『非力な女』なんだぜ。忘れてるみたいだけどな」
「そういう意味か。確かに忘れていた」

気をつけるとは、暴れるなという意味かと、リュクシーは納得した。
イチシは別に役柄にこだわって暴れるなど言っただけではなかったが、リュクシーはそこまでは気付かなかった。

元々無茶をさせたくないとは思っていたが、今は特に 病院で検査を受けさせるまでは、絶対に力を使わせたくはなかった。

二人は汚れた口の周りを拭うと、若い資産家とその恋人に戻る。
食い散らかしたテーブルは少し直しておいた。

イチシと腕を組むと、退店の準備は整った。

「でも少し安心した」

「何がだ？」

「手がかりが見つかったからだ」

何一つ手がかりがなかった時に比べれば、今は進む場所がある。
きつと 見つけてみせる。

全員で逃げ延びる方法を イチシを助ける方法を。

EPISODE i - 12

「その姉ちゃん、ランドクレス名物のカログ焼きはどうだいっ！
？これを食べなきゃランドクレスに来た意味がないよっ！」

ランドクレスの最大の水上マーケット、エリュトル市場で立ち止まるのは危険である。

道の両脇には所狭しと小売店や食堂が立ち並び、立ち止まった途端、両脇の店から呼び込みがかかってしまう。

ランドクレスでは景観を守るために、水上都市建築には規制があり、通路横に建築物を建ててはいけない通りもあるのだが、エリュトル市場ではそんなものは関係ない。

建築物がないのを良い事に、商品を山のように積み上げたカヌーが、通路横に停泊していて、雑多ではあるが、それはそれでランドクレスらしい光景を作り出していた。

色鮮やかな衣類や、鍋等の生活雑貨、近海で採れた新鮮な魚、お惣菜を売っているカヌーでは、よくそんな狭いスペースで器用に料理するものだと関心してしまう。

「お姉ちゃん、一人で観光かい？連れはいないの？」

屋台の呼び込みをしていた男は、目の前で立ち止まった外国人と思

われる少女に話しかけた。

しかし、少女は屋台を物色するでもなく、かといって向かいの店に用があるわけでもないらしい。

進行方向へ真っ直ぐと視線をやり、他は目に映っていないようだ。

一瞬、何を見ているのだろうと、彼女の視線の先に目をやったが、夕方になってぼちぼちと観光客が現れ始めたいつものエリュトル市場の姿しかなかった。

「この店は何の店」

その時、少女がぼそりと言葉を発した。

視線は相変わらず一方向を睨みつけていたが、どうやら呼び込みの声は届いていたらしい。

「あゝ、カロゴ焼きだよ、カロゴ焼き！ランドクレス産のカロを、ゴラソースで味付けしてるよ！うまいよ、うまいよ！どうだい、一つ！」

鉄板の上でゴラソースの焦げた香ばしい匂いが立ち込めている。エリュトル市場で一番数の多い、カロゴ焼きの屋台である。

「いくらよ」

「200ルギ…」

その時初めて、少女は店に視線を向けた。

カロコ焼きと、値段、そして店番の男の顔を確認すると、また同じ方向へと視線を戻してしまったが。

「じゃあ、200」

少女は、ズボンのポケットから小銭を取り出すと、男に差し出した。

「……………」

しかし、男は代金を受け取るうともせず、焼いている途中のカロコをひっくり返そうともせず、穴が開くほど少女の顔を見つめていた。

「?…ちょっと!」

男が金を受け取らないので、少女が声を張り上げた。

「あ、ああ……」

我に返り、代金を受け取ると、手元の鉄板から白い煙が上がっている事に気づく。

「うおっ、焦げる！」

「……………」

少女は一瞬、呆れた顔をしたが、またすぐに視線を明後日の方向へと戻してしまう。

「はいよ、カロゴ焼き一つ！…なあ、お姉ちゃんさ……」

カロゴ焼きを手渡すその時、男は意を決して少女に話しかけた。

「あん？なによ」

馴れ馴れしく話しかけてきた男に、少女はあからさまに嫌な顔をする。

（性格は悪そうだが・・・）

その表情からは、彼女が愛想のない人間である事が伺えたが、それでも尋ねてみないわけにはいかなかったのだ。

「お姉ちゃんの名前、もしかして・・・ローラーデって言うんじゃない？」

「違うわよ」

男が言い終わると同時に少女は眉間にしわを寄せながら即座に否定した。

「あつ、あつ、じゃあ、ディレンティナ！？あつ、じゃあ、ファナピ！？あーつ、じゃあじゃあ、アイレー！？違っかつ」

「一体何の……」

少女が胡散臭げに眉間に皺を寄せ、今にも立ち去ってしまいそうなので、男は声を張り上げた。

「分かった！！ホーリーだ！？」

（何なのよ、こいつ　　！？）

ただの変態かと思いきや、最後の最後に自分の名を呼ばれ、ホーリ
ーは耳を疑った。

「ほ、ほんとに？　　ホーリー様なんだな！？」

「違うわよ！！バツカじゃないの！！」

驚いたのを勘付かれたのが腹が立って、男をホーリーは怒鳴りつけ
た。

「嘘だ！！あんたは、ホーリー様だ！！そうだろ！！」

「違うって言うてんでしょ！！」

散々違う名前を挙げておいて、嘘も何もないものだ。

声を荒げて、ハッと気付く まずい事に、尾行相手を見失ってしまっただけ。

ついさっきまで、5軒ほど先の店先で衣類を眺めていたリュクシーたちの姿が見えない。

「ああ、もう……！」

「ま、待ってくれ……！」

グイッ……！！

駆け出そうとしたホーリーだったが、服の裾を捕まれ、危うく転びそうになる。

「何すんのよ……！離れなさいよ……！」

「こ、これを……！！……！」

しかし、意地でも離れようとする男は、ズボンのポケットから薄汚れたマッチを取り出すと、ホーリーの手の中に押し付けてきた。

「こ、ここに来てくれよ、ホーリー様……！！待ってるから……！皆、探してたんだよ、あんたの事……！」

(!?)

男の偽りとも思えない真剣な眼差しに ホーリーは一瞬戸惑った。

「離せって言ってるのよ!!」

男を振りほどくと、ホーリーは駆け出した。リュクシーを見失うわけには行かない。

「待つてるから!!ホーリー様!!」

背中にあの男の叫び声が何度も届く ホーリーは手の中にある
マツチに一瞬だけ目をやった。

《Bar ウッドレイク

?.....いた!!》

リュクシーの後姿を発見して、ホーリーは少し安堵して、また距離を取って尾行態勢に入った。

まあ、あのリュクシーであっても、今の状況で逃げとは思えない。そう遠くへは行っていないとは思っていたが、すぐに見つかって安心した。

そして改めて、マツチに書かれた文字を眺める しかし、すぐに飽きて水路の方角へ投げ捨てた。

（あたしには関係ないわ）

自分が外部から連れて来られた人間だというのは知っていた

メダリアでは、オリジナルとシアター出身者がパートナーになるのが常だ。

ジラルドはシアター出身者。つまり、外部からやってきた人間は自分の方だ。

正直、外での事はほとんど覚えていない。

子供ながらにとてつもなく恐ろしい事があったのだけは何となく覚

えている。

それを思い出すまいと、頑なに記憶を閉ざしている自分がいる事も知っている。

でも一番重要なのは、その状況から自分を救い出してくれたのが、Dr・シュラウドであるという事だけだ。

だからホーリーは捕縛士として、Dr・シュラウドの為に戦う。彼の為に働く。

ホーリーの生まれを、あのカログ焼きの屋台の男が知っているのだとしても、ホーリーには関係ない。興味もない。

「ちょっとあんた！！今、ポイ捨てしたね！？道にゴミ捨てると罰金だよ！！こつち来な！！」

背の高い大女に引きずられていくホーリーの姿を、リュクシーは呆れたように見ていた。

（何をやっているんだかな、あいつは　　）

ジラルドの姿はないようだったが。

あれで、ジラルドがいると多少はバランスが取れているのかもしれない。

「その色、似合っぜ」
「そうか？　　じゃあ、この服にする」

何事もなかったかのように買い物続け、リュクシーはようやく病院から借りた服から着替える事ができそうだ。

「その先に観光客用の有料休憩室があるから、そこで着替えるといいよ」

衣類屋の店主に教えてもらった場所でリュクシーはランドクレスの民族衣装に着替える。

リュクシーはやはりズボンの方が落ち着く　スカートは覚束なくて好きではない。

民族衣装といっても、祭礼時に着るようなものではなく、ランドクレスの民が日常的に着用しているものである。

シンプルなシャツとズボンの上に、色鮮やかな布を巻くというのが基本的なスタイルだ。

日差しの厳しいランドクレスでは、日焼けを防ぐ意味合いもあるらしい。

外界任務に就いた時、《女》と特定されないようにと、服装は男女共用、言語は標準語をとメダリアに教育されてきた中で、考えてみれば自分でこうして服を選ぶ等、数えるほどしかない経験だった。

相変わらず選ぶ基準は保護地区の《女》たちとはかけ離れていたがそれでも最近、多少は外見を気にする気持ちも芽生えてきていた。

女子休憩室を出ると、入り口の所でイチシと鉢合わせた。

イチシもスーツ姿では悪目立ちするので、ランドクレスの民族衣装

に着替えた。

身につければ幸福になれるという青い貝殻のネックレスはリュクシ
ーとおそろいだ。

「ようやく楽になった」

どうしても襟のきっちりした服装を受け付けないうで、イチシは
首の辺りをさすっている。

「スーツも意外と似合ってたぞ」

「ダメだな。あんたと同じで、オレも落ち着かない」

自分と同じ理由か、ならば仕方ないとリュクシーは小さく笑った。

「市場を抜けるとシアメア地区だ。外国の船乗りたちが滞在する地
区で、倉庫街や酒場が多い」

ランドクレスの水上都市は内陸から順に分けられており、シアメア
地区は6番目 外周寄りの商業地区である。

一番外周のエマルジナ地区は外国からの船を規制する水軍が管理し
ている。

入港を許可された外国の船乗りたちが、一時の休息を求めて訪れる
のがシアメアだ。

外国人用の安宿や酒場が密集し、輸入品を扱う市場や、輸出品を保
管する倉庫街もある。

治安が良いとされるランドクレスで唯一、揉め事に巻き込まれる危

険があるとするば、シアメアだろう。
外国人同士の殴り合いのケンカ程度ならば頻繁に見かける光景だった。

「船乗り連中は、各国の政府の許可を持った正規の船しか入れないとはいっても、長旅で死んでも惜しくない種なしの人間ばかりだ。《女》と接触する機会なんてない。中には《女》に対して妙な認識を持つてるヤツもいるから気を付けろ」

「イチシの乗ってた船は、どこの国の管轄だったんだ？」

ふと気になって尋ねる。

「ユライフの船は世界連合所属の帆船だ」

「なるほど。どうりでボロかったわけだ」

世界連合では、表向きは汚染物質の廃棄禁止や資源の節約を唱えているが、実際は膨大な資源を費やして軍用機をいくつも所有している国がほとんどだ。

世界連合だけが時代を遡り、人力を動力とする公約通りの船を使用しているというわけだ。

（シェイド研究も 表向きは《人力》の先にある力のはずだが
……）

奇麗事を言っていられないほど世界が病んでいるのは分かっている。だが、共食いする以外に道はないのか？

アクミナータ大陸のように文明を捨て、過去に戻り慎ましい生活を

送る事よりも、人の命をも資源として利便性を追求する。

食料難という問題もある。

保護地区の人間たちは、人口は減った方が好都合とさえ考えているに違いない。

種なしの人間たちは、同列の存在ではなく資源として活用できればまだマシというわけか。

「離れるなよ」

シアメア地区に入り、通行人の種類が変わる。

日に焼けた屈強そうな船乗り、酒場の呼び込みをしている女達、ツアーガイドを連れた観光客もいるようだ。

確かにイーバエルジュに滞在するような金持ちたちだけでは、この地区は歩けないだろう。

「あの店だ」

イチシが指した先には 5階建ての大きな建物が見える。

窓辺に白色と青色の提灯を吊るしている年季の入った古い木造の酒場だ。

正面に周ると、屋根の上に据えられた大きな木の看板に店の名前が書いてある。

「ディゴアスール……ここは」

木の板に、大きく殴り書かれたその店の名を、リュクシーは知っていた。

レアデスに渡された酒場のマッチ そこには《ディゴアスール》と書かれている。

また胸元からマッチを取り出したのを見て、イチシも気付く。

「この店の事だったのか」

「名前を知らなかったのか？」

「一々店の名前なんて見ないぜ」

イチシがクレストと出逢ったという店。

「レアデスがこの場所に来てと言っていたという事は 」

クレストの存在は既にシユラウドの手の内にあるという事なのか。

「気に入らねえな」

イチシがつぶやいた。

それはリュクシーも同じ気持ちだった。

せっかく見つけたと思った手がかりが、既に古くて干からびた餌だ

つたとは。

「確かに気に食わないが

」

「行くしかないな」

クレストⅡシエトラとは一体どんな男なのか。

彼もシュラウドの手先なのか、それとも

リユクシーはイチシの腕にしがみつき身を寄せ、二人連れである事を強調した。

なるべく面倒は避けたい。

デイゴアスールの1階入り口の両開きの扉は大きく開け放たれ、ここからは陽気な音楽が漏れていた。
酒場に足を踏み入れる瞬間、独特の甘い香りが鼻をかすめる。

「何の匂いだ」

「ああ ランドクレスの地酒、ララックだろう。ララックの花から作るから、臭いがキツイ」

「そつえばあの花の香りだな」

ホテルのエントランスで嗅いだむせ返るような甘い香り
花はララックというらしい。 あの

鼻をヒクヒクさせながら、リュクシーは店内を見回した。
いや 見上げたと言った方が正しい。

デイゴアスールは店舗の中心が広い吹き抜けになっていて、5階の天井にはステンドグラスが埋め込まれているのが見えた。

4階まで客で埋まっているようだ。そこそこに流行っている店らしい。
い。

1階にはステージが設けられ、楽団が音楽を奏でている。

曲は皆、イバ教の民俗音楽らしく、ランドクレス人たちがステージの周りで思い思いのダンスを踊っていた。

「客の中にも派閥があつて、上の階は常連しか入れないらしい」

イチシの言葉に1階にいる客の顔を見渡すと、確かに観光客は2階より上には昇れないようだった。

「やあ、来てくれたんだな」

その時、背後からリュクシーの肩を叩いた男がいた。レアデスだ。横にいるイチシの姿が見えないはずはなかるうに、白々しく話しかけて来たようだ。

「中々いい店だろ？ま、1階はちょっとうるさいけどな」

勘に触ったのか、イチシはリュクシーを背中側へ押しやり、無言のままレアデスを睨みつける。

レアデスはかなりの長身で、見下ろされる形になるのがまた気に入らない。

「ああ、お前もいたのか」

レアデスはあくまでも爽やかだ。

仏頂面のイチシと違って、朗らかな笑みを浮かべている。

「あら、レアデス！後であたしのトコにも寄ってね」

救助船で見かけた時の兵隊服とは違って、極彩色の民族衣装をまとったレアデスは、どこからどう見ても魅力的な男だった。

酒場の従業員の女達が、レアデスとすれ違う度に声をかけていく。

「お前らの事だから、まっすぐここに来るとは思わなかったけどな」

イチシの敵意には反応すらせず、レアデスは言った。

リュクシーはこの男の顔を凝視する　しかし、この笑顔からは何を考えているのか読み取る事はできなかった。

レアデスは何のためにリュクシーたちをここへ呼んだのか。

開口一番に出る言葉は一体　？

「まあ、そんなに睨むなよ。とりあえず一杯飲もうぜ」

どんな指令があるのかと身構えていたリュクシーは、レアデスの言葉に萎えた。

「用があつたんじゃないのか」

「まあまあ。酒場に来て酒を飲まないなんてナシだろ？」

レアデスはバーカウンターへと行ってしまった。

「……レアデスは後回しにしよう。クレストを見たというのはどこだ？」

「2階席だ」

二人はレアデスから離れ、階段を昇る。2階はテーブル席が並んでおり、ゆっくり落ち着いて飲みたい者は1階のカウンターで買った酒を片手に、こちらへ来るようだ。

「いるか？」

クレストの姿を探すイチシに、リュクシーは問いかける。
しかしイチシは首を横に振っただけだった。

「クレスト＝シェトラなら、ここ数年目撃されていないぜ」

酒瓶にストローを挿したものを3つ持って、レアデスが背後に立っていた。

やはり その名が出たか。

レアデスはその名を知っているという事は シュラウドはクレストの存在を把握しているという事だ。

「ほらよ」

リクシーとイチシに酒瓶を押し付け、レアデスは空いてる席に座った。

「
.....」

二人はレアデスの次の言葉を待つ。
酒を飲む気にはなれなかった。

「ああ、オレは」

レアデスだけが酒に口をつけ、言葉を続ける。

「元々は違う目的でランドクレスにいたからな。他にランドクレスに潜入している捕縛士がいないから、お前らの任務にも協力する事になった」

「違う目的 それがクレストⅡシエトラか」

クレストは姿を消したのか　？
そして捕縛士たちがそれを追っている。何の為に？

「お前、クレスト」シエトラにシェイドを教え込まれたらしいな」
イチシに問いかけたレアデスは、笑みを浮かべてはいなかった。
何故だか敵意のようなものを感じる。

レアデスにとって、クレスト」シエトラは何か因縁がある相手なの
かもしれない。

お前の彼氏は、どこの飼犬なのかもしれないとは思わないか？

空の上で言われた言葉を思い出した。

その言葉の意味にようやく思い当たった。

レアデスの狙いはクレストⅡシエトラなのだ。

「　　そうだな、勝負しないか？」

「勝負？何の」

突然言い出したレアデスの真意が読めない。

何かメダリアからの指令を預かっていたのではないのか？

「おい　　暴れるな。目立つのはまずい」

応じかねないイチシの服の袖を、リユクシーは引つ張って止めた。
ドラセナ抹消作戦に関係ないならば、レアデスに関わる時間がもつ
たいない。

「殴り合いの勝負はまた今度にして、これで勝負しようぜ」

レアデスは酒瓶を持ち上げ、にっこりと微笑む。

「オレはクレストⅡシエトラの情報が欲しい。負けた方が知っている
事を話す。それでどうだ？」

「それだけの価値のある情報を持っているのか？」

リユクシーが猜疑の眼差しを向けると、レアデスはまた魅力的な笑
みを浮かべる。

女相手には、とことん外面の良い男である。

「情報提供ともう一つ　　オレが勝ったら、リユクシーは借りる
ぜ？」

「誰が負けるか」

「おい、イチシ あんな挑発に乗るな……」

レアデスがどれほどの情報を持っているのか怪しいものだ。
それに何か他の目的があるように思えてならない。

イチシを酔わせ、リユクシーから引き離すのが目的なのか？

「よし、じゃあ始めようぜ。おい、モイス！！アレの準備頼むよ。
キツい奴くれ」

レアデスは店員を呼びつけると、酒の飲み比べの用意を頼む。

「マジで？相手はそのお兄ちゃんかい？あまりイジメるなよ、レア
デス」

「ハハハ」

ランドクレスの観光本には、シアメアの酒場で飲み比べをしようと
誘われても、絶対に受けてはいけなさと注意書きが必ずついている。

酒豪が多いランドクレスの民と酒の勝負をしても勝ち目はなく、賭
け事なんてしょうものならば、身ぐるみ剥がされる危険もある。

また、急性アルコール中毒で命を落とす者も年に数人はいるといふ。

「おい、イチシ……！」

リククシーは声を張り上げたが、イチシは全く聞き入れようとしな
い。

何をそんなに意地にならねばならないのだ
うな事になれば、何にもならないというのに。 酩酊してしまうよ

「心配するな、負けやしねえ」

「お前、酒が飲みたいだけじゃないだろうな」
「バカ言え」

リククシーが渋っていると、店員が続々と2階に上がって来て、レ
アデスの座っているテーブルの上に次々と酒瓶を並べ始める。

「おい、この二人がロータスやるぞ！」

モイスが吹き抜けに顔を出し、叫んでいるのが聞こえる。

飲み比べはシアメアの娯楽なのだ。

参加者の二人を取り囲み、野次馬たちが囂し立てる中で勝負は繰り
上げられる。

「負けないぜ？」

レアデスは座れよと椅子を勧め、イチシは無言のままそこに腰を下
ろした。

（ああ、イチシのバカめ 何で意地になるんだ）

半分は自分のせいであると気付いてはいたが そうか、自分の
為か。

それに気付くと、リユクシーはため息をつくしかなかった。

こうなったら仕方ない。

レアデスを酔い潰して、知っている事は洗いざらいしゃべらせるし
があるまい。

「イチシ、負けたら承知しないぞ」

「誰が負けるかよ」

イチシはイチシで、相当自信があるようだった。

「おいおい、大丈夫かあ、兄ちゃん。まだガキじゃねーのか。酒の
味分かんのか？」

「バゝ力、酒なんて飲んじまえば皆一緒よ！！げへへ」

ちょうど野次馬たちも集合した所である。

審判役の店員が、小さいグラスに地酒のラックを注ぐと二人に手
渡し、見物客の方へ向き直る。

「んじゃ、始め！！」

合図と共に、二人は1杯目を飲み干した。

かなりの飲みっぷりだ。 長い勝負になりそうだった。

「オレの勝ちだな」

30分後、涼しい顔で言ったのはレアデスの方だった。

イチシは耳まで満遍なく真っ赤になり、まるで図書館にあった《検索くん》のタコのように真っ赤になって机に突っ伏しているというのに、レアデスは頬にほんのり赤みが差しているだけである。

「まあ、レアデスが負けるわけねーよな」

「相手が悪かったな、兄ちゃん」

野次馬たちは勝負を見届けると、イチシに対して同情の言葉を口にした。

「レアデスだと賭けにもなんねえ」

こんな事なら自分が勝負すれば良かったかもしれないと思ったが、今更二人して酔い潰れるわけにはいかない。

だが確かにイチシは頑張ったと思う。レアデスがアルコールに強すぎたというだけの話だ。

「さて邪魔者がいなくなった事だし。あっちで少し話をしないか。あいつはしばらく起きねーから、そこで寝かせとけばいい」

勝負には負けたが、レアデスが知っている事を聞きださなければならぬ。

リククシーはイチシから少し離れた場所のテーブルで、レアデスと向かい合って座った。

非常時に備え、視界の隅にはイチシの姿が入るようにした。

「随分成長したな、リククシー。メダリアで最後に会った時は、男勝りのガキだったが　女になった」

子供の頃は周りは男ばかりだった。

一番仲が良かったのはクラウドだが、クラウドの仲間たちともよく張り合った。

レアデスは3期上だったせい、彼らの兄貴分だった。

「お前だって変わったさ」

レアデスを前にして警戒心を解けない。こんな関係になってしまうとは、あの頃は思いもしなかった。

「お前、オレが認証式を受ける頃、独房に隔離されてたしな」

お前らしいぜ、とレアデスは小さくつぶやく。

それはあの頃だ。

ゼザと二人、ビレイラ・ドームへ抜け出して魔獣に襲われた直後。

ゼザは集中治療室、リユクシーは独房に入れられている内に、レアデスの代の認証式は終わり、早速外界任務へと派遣されたのかメダリアから姿を消していたのだった。

そしてゴデチャの上空で二人は再会した。

レアデスはすっかり少年から大人の男になっていた。

「お前の認証式はどうだったんだ？」

リユクシーは昔話に興味はなかった。

だが、とりあえずはきっかけを作る事だ。レアデスの会話に乗って、少しでも情報を引き出さなければ。

「私は認証式は受けていない。 その前にメダリアを裏切り、脱出した」

そう、リユクシーは《捕縛士》ではないのだ。

外界任務に就いていたレアデスは一連の脱出劇の事は知らないのだろうか。

「ああ、らしいな。聞いたよ」

しかし、予想に反してレアデスの返答は軽いものだった。

「知ってるなら聞くな」

思わず指摘すると、レアデスは円らな瞳をさらに大きくしてみせる。

「でもお前、《シェイド》を手にしてメダリアを脱出したんだろ？」
「それは……」

リユクシーの脳裏に、一人の男の姿がかすめた。
彼がいなければ、確かに自分はメダリアを脱出する事はできなかっただろう。

「認証式 卒業証書をもらっんじゃないんだぜ？」

自分に最も共鳴するシェイド玉を選び取る儀式。
これをクリアしなければ、《捕縛士》にはなれない。

（カライ ……）

「あいつは 道具じゃない。シェイドは道具じゃない」

確かにリユクシーは あの時、一人のシェイド体と激しく共鳴していた。

だが、二人の間に優劣があつたわけではない。
リユクシーはカライと語り、笑い、怒り、全ての感情を互いにぶつけあつた。

そして 知った。
彼らが己を保つ事の難しさを。

リュクシーはカライと繋いだ手を離してしまった そしてカラ
イは魔人となり、果てた。

「色々あつたみたいだな」

色々思い出していたリュクシーに、レアデスは静かに言った。

「まあ、オレから見たらうらやましい話だな。オレはまだ認証式が
終わってないからな」

「……なんだって？ どういう意味だ」

リュクシーの動揺ぶりを見て、レアデスは笑う。

「どうって？ そのままの意味だ」

認証式に失敗し捕縛士になれなかったものは、メダリアの研究員に
なったり、軍人になったり、メダリアに留まる事はできないはずだ
った。

少なくとも、リュクシーはそう思っていた。

「オレは自分の手にするべきシェイドとまだ巡り会えていないのさ」

「私が《S》扱いになっているという話もそうだが　メダリアの《ルール》は、シュラウドの言葉一つで全く意味がなくなるようだな」

「そりゃそうだ。メダリアはシュラウド様の箱庭なんだからな」

「　　お前は…シュラウドに心酔しているわけではないようだな」

様付けで呼んではいるが、そこに忠誠心はあまり感じられない。

「オレはお前より3つは年上なんだぜ」

「知ってるが？」

何を今更とリュクシーは眉間に皺を寄せる。

「メダリアに来た時、オレは既にそこそこのガキだったって事だ」

セントクオリスがメダリア・ドームを作り、捕縛士の卵たちをその押し込めたのは12年程前　　レアデスは6歳くらいにはなっていたはずだ。

リュクシーたちは皆、新年に一齐に年を重ねる為、正式な年齢は分からないがそのくらいだろう。

「当然、外での記憶もそれなりにある」

外での記憶　　レアデスの出生。

リュクシー自身もそうだった。

外からさらわれてきた子供たちは皆、何か特別な境遇の子供たちなのだ。

「まあ、オレの昔話はいい。 そろそろいいだろう」

壁にかけられた時計に目をやると、レアデスは立ち上がり、熟睡中のイチシの方を向いた。

「ラックの酒にはちょっと副作用があつてな 飲み過ぎ厳禁だ。オレたちのようにシェイドに近い人間には特に強く出る」
「なんだって!？」

「ちょっと待った」

駆け寄ろうとしたリュクシーの腕をつかむと、背後からガツチリと押さえ込まれてしまった。

「離せ!」

リュクシーは思い切りレアデスの右の足を踏みつけた。

が、腹の立つ事にシェイドでガードしたのか、全く堪えていないようだ。

「いいから見ろつて。 クレストⅡシェトラの情報を握つてるのはオレじゃなくてアイツの方だ」

「最初からそのつもりだったな」

「人間の記憶なんて、意識を取っ払わないと見えて来ないもんさ」

イチシはすっかり眠りの世界へ取り込まれてしまっているようだ
ゆつくりと寝息を立てながら背中を上下させている。

「いいか、リユクシー。本音を知りたけりゃ、寝込みを襲え。恋愛
において絶対の法則だぜ？」

「卑怯なのは好みじゃない」

「正攻法だけじゃ先に進めない時だってあるさ。クレストの情報が
欲しいのはお前だって同じだろう」

「だからって私は人の記憶を盗み見たりしない！！」

「だから そんな事言う余裕があるのか？問題はそこさ」

「っ
」

イチシの記憶を薬の力で呼び起こす それではメダリアのやつ
ている事と変わりが無いではないか。

だがレアデスの言う通り、余裕がないのは事実だった。

それでも リユクシーは怖い。

イチシの記憶を覗いて、そこに絶望があったとしたら？
イチシが必死に隠している記憶を、リユクシーやジンたちを守りた
いが為に押し殺している感情を、リユクシーが勝手に覗き見るなん
て。

それはイチシとの間の信頼関係を跡形もなく碎いてしまう行為だ。
イチシの意思を軽んじる行為だ。

「私は見ない イチシの口から聞き出すまでは、誰にも覗かせない――！」

シェイドで一氣にレアデスの腕を跳ね除けると、リュクシーはイチシの元へ駆け寄った。

イチシは相変わらず赤い顔で寝ていた。
副作用で苦しんでいる様子はなかった。

イチシを連れてホテルに戻ろうと、軽く触れたその時

「――！！！」

イチシのシェイドがリュクシーの肌を伝い、一瞬の内に脳裏に映像を刻みつけた。
その衝撃に、リュクシーは思わず手を引いた。

（今　　）

冷や汗が額を伝う
垣間見たイチシの記憶。
その中に

ああ、そうだ。

船上でイチシのシェイドを浴びたあの時に
心のだっかに引っ
かかった違和感はこれだ。

（何故　　イチシの記憶の中に）

その時、気配を感じた。
リユクシーは顔を上げる
視線の先のテーブルで、酒瓶を傾け
る男の姿があつた。

《　　私が見えるのか　　》

呼吸をする事さえ忘れ、男の顔に見入る
を知っている。

リュクシーはこの男

だが、この男は誰だ。誰だ

！？

《少年。お前の名は何だ？》

顔に刻まれた皺は姿を消し、目の前にある残像は艶めく肌と、皮肉
めいた笑いを宿していた。

これが クレストⅡシェトラ。イチシにシェイドの扱いを教え
た男。

「これがクレストⅡシェトラか……」

気が付くとレアデスが横に立ち、同じ残像を前にして感嘆の声を漏らした。

「レアデス　お前にはどう見える」

「シュラウド様と同じ顔だ」

レアデスはあっさりと認めた。

確かに認めざるを得ない　だが違和感もあるのは事実だ。

「随分若いな。20代半ばって所か　つまり、今から15年くらい前のシュラウド様はこんな感じだろうな」

「それが何故　　どういう事だ！」

イチシがクレストを見たのは2、3年前だ　シュラウドのはずがない。

15年前にシェイド体となったクレストが、シュラウドであるならば、メダリアにいるあの男は誰だ。
年を重ね、衰えた肉体を持っているあの人物は誰だ？

「ようやく近づいたぜ　　っと……」

クレストの残像は、一瞬再生されただけで、再び消え入ろうとしていた。

「リユクシー、ずっとそいつに触れている。お前を介さないと、オ

レには見えない」

一瞬、レアデスの指示に従いそうになったが リュクシーは思い留まった。

「言っただけだ。イチシの記憶を盗み見るつもりはない。聞けば済む事だ」

「何をそんなにこだわってた？話に聞いて、クレストの容姿が分かったか？お前が言ってるのはただの奇麗事だ」

レアデスはリュクシーの手を取ると、無理やりイチシの背中に重ねようとする

「くっ 離せ！！」

「こいつを助きたいんだろ？」

レアデスの言葉は悪魔の囁きだ 耳を貸してはならない。

「こいつの全てを知らないで、こいつを助けられるのか？こいつの命をお前は背負うつもりなんだろ？全てを知らずに、こいつの何を救えるって言うんだ？」

レアデスの言い分には最もな部分もある それは分かる。
リュクシーならば、イチシの記憶から新たな何かを探し出せるかもしれない。

「こいつを好きなら見ればいい でなけりや死ぬぞ。お前にこいつは救えない」

レアデスの手を払いのけようとしても、岩のように動かない
後少してイチシの背に触れてしまう。

（イチシを好きなら

？）

リュクシーの心を見透かしたようなその言葉に、リュクシーは激しい怒りを感じた。

バシッ

！！！！

「……………」

リュクシーに頬を打たれ、レアデスは言葉を失った。

「イチシは人間なんだ　　お前達の道具じゃない!!」

人の心を暴く事が愛情の一部だというレアデスを許すわけにはいかなかった。

「レアデス　　お前は人を信じた事があるか？人として、対等に向き合った事があるか？」

なくても無理はない　　レアデスもリクシーと同じ、歪んだ箱庭の中で生きてきたのだから。

「相手の全てを知る事が、愛情だと？それは支配しただけだ。シエイドを武器とする捕縛士のように　　シエイドより優位に立ちたいだけじゃないか」

リクシーはレアデスの目を真っ直ぐ見据えた。

「お前に誰のシエイドも支配できるものか」

レアデスはまだ知らない　　自分が手にしようとしているモノの正体を。

知らずにいられれば、その方が幸せなのだろうが　　そうも行かないだろう。

彼も、シュラウドが選んだ実験体なのだから。

「これ以上イチシの中を覗く事は許さない。

去れ」

リクシーが激しく睨み付けると、しばらく真顔で見つめ返していたレアデスだったが　ふっと口元が緩んだ。

「前言撤回だ。

お前は変わってないよ。今も昔も、不器用で

優しくて……シュラウド様のお気に入りだ」

「……お気に入りなものか。虫唾が走る」

本当はリクシーにも分かって来ていた。

シュラウドにとっては、過程は問題ではない。

彼にとっては、自分から逃げ出そうと、刃向かおうと、問題ではないのだ。

彼の育てた捕縛士たちが、最期にどのような結末を迎えるかそれが全てなのだ。

「悪いがオレにも譲れない理由があるんだ」

「それがどうした。私も譲らない」

意地の張り合いならば、負けない。

どんなに笑顔で懐柔しようと、リクシーの心は動かない。

「分かった。お前には言うておかないとならないな」

「何を言っても私は意見を変える気はない」

いい加減しつこい男だと、リュクシーは一蹴した。

「クレスト」シェトラはオレの父親なんだ」

予想もしない言葉だった。その一瞬の隙を突き、レアデスはリュクシーの右の手のひらをイチシの背中に押し付けた。

EPISODE i - 13

ピシッ

イチシの背に触れるか触れないかの瞬間、空間に亀裂が入り、見えない力で二人は弾き返された。

「やめな。あんたたちもドラセナの呪いを受けたいのかい」

いつの間にそこに立っていたのか、気が付けばマディラ「キャナリ」がそこにいた。

「マディラ様 どんな呪いを背負う事になると、オレはクレスト「シエトラ」をこの手に収めたいんですよ」

レアデスは特級捕縛士を相手にしても臆する事なく、かといって虚勢を張るわけでもなく、落ち着いた声で問う。

「アンタ クレストの息子だつて？あいつに《家族》はいなかったはずだよ。受精バンクでクレストの精子が使用され、子供が産まれた。何十人、何百人と。アンタはその内の一人に過ぎない」
「何故マディラ様が知っているんです？あなたはクレストⅡシエトラとどういう関係があるんですか？」

そう、全てを知りたいのならば、イチシではなくマディラⅡキャナリーに聞くべきなのだ。
生きていたはずのクレストⅡシエトラを知っているのだから。

「あたしとクレストはかつて同じ地で生きた。それだけの話さ」
「それだけ？それだけのはずがない。あなたは何かを隠している」

レアデスはマディラの次の言葉を待つ レアデスが必死なのは伝わった。
何故己の出生を追うのかは分からないが、彼にとっては全ての言動の中心にある目的なのだ。

「 ハッ！！」

マディラは突然笑い出した。

「何かおかしいんです？」
「確かに しつこい所は、あいつ譲りかもしれないね」

（目が笑ってない ）

マデイラの表情はこわばったままだった。

再会してからのマデイラは、感情を無理やり殺してしまったかのように、冷たく、誰もかもを突き放すような空気をまとっている。
ドラセナⅡロナス抹殺に懸けるマデイラの強い想いの表れだろう。

リユクシーが初めて見たマデイラはまだ人間だった。
強い意志を秘めた捕縛士なんだと思った。

シェイド体は皆、いつかはこうして《人》から外れてしまう末路しかないのだろうか？

カライのように、人に執着し、狂気に捕らわれ、魔人となるか。
マデイラのように、感情も思い出も捨て、生ある時に成し遂げられなかった事を果たすか。

それともシェイド体の数だけの悲しい結末があるのだろうか

「クレストの息子。あんたがその肩書きで何かをしようと言っのなら　この店の5階に行ってみな」

「5階へは紹介がないと入れないですよ。マディラ様がオレに招待状をくれるんですか？」

マディラはレアデスに握り拳を差し出した。
指を開くと、そこには1枚の紙切れを折り畳んだものがある。

「招待状じゃあないが　あんたにはこれをやろう。《その時》
が来るまで、肌身離さず大切に持っている」

レアデスはゆっくりと　マディラの顔色を伺いながら右手を伸ばし、紙切れを受け取った。

「上に行くには、クレストの息子だと名乗ればいい。そしたら分かるだろう。あいつがどんな人間だったのか」
「……」

レアデスは一瞬しか考えなかった。
店の中心にある大階段へ駆けて行き　従業員に向かって何かを話しているようだ。

レアデスの元に何人かの従業員が集まり、少し揉めていたようだったが、程なくしてレアデスは階段を昇り始めたのだった。

「クレストⅡシェトラがDr・シユラウドなのか」

リククシーも、当然の疑問をマディラにぶつけてみた。

まるで同じ造形の顔立ち　異なるのは皮膚に刻まれた皺だけ。
それは齡の差だ。

血縁者なのか　？

一人は肉体を失いシェイドとなり、一人は今も生き永らえているのか？

それとも　生きながらにして、自身のシェイド体を自在に操れる？

シェイド体の年齢さえも意思一つで変化させる事ができるのか？

「あたしの知るクレストは死んじまっただけさ」

「じゃあ、Dr・シユラウドは何者だ！！あの男は　生きているのか……！？」

感情を持たず、冷たい 冷え切った表情のDr・シュラウド。

確かに 終わりの瞬間に捕らわれて現世を彷徨うシェイド体が、感情から逃れられるとは思えない。

生きているから？

だからこそ、感情を捨ててもそこに在る事ができるのか。

（感情を捨てて ？）

感情を捨てるという事は、生きる意志を失うという事だ。
生きているという実感を持たないという事だ。

そんな者が、メダリアのトップに収まり、捕縛士を育成しようなど
と思うだろうか？

目的を持ち、その実現に向けて行動する事ができるだろうか？

リクシーにはどちらも不可能だと思えた。

だからこそ分からなくなる Dr・シュラウドとは何者なのだ。

「あたしにも分からないね。 それにもう、どうでもいい事だ」

マディラの成すべきは、もはやドラセナと共に消滅する事だけだった。

マディラとドラセナが《死んだ》という事実の前に、裏に誰かの謀略があつたかどうかなど、今となつては関係がない。

「これだけは断言する。今回の作戦にクレストは関係ない。クレストの事は忘れな」

「さつき同じ時を生きていたと言つたのに、『関係ない』のか？そんな都合の良い話があるものか」

姿を現してまで、クレストの記憶を呼び起こす事を阻止したマディラだ。

そこには知られて困る何かがあるに違いない。

「まずは生き延びなければ、その先にも辿り着けないという事さ」
「……それがイチシとした取引か？」

マディラが情報を制限する理由　イチシが既に知っているはずの情報を、リユクシーから遠ざけようとする理由。
想像がついてしまうのだ　望まない答えであっても。

マディラは応えなかった。
それが真実を物語っていた。

「お前達は皆、イチシが死ぬ事を前提に動いているが　私は違う。絶対に死なせない」

イチシでさえも 自分の命と引き換えに、リユクシーたちを守
ろうとしている。
そんな事にはさせない。絶対に リユクシーこそが、命を懸け
てイチシを守る。

無理なんだよ

だがマディラの瞳は、覆しようのない結末が既に見えているかのよ
うだった。

リユクシーの放つ生を渴望する激しいシェイドも、マディラの深い

悲しみに満ちた重苦しいシェイドとぶつかった瞬間に取り込まれてしまいうそになる。

不安に飲み込まれそうになってしまふ

（ ダメだ！！絶対に諦めては……！！ ）

リュクシーは両方の拳を握り締め、歯を強く食いしばった。自分の中にある悪い気を発するものを、追い出したかった。

「う ……ん……」

その時、死んだように眠っていたイチシが、声を漏らしながら動いた。

横でリュクシーが大声を張り上げたせいか、そろそろ覚醒するようだ。

「イチシ、起きろ。帰るぞ」

どちらにしろ、今日のイチシはもう使い物になるまい。

明日また出直そう　　そう思い、イチシを起こそうと手を伸ばし、
恐る恐る背中を突付く。

ラック酒の誘引効果はもう影を潜めたようだった。

甘い香りも酒の臭氣に姿を変え、そこにはただの酔っ払いがいるだけだ。

「おい、イチシ。起きろ　　今、水をもらってくるから」

上半身を引き起こし、ゆさゆさと揺さぶると、イチシは眉間に皺を寄せて唸るだけだった。
リュクシーが手を離すと、そのままゴツンと鈍い音を立てて固い木の机に額を打ち付ける。

「リュクシー」

「何だ。まだ何かあるのか」

足は止めたが、マディラに振り向く事はしなかった。
リュクシーの足首をつかみ、狂気に溺れかけるイチシから引き離そうとする者たちと真実が語り合えるとは思わない。

「あと数日で役者がそろふ。その後、イチシには時計塔へ向かつてもらう。アンタは　　アンタがその時に感じたままに行動しろ。それでいいはずだ」

マディラもかつて、煙に巻かれながら必死に階段を駆け上った
その先にあるのは絶望しかないと知りながら。

在ったのはただ一つ。

ドラセナの元へ、自分を見つめるあの瞳を守るため

自分の中にあんなに熱い感情があつたのなら、もっと早くに気付きたかった。
もっと　　ドラセナと向き合えば良かった。

だが、それでもマディラは幸せだったのだろう。
最後の最後に気付く事ができた。

ドラセナはまだ知らない　　今も暗闇の中でたった一人、泣きながら脅えているのだ。

「ドラセナは　　あたしの娘だ。だから、あたし自身の手で終わらせる」

リュクシーは振り向いた　　今マディラが口にした言葉は、真実であると思ったから。

「アンタなら　　分かるだろう。あたしがやらなくてはならない理由が」

その瞳に秘めた決意　　それはかつてリュクシーが抱いたものと同じ光だった。

「それでも……イチシは渡さない」

二人の視線は平行線だった　　どちら也讓れない理由があった。成し遂げる意志も強さも。

だが願いが叶うのはどちらか一方なのだろう
敗れた者は、大切なものを失うのだろう。

「後悔したくないからな」

マデイラのように

母と娘の間に何があったのかは分からない
だがマデイラがひどく後悔しているのは感じ取れた。

悲しい結末を見たシェイド体
結末を過ぎても、未だ終わる事
のできない魂。

自分たちはそんな場所へは行かない。
なんとしても生き続けるのだ
イチシと二人で。

「やれるだけやってみな」

視線を外したのはマデイラが先だった。

この娘はきつと、強く生きる
生き延びて、マデイラには辿り
着けなかった場所へと達するだろう。

捨て台詞のように吐き捨てたが、マデイラの顔は笑っていた。

ゴデチャの港で出逢った時のような
人間らしい笑みだった。

「言われなくとも」

マディラが去る背中に向かって、リュクシーはつぶやいた。

ライトの光の届かない酒場の片隅まで行くと、マディラの姿は背景に溶け込んで見えなくなってしまった。

《人間らしく》在る事に、もはや重きを置いていないのだろう。

マディラは一瞬でどこにでも行けるし、姿を現すも消すも自由自在というわけだ。

（人間らしく 意識しなければ、そんな当たり前の事でさえ、
当たり前前にできなくなる）

マディラを支えているものは カライとは違う。

彼女が死の瞬間に抱きかかえていたものは、絶望ではなく、我が子への愛情だったはずだ。

彼女ならば、再び訪れる死の瞬間の中でも 《人間らしさ》を
失わないでいられる気がした。

だが、それを再現するには 新たな生贄が必要なのだ。

二度とドラセナ・ロナスを蘇らせないように 彼、いやマディラは娘だと言った 彼女に関わった人間全てを葬り去る。

（ 本当にそれで終わるのか？）

新たに奪われた命から、新たなドラセナⅡロナスが誕生しない保障などない。

人間が存在し続ける限り、それは断ち切る事のできない宿命なのではないか。

断ち切ろうとする事に意味があるのだろうか

リククシーが葬ったシェイドたち 彼らも再び、現世に蘇る事があるのだろうか？

新たな宿主を手に入れて。

「目が覚めたか？」

イチシがようやくはつきりと目を覚ますと、リユクシーがテーブルの向こう側から呆れた顔をしてこちらを見ていた。
どうやら酒の飲み比べは負けたらしい　イチシに勝つなんて、ジン以外には在り得ないと思っていたのに。

「あいつはどうした」

酒で声が潰れたか、イチシの声は低く濁っていて、聞き取り辛い。
リユクシーは吹き抜けの方に目をやり、階段を指差した。

「5階に用があるらしい」

頭痛がするらしく、イチシは頭を抱えたままだ。
リユクシーは水差しの水をコップに注いでイチシの前に置いた。

「これくらいでこんなに酔うはずがないんだが　」

負けた言い訳をするのはみつともないと思いながらも、イチシは思わずつぶやいた。

「……レアデスが薬を入れていたのかもな。誘引効果が増す類を」

「なに？」

「最初から そのつもりだったんだ、レアデスは」

「あの野郎」

吐き出すように言うと、イチシは水を一気に飲み干した。

「だから挑発に乗るなど言ったのに。こんな事なら私が勝負すれば良かったな」

「何言ってる！ あんたは酒はダメだ」

リュクシーの言葉に驚いたようにイチシが言う。
その剣幕に逆にリュクシーが驚いた。

「明日 ちゃんと検査を受けろよ、いいな」

イチシが怒った理由が分かった。

自分の中にある可能性の事を心配しているのだ、イチシは。

ジンの娘、クレストの息子、マディラの娘 リュクシーにもそ

ういった繋がりが出来るかもしれないという事は分かっていたが、実感が沸かなかった。

リユクシーは複雑な気持ちだった。

今　　イチシの生を背負う事で精一杯な現状に、新たな命が負担となつて押し掛かるのではないか。

そう、負担となるのではないか　　イチシの為に使おうとしている力を、他に割かなくてはなくなるのではないか。

極端な話、自分を取り巻く世界が変わってしまうような気さえしていた。

いや、違う。

変わってしまうのは自分自身だ。自分の自分に対する見方が変わってしまうのだ。

未知の自分を抱えて、この世界に挑まねばならないのだ。
想像も付かない　　それがリユクシーの本音だった。

「酔いは覚めたか？今日はもうホテルに戻ろう。これ以上変なシェイドに取り憑かれたら厄介だからな」

答えをはぐらかしたりリユクシーに、イチシは何も言わなかった。
イチシはイチシで複雑な想いのだろう。

そう、リユクシーだけの問題ではない。

もし子供が出来ていたら　イチシはますます頑なに、自分を犠牲にして皆を助けようとするかもしれない。

店を出ようと席を立つと、上階から怒号が聞こえる。

「レアデスが暴れているらしいな　」

「きゃああっ」

悲鳴が聞こえたかと思うと、吹き抜けの5階部分から大きなテーブルが落下して行くのが見えた。

ドガアアン

ツッ！！

派手な音を立てて、木のテーブルは大破した。

1階の舞台で演奏していた者たちはちょうど休憩時間だったらしく、飛び散った破片で負傷した者はいなかったようだ　置いたままにされていた楽器が何点か被害にあったようだ。

「加勢しに行こうなんて思うなよ」

「そこまでお人好しじゃない」

それに、レアデス一人でも問題はないだろう。

生身の人間相手なら、よほどの事がない限り捕縛士が窮地に陥る事はない。

「レアデスは クレスト〓シエトラの息子らしい」

そういえば、イチシは寝ていたから知らないのだった。
マディラ〓キャナリーが現れた事も。

「 あいつが? 」

「そして ドラセナ〓ロナスは、マディラ〓キャナリーの娘らしい」

「……死んだオレの親父も出て来そうな勢いだな」

イチシが皮肉めいた事を言いたくなる気分も分かる。
全てが偶然のはずがない 全てが誰かに仕組まれている。

「少し頭の中を整理しよう。 ホテルに戻るぞ」

マディラは一人、イーバエルジュの地を歩いていた。

カッソ、カッソ

自分のヒールの音だけが、響く。

すれ違う人間たちは色褪せ、マディラは一人、別世界の中にいた。

かつて訪れた縁の土地 まだ思い出せる。

マディラの中にはまだ人であった頃の記憶が残っている。

いや、逆かもしれない。マディラは思い出ただけでこの姿を留めている危うい存在なのだ。

（あの時は クレストのせいで、散々な目に合わされたっけね……）

クレストの息子が、自分が誰の子であるかを知っている事には驚いた。

マディラの時は止まってしまっても、周りの時間は流れ続けているという事か。

クレストが遣り残した事は、息子が継ぐだろう。マディラが遣り残した事は、マディラがこの手で貫くだろう。

マディラにはどうしても信じられなかった Dr・シュラウド
という男は、クレストとは別人だ。

（ 別人のはずだ）

だが、《入れ物》はクレストのものだと認めざるを得なかった。
ホクロや痣、傷跡に至るまで、あれはクレストの肉体だった。

人が自身のシェイドの特性を変える事は99%無理だとクレストは言っていた。

先天的に持っている傾向、育った環境によりその傾向は顕著になる。

自我が確立してしまえば、その時点でのシェイドがその者の特色として定着する。

クレストのシェイドを知っていたマディラには、あの二人が同一人物とは思えない。

（ 人格が2つに分裂した？だがあいつは多重人格ではなかったはずだ）

クレストとシュラウドが完全一致しない以上、シェイドが2つあるという結論しかない。

（あいつは 自分が死んだ事を分かっていた。死んだと思っていた）

それは確かだ。

マディラはシェイド体となったクレストを、この目で確かに見ているのだから。

（ あたし自身の瞳が、既に使い物にならないガラス玉って事か…）

マディラにだって、境界線は分からない。

自分はいつ死んだのか？

あの瞬間は、生きていたのか？死んでいたのか？

あの時の自分は生きていたのか？既にシェイド体となっていたのか？

「何考えてるの？マディ」

背後から、鈴を転がすような声が聞こえ、マディラは立ち止まった。

「また当ててみせようか？」

ゆっくりと振り向くと そこにはドラセナが立っていた。

「あたしが考えるのは あんたの事だけだよ、ドラセナ」

マディラは自分自身に確かめるように、ゆっくりと言葉を発した。
少年とも少女とも言えない無垢な子供の姿をした魔人は、大きな瞳をますます大きくさせて、マディラの方を見ている。

「そうだね マディの頭の中は僕の事で一杯だね」

虫も殺しそうにない無邪気で透明な笑顔 この顔が歪む瞬間を、
マディラは知っている。

「僕が作った駒たちをランドクレスに集めているみたいだけど
本当に殺す気なの？僕を？」

ドラセナを前にして、最早偽りを述べる理由もない。

二人は今、魂だけの丸裸の存在なのだから。
全てはシェイドを感じれば、分かってしまう事だろう。

「あたしと一緒に逝こう」
「本当に殺せるの？マディに？」 僕の駒たちは、まだ生きてい
るんだよ」

ドラセナも知っている。

向かい合う勇気がなく、目を閉じてしまった どうしようもな
く弱かったマディラの心を。
ドラセナ一人の生を背負う覚悟のなかったマディラに、多くの命を
犠牲にする事などできはしないと。

「それしか方法がないのなら あたしは選ぶよ。真っ先にあん
たを」

マディラの本心を見定めるかのように、母の残骸を見据えていたドラセナだったが、またいつものように無邪気に微笑んだだけだった。

「そう。これでマディも僕と同じだね」

「同じ？」

「そう、同じ。人間たちは僕を見て恐怖を感じる。マディもそうなる」

ドラセナが各地で惨劇を繰り返す理由 それは人間にドラセナを焼き付けるためだ。

共鳴する人間の目にしか触れないシェイド体が、人の意識の中を渡り、彼らのシェイドを呼び起こす。

人間たちのシェイドが共鳴し、より強く魔人を具現化する

存在し続ける為に、ドラセナは人間たちに刻み続ける 自身が浴びた恐怖や苦痛を。

「ドラセナ もういい。これ以上、苦痛を味わい続ける事はないんだ」

「苦痛？おかしな事言うね。苦痛を感じるのは肉だよ。肉があるから、痛いんだ。僕らはもう、人間じゃない」

何度繰り返した会話だろう　それでも、今回は違った。
これが二人の交わす最後の会話になる。

次に出逢う時は　終わりの時だ。
二人が直視できなかった生と死の境目を、今度こそ見届ける。

「試してみるといいよ　僕はもう、何も恐れない。何にも殺されない。マディが何をしようと無駄な事だよ」

ドラセナの笑みは崩れなかった　生きている時には、笑う子供ではなかったのに。
籠に捕らわれ、誰にも愛されず、傷つけられる事に脅えていた。

「　もう少しだけ……あの場所で待っている、ドラセナ。あたしは……」

目を閉じて、ドラセナと初めて出逢った時の事を思い出す

求められている事に恐怖を覚え、顔をそむけた。
ドラセナの瞳を見た瞬間、この子供と自分は避けられる絆があると知った。

必ずあんたを迎えに行くから

もう言葉はいらない　　同じ血を持つ我が子、マディラの娘……
全てを焼き尽くす業火の中で、今度こそ必ずドラセナを見つけ出してみせる。

「マディは来ないよ。　　いくら待っても来ない」

ドラセナの顔が凍ったように無表情になる　　ああ、この顔こそ
が本来のドラセナの顔だ。

ドラセナの顔は歪み、腹の底から絶叫した。それほどまでに、マデイラの言葉はおかしくて仕方なかったのだろう。

あははははははははは！！！！！！！！！！！

あはははははははははは！！！！！！！！！！

あはははははははははは！！！！！！！！！！！！！！！

あはははははははははは！！！！！！！！！！！！！！

あはははははははははは！！！！！！！！！！

あはははははははははは！！！！！！！！！！！！！！！！！

[illegible]

あはははははははははは！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「……………」

永遠に絶叫し続けるドラセナを前にして、マディラは自分の犯した罪から目を逸らさなかった。

「必ず行くよ　　最初で最後の約束だ」

笑い続けるドラセナを残したまま、マディラは踵を返し歩き出した。

一刻も早く　　ドラセナを救い出したかった。
この腕の中に、もう一度つかまえたかった。

（　　あと少しだ、ドラセナ。それまでに、あんととの記憶を何
度でも思い出す……幾千回も後悔する）

肉体を失えば痛みを感じないというのは嘘だ。
マディラの胸は裂けて朽ち落ちてしまいそうなほど、激しく痛んだ。

それが感傷を誘う

まるで生きていたあの頃のようにだったから。

「おう、やっと戻ったか！！お前らがいない間に大変な事に」

ホテルの部屋に戻ると、ジンが取り乱した様子で駆け寄ってきたが、イチシの様子がいつもと違うのに気付いたのか、顔を顰める。

「イチシ、酒臭えぞ」

「色々あつてな　そっちは何があつたんだ」

酒なんて飲んでる場合かと言わんばかりにイチシを睨み付けたが、今はそれどころではないらしく、アルコールの入っていないリキュシェーの方に向き直る。

「お前らが出てった後、ホテルのヤツが来てこんなもん置いてつてよ　ランドクレス王宮への招待状だ！」

ジンが突き出して来たのは、ランドクレス王宮の紋章が刻まれた高級紙でできた招待状だった。

「王宮へ？　一体、何でそんな事に？」

「オレが知るわけねえ！！とにかく見てくれ！！」

2つ折の招待状には、こう書かれていた。

《親愛なる方へ。我が城で夕食を共にいたしませんか。明晩、遣いの者をお迎えに上がらせます。ーランドクレール97世ー》

王の名前にはランドクレス王家の紋章が青インクで押印されていた。

「これは 本物に見えるが……」

「ホテルのヤツが、王宮騎士が届けに来たって言ってたぞ!!」

王宮騎士とは、ランドクレス王族や貴族出身の若者から成る、浸水林と王宮を守る騎士団の事だ。

とはいえ、それは特権階級の名ばかりの名誉職に過ぎず、実際にイーバエルジュを守っているのは軍隊なのだが。

「ランドクレス国民が王宮騎士を見間違えるとも思えない や
はり本物という事が。しかし、何故……」

メダリアが用意した肩書きが《ヴィーツリー国の資産家》であったとしても、王宮に招かれるのは異例な事だ。

王宮は限られた者のみが踏み入れる事を許される場所、外国人が王族に謁見する時は、イーバエルジュにある離宮を使用するのが常である。

「で、どうする、行くのか?」

できる事なら行きたくないというのがジンの本音のようだ。顔にそう書いてある。

「招かれたのはお前たちだけ　　しかも王宮はまずい」

ランドクレス王宮は、元々低層の建物が多いこの国の中で時計塔に次ぐ高層な建築物である。

ドラセナⅡロナスの再現劇に必要な要素のある場所に、イチシー人を向かわせるわけには行かなかった。

リュクシーが同伴できない以上、この招待状に従うのは危険過ぎた。

「でもよ　　王さんの誘いを断るなんて出来るのか？」

「また王宮騎士が迎えに来るんだろうから　　無理かもしれないな。そうになったら、私もこっそり付いて行くしかないだろう」

メダリアでは、尾行術も叩き込まれた。

シェイドで暗示をかけ、自分のいる空間を周りの人間に違うものとして錯覚させるのだ。

集中力と、周りの人間の人数に応じたシェイドを要する高度な術だった。

（ゼザは得意だったな　　私は持久力に欠けた）

水上都市での尾行は人通りが多い為、完全に姿を消すのは無理だろうが、王宮への道のりは限られた者しか許されない分、使うシェイドの量も少なくて済みそうだ。

「その事だけど」

突然、聞き慣れない声が会話を止める。

そこには青髪の捕縛士が一人、佇んでいた。
レアデスのパートナー、ピケだ。

「マディラ様に確認した所、行くのはジンとヘリオンの2名。イチシは行くなどの事よ。尾行は私がやる事になったわ」

ピケがジンとヘリオンの監視役なのか　今まで気配を感じさせずに同じ部屋にいたとなると、尾行の技術は優れているようである。

「な、何でオレらだけなんだ！？イチシが行かなくていいなら、オレたちだって行く必要ねえだろが！！」

「マディラ様のご命令よ。あなたたちには選択権はない」

ピケはレアデスとは違って、堅物な印象を与える女だった。
自分勝手に動くあの男のパートナーとは、さぞや大変な事だろう。

「くそう、やっぱり行くしかねえのか　でもよ！何話したらいいんだ！？バレちまうんじゃないか！？オレらがヴィーツリー人じゃねえって！」

ジンという男は、高級なものに心底アレルギーがあるようだ
確かにイバ教においてランドクレス国王は竜神の子孫であり、神の
子孫であるという位置づけではあるが、実際はただの人間であらう
に。

「ジンが言わなければ別にバレないだろう。資産国の中でもヴィー
ツリーを選んだのは、あの国は元々農耕民族の集まりで　つま
り、なんだ」

「なんだってなんだ」

面と向かって、この大陸の国家の中では《成金の田舎者》と呼ばれ
ていると言いくらい。

「オレたちが《資産家》になるのに、一番”近い”国って事さ」

国立図書館にあったあの美的感覚に狂った《検索くん》を思い出し、
自分たちが《ヴィーツリー国》の《資産家》という肩書きを用意された
意味が分かった。

あんなふざけたものを他国に贈与するくらいだ、さぞかし悪趣味な
国なのだろう。

「よく分からねえが　バレないんだな!？」

「そんなに動揺したら怪しまれるぞ」

「バレるのか!！」

「だから動揺するなと　」

ジンが珍しく面倒臭い事になっているので、リュクシーは顔を顰め
た。

「放つとこっぜ」

イチシが言うので、ジンの事は放置しておく事にした。
そう、今はまだ、今日起きた事の全てを整理しなくてはならないのだ

「ヘル、ジンを頼むぜ」

「あ、うん」

離れた所でこちらの様子を伺っていたヘリオンに、イチシは声をかける。

リュクシーと視線が交わると、彼女はやはり気まずそうに別の方を向いてしまった。

（ヘリオンには好かれていないらしい）

それは分かっていたが リュクシーにはどうしようもなかった。

そういえば、昔からリュクシーには女友達がない。

女同士とはいえ、ヘリオンと何を話せばいいのか分からなかった。
嫌われているなら、尚更な事だ。

「向こうで話そう」

イチシたちが泊まるのは、主寝室が3つある豪華なスイートルーム

である。

落ち着かないジンは居間に置き去りにし、二人は寝室に移動した。

酒の抜け切らないイチシは、ドサリとベッドに倒れると、天井を仰いだ。

リユクシーはベッドに浅く腰掛けると、今日起きた事を色々思い返してみた。

「クレストⅡシェトラの事だが」

何度思い返しても　やはり同じ顔だ。

「私はあの男を知っているようだ　ただし、15年後の」

「どういう意味だ？」

イチシは上半身を起こしたが、またすぐ仰向けに寝転がってしまった。

「Dr・シュラウドの顔と同じだった。シュラウドの方が老いてい

るが」

「どういう事なんだ？」

そんな事はリユクシーが聞きたい。

「酒場でマデイラが色々言っていたが クレストⅡシエトラが故人であるというのは確かなようだった」
「オレもそう思うぜ」

シェイドの力を知り、自分が特別な存在になっただと浮かれていたあの頃 気付きもしなかった事実が、今のイチシには実感としてあった。

クレストⅡシエトラは、シェイド体であつたに違いない。

図書館で見たクレストⅡシエトラも、遠い昔のただの残像 あれは生きていない。ただの記憶だ。

「だとしたら シュラウドは何者なんだ？イチシ、お前は思う？自分のシェイドが2つに分かれて、別々の存在として生きていけると思うか？クレストⅡシエトラは多重人格者だったのか？」

それとも クレストⅡシエトラは確かに死に、肉体だけを誰かが……そう、誰かが利用しているのだろうか？例えば人工脳を植えつけて？

だとしたら、クレストの肉体を支配し、利用している存在とは誰なのだ。

「シユクラウドの肉体は、生きている。これだけは確かだろうな…シユクラウドは現在進行形で老いている。あの体は生きている」
「バカげてるな」

イチシが吐き出すようにつぶやいた。

「オレの体の中に在るのは、オレ自身のはずだ。誰かの体の中に在る者が誰かなんて 考える事になるとは思わなかった」
「バカけている、か」

一致するのが当たり前だと、リユクシーも思ってきた。

多重人格により、操るシェイドが変わる事例は見た事があるが、多重人格のどれもが、本人から形成された人格である以上、どの人格もその人物であると言えた。

まるつきり知らない存在が、介入してくる事なんてあるのだろうか。だがしかし シェイドを研究する段階で、そのような実験があったのかもしれない。

ラジェンダーテーマパークの実験体たちは、体に色々な機能を加え、新たなシェイド体を作るのが目的だった。

実際、翼を植えつけられたカライは、空を飛ぶ事ができた 人間の機能を超える事ができたのだ。

シェイドでも同じ実験をしたとして、在り得ない話ではない。

複数の人格を1つの肉体に押し込め、超越した人間を作り出す。
メダリアなら、やりそうな事だ

リュクシーは自分の手を見つめた。

生まれてからずっと、共に生きてきたこの体 これはリュクシー
のものだと思ってきた。
それが当たり前だと思っていた。

だが違うのか？

リュクシーの心も、いつか此処を離れ、彷徨う事になるのだろうか。

ギュッ

！

イチシがリュクシーの手を力強く握り締めた。

考えている事が分かったのだろう リュクシーはここにいる。
そう実感させてくれる痛みだった。

「っ！痛い、離せ」

リュクシーはイチシの手を振りほどいた。
すると、イチシはベッドを這いながらリュクシーに寄ると、そのまま抱きついてきた。

まるで母を慕う幼子のように リュクシーの腹におでこをぶつけ、今度は横顔を当てる。

リュクシーの腹 それに触れると、イチシはまた考えてしまう。
ここにある可能性の事を。

「どちらにしろ マディラは言っていた。クレスト＝シエトラは今回の作戦には関係ないと。生き延びた先で考えろと言っていた」

それが マディラが約束した、《リュクシーだけが生き延びる道》なのだろう。
イチシには分かってしまった。

「シユラウドとクレストの関係はとりあえず忘れよう。他に重要な事がある」
「分かった」

イチシはリュクシーの膝枕にうつ伏せたまま、動こうとしない。

ふと、イチシの髪を撫でてみる
外にいた頃と変わって、洗髪
されたきれいな黒髪だった。

「ドラセナ」ロナスは、マデイラの娘だと言った。二人は同じ火災
で死んだと思う」

リククシーは塵に等しい情報から、必死にマデイラの生きた時代を
思い描こうと試みた。

子供たちを集め、繰り返される人体実験。その中にいた血縁者。

母と娘　だがそれは、ジンとヘリオンのような、固い絆で結ば
れたものではなかったはずだ。

ジンだったら、ヘリオンを人体実験の道具に差し出すなんてあるは
ずがない。

愛されなかった子供。愛せなかった母親。

やがて二人は同じ時、同じ要因で肉体を失い、魂だけが現世に残る

そして14年の月日が経った今、子供は魔人へと堕ち、自らの手で
決着をつけようと母親も《人》である事を捨てる。

（気のせいかな　　何だかしつくり来ない）

指先でイチシの髪を弄びながら、リュクシーは考える。

リュクシーはドラセナ「ロナスを見た事がないが、想像する人物像とイチシがどうしても重ならない。
ドラセナがイチシを選び、取り憑いたというのなら、二人には共鳴する部分があるはずなのだ。

（そうか　　あの時はまだ）

イチシがドラセナ「ロナスの接触を受けた時　　リュクシーはまだ、イチシを選んではいなかった。
リュクシーはカライと向き合い、悩み……そして決断したのだった。

死への恐怖と孤独から、イチシが狙われたのだとしても　　今のイチシが同じ精神状態だろうか？

人の心は絶えず動き続けるもの。
自分以外のシェイドと共鳴するなど、限られた瞬間だけに許された奇跡なのだ。

（そもそも　ゴデチャでも火災は起きた。中心にイチシがいた。だが、大火災には至らなかった）

ゴデチャの耐火体制が優れていたのか、ドラセナⅡロナスとイチシの共鳴率が低かったのか　どちらにせよ、あれは《失敗》だろう。

ドラセナⅡロナスは恐怖を再現しきれなかったのだ。

（時計塔で再現しても　果たして今のイチシにシンクロするだろうか）

マディラでさえも、その可能性に気づいていない　イチシと同一化できなければ、そもそもこの作戦は成立しないのだ。

イチシの中の空洞が全て別のもので満たされて、ドラセナⅡロナスなど入り込まないようにしてしまいたい。
リュクシーはそんな事を思ったが　メダリアは別の依りましを見つめるだけだろう。

（それでも　イチシは助かる）

何だか自分がすごく汚い感情を抱いた気がして、リュクシーは悲し

くなった。

他の誰かを犠牲にすれば、イチシは助かるかもしれない　自分
はどうしてこんなに自己中心的な性格になってしまったのか。

「くすぐったい」

断続的に襟足を撫で続けるリュクシーの手をどけると、イチシは起き上がりリュクシーを見つめた。

自己中心的でも　それが真実だった。

自分を見つめるイチシの瞳がそこに在り続けるのならば、リュクシーはきつと、どんな犠牲だって厭わない。

（生きていて欲しいんだ　イチシに）

二人はそつと口付けし合うと、お互いの体温を確かめるように固く抱き合った。

このまま同化してしまいたい　イチシの中をリュクシーで満たしてしまいたい。

そうすれば、ドラセナ＝ロナスも誰も、手出しはできなくなる。

二人のシェイドは一つになる。

イチシは 逆の事を考えていた。

日に日に、二人の繋がりが強くなる リュクシーが愛しくてたまらなくなる。

だが、それではいけない

二人のシェイドが溶け合えば溶け合うほど、イチシがいなくなった時、リュクシーは立ち上がれなくなる。

イチシもリュクシーを置いていけなくなる。

自分は、リュクシーを縛り付ける亡霊にはなりたくない。

（どうすれば あんたは分かってくれる？）

自分を抱き締める腕の力に、リュクシーの気持ち痛みほど伝わってくる だが、イチシだってリュクシーには生きていて欲しいのだ。

たとえ自分がそばにいられなくなったとしても リュクシーには生き続けて欲しい。

「今日は　　もう遅い。病院に戻れ。明日は検査を受けてから来い」

イチシはリュクシーの両肩に手を乗せ、自分から引き離れた。

「病院まで送る」

「……いい。一人で戻れる」

イチシの心に壁を感じた　　イチシが決意をした時から、ずっと感じていた事だった。

イチシは諦めている　　共に生きていく事を。

「イーバエルジュだからって、女が夜に出歩くな。送る」

「知らない。狙われているのはイチシだぞ。病院からホテルまでの帰り道、一人になってしまっただろう」

イチシがどういいうつもりだろうと関係ない。
リュクシーは決して諦めない。絶対に　　イチシにも分からせてみせる。

「いないからな」

反論しようと口を開きかけたイチシより早く、リュクシーは言い切った。

眉間に皺を寄せているのを見て、イチシはつぶやく。

「何で怒ってるんだ？」

「別に怒ってない」

明らかに怒っていたが、この話題は終わらせた方がよさそうだった。

「じゃあ、その代わりに
時計塔の前にいる」

明日の検査、必ず受けるよ？正午にま

「……別に何も出やしないのに」

「受ける。いいな」

言う事を聞こうとしないリュクシーの額を指で弾く。

「
分かった」

渋々と承諾したリュクシーを見て、イチシの中にはまた複雑な感情が広がる。

明日の正午にははつきりする
いるよりはマシに違いない。

不安だが、中途半端な気持ちで

「ホテルの下まで送る」

「いけない。この部屋から出るな」

イチシが一人きりの瞬間は、1秒でも作りたくなかった。

夜のイーバエルジュは人通りも少ないから危険だ。

人には襲われなくても、魔人に取り憑かれてしまつかもしれない。

「なんだリユー、どっか行くのか」

「今夜は病院に戻る」

寝室を出ると、ジンが声をかけてきた。

「そうか、イチシしっかり送ってやれよ」

「送りはいけない。どうせ捕縛士の尾行が付く」

ジンも何か言おうとしたが、リユクシーは既に部屋の扉を開けていた。

「明日、頑張るんだな。ジン」

「くー、行くしかねえのか……」

憂鬱な事を思い出したのか、ジンが呻いた。

「じゃあな。おやすみ」

「ああ。気を付けろよ おやすみ」

一人帰って行くリユクシーの後姿を見て、イチシは思う。

もし、リユクシーに新しい命が、自分の分身が宿っていたらどうなるだろう。

イチシには殺せない 自分の運命の道連れにする事はできない。

リユクシーはきつとイチシの答えを分かっている。

分かった上で、イチシから離れようとはしないだろう。

でもイチシは どうしても、リユクシーには生きていてほしい。
愛しているからこそ、暗い死の世界ではなく、この世界で生きていてほしい。

もちろん、自分自身もリユクシーのそばにいたい。叶う事ならば、生きていたい。
生きる事を諦めたいわけじゃない。

だが、近い内に必ず訪れるであろう死の前に、《その時》のことを考えないわけにはいかない。

どうしたら、リュクシーは理解してくれる？どうしたら……

「なあ、イチシ。時計塔のそばに教会があるんだろ？」

扉の前で佇むイチシに、突然ジンが話しかける。

「そこで結婚式つてヤツがあるらしい。お前、明日朝ヒマなんだろ。見に行っとけ」

「結婚式なら見たぜ。教会の前に人だかりが出来てた」

何故唐突にこんな話をするのか、イチシには理解できなかった。
イチシたちにも結婚式を挙げさせるつもりか？

結婚式とは、お互いを唯一の伴侶として誓い合う儀式だという。

そんな儀式をすれば、リュクシーはますますイチシから離れられなくなる。

イチシだって、リュクシーを離したくなくなる。

「教会の外に出るのは、式が終わった後だ。式を見るんだ、式を。」

それじゃなきゃ意味がねえ」

「式に何かあるのか」

イチシの問いかけに、ジンは頭を掻きながら答える。

「オレは正式な結婚式ってヤツは見た事ないけどよ。誓いの言葉くらいは知ってるぜ」

何だかんだ言っても、ジンもかつては妻帯者、恋愛の儀式の知識も多少は持っているのか。

「知ってるなら、今言えよ」

「オレのは又聞きだから正式じゃねえ。せつかく結婚式の本場にいるんだ、本物を見とけ。いいな、見に行けよ。じゃあ、ヘルそろそろ寝るぞ」

一方的に告げると、ジンはヘリオンに向き直った。

「うん、おやすみ」

「……………。あんまり夜更かしするなよ」

本当は一緒に寝たくて声をかけたのだと思うが、ヘリオンに軽くかわされ、ジンは頭を掻きながら一人寂しく寝室へと去って行った。

「ヘリオン、寝ないのか」

何か言いたそうな顔をして、でも視線を合わせようとせず、ヘリオンはそこにいた。

ふと、リュクシーと出会った頃の自分も、こんな顔をしていたのだろうかと思う。

気になって仕方ないのに、うまく伝えられない。

「ねえ、イチシ あの人には本当に信用できるの？捕縛士たちの仲間じゃないの？」

リュクシーの存在に納得し切れてないヘリオンは、決して自ら心を開こうとはしなかった。

いつもジンの後ろに隠れ、リュクシーを観察しているのを知っていた。

「あの化け物は、本当に捕縛士と関係がないの？本当に？」

「《本当》なんて誰にも分からないぜ、ヘル」

イチシだって分からない 何も、分かっていない。

「問題は、何を信じるか、だ。オレはリクシーを信じている。だから、ヘルはヘルが信じたいものを信じればいい」

イチシの瞳に迷いはなかった　　だからヘリオンは悟った。

「そう　　本当に信じているんだね、あの人の事。だったらボクも　　信じるよ。イチシの大切な人を信じる」
「そうか。　　ありがとう、ヘリオン」

イチシは優しく微笑んだ。
その笑顔を見て、ヘリオンは胸が痛むのを感じた。

（　　イチシの事、諦めなくちゃいけないんだね）

自分には何もできない。ジンに守られている事しかできない。
イチシには釣り合わない　　ヘリオンはようやく認める事ができたのだった。

「ボクももう寝るね。おやすみ、イチシ」
「ああ　　おやすみ」

目から溢れそうになったものを見られなくて、ヘリオンは逃げるようにジンの元へと去って行った。

（そう　　ヘル。お前も信じてやってくれ）

ジンと二人でリユクシーを支えて欲しい　　たとえば自分が消えて
なくなっただとしても。

翌日、約束の時間よりかなり早めに時計塔の前に来たものの、リュクシーの姿はなかった。

約束通り、病院で検査を受けているのだろう　ただ立って待っているとは色々考えてしまいそうなので、イチシは公園内を少し歩く事にした。

ふと、ジンの言葉を思い出し、教会の方向へと歩き出す。

今日は結婚式は行っていないようだった。

教会の扉は開いていて、中には教会の内装を見学している観光客がちらほらいるようだった。

信者でもない自分が入っていいのだろうかと一瞬思ったが、信者でもない旅行者が結婚式を目当てに観光に来るくらいだ、特に問題はないだろうと足を踏み入れた。

（特に何も無いな）

古い霊的な場所を訪れると、既に生前の形を失ったシェイドエネルギーを感じる事があるが、ここには何も感じない。

やはりここは、ただのイベント会場に過ぎないのだ。宗教的な儀式の場ではない。

イチシは奥へ進むと、祭壇近くのベンチに腰を下ろした。

祭壇には、大きな龍の彫り物が祭られている。ランドクレスの水神だ。

蛇のような長い体をしならせて、皮膚には水をまとうその姿は、彫刻として素晴らしい作品ではあると思うが、それ以上の意味はイチシには感じられなかった。

「すみません、式を挙げていただきたいんですが…」

その時、男女の二人連れが、祭壇横の控え室にいる教師に声をかけた。

どうやら昨日見たような大々的なものではなく、簡素な式も挙げられるらしい。

参列者を招いて派手に祝うのは一部の特別に裕福な者だけで（ランドクレスに観光に来る時点である程度は裕福なのだが）、そんな財力のない恋人たちは、二人だけで式を挙げるのが定番なのだろう。

「分かりました。では、簡単ですが準備をいたしましょう」

教師は娘の頭に真つ白なヴェールを乗せ、白い花を飾りつける。
青年の頭には、水神の彫り物を施した額宛てのようなものをはめた。
準備はこれだけだった。

「イサ、鐘を」

教師が合図すると、鐘付きの男が表へ出て行く。
式を始めるといふ証に、屋上にある鐘を鳴らすのだ。

「では、祭壇の前へ」

二人を後ろに従えて祭壇の前にやってきた教師は、教会内にいる観
光客たちに向けて言った。

「ここで巡り合ったのも水神様のご縁、この二人の愛の誓いを皆様
も祝福してやってください」

観光客たちは皆、参列者が座るベンチへと腰を下ろし、式が始まる
のを静かに見つめる。

「では、エヘン！」

教師は咳払いをすると、誓いの言葉を唱え始めた。

「命を司りしイバの娘マリカラリアよ、御名の下に愛を誓いし二人が訪れました」

教会で時間を潰していたら、結構時間が経ってしまったようだ。
とはいえ、まだ午前中ではある。

待ち合わせ場所に向かうと昨日とは変わって時計塔の足元に、短い

影が落ちていた。

日影には爽やかな風が吹いている。
公園に設置されたベンチには、観光客の姿が見えた。

日影の中心に、リュクシーは一人立っていた。
イチシが待つ予定だったのに、逆に向こうを待たせてしまったよう
だ

だが待たせた言い訳ではないが、この時間は無駄ではなかった。

イチシの胸には、一つの決意ができた。
リュクシーがこれから何を言おうと それが自分の出せる唯一
の答えだと思った。

「リュクシー!!」

ありったけの大声で呼ぶと、リュクシーが振り向いた。

その瞬間に 視線が合っただけで、イチシには分かってしまっ
た。

愛しくて抱き締めたい やはり自分の運命の相手はリュクシー

だったのだ。

二人の間に子を成したのがその証だ。

イチシは自分の感情に逆らう事をしなかった。
駆け寄ってきた力一杯リュクシーを抱き締めた。

「走るな、妊婦が」

その言葉に、自分の顔を見ただけでイチシは何もかもが分かってしまったのだろうと、リュクシーは思った。
不安が現実になった　現実になってしまったのだ。

「来い、リュクシー」
「イチシ？どこへ行くんだ？」

イチシはリュクシーの手を引くと、真っ直ぐにある方向へと歩き出した。

「 イチシ? 」

イチシは何も答えない
があつた。

だが、彼の目指す先にはイバ教の教会

(イチシ?)

イチシが何をしようとしているのか、それは何となく想像が付いた
が、何故急にイチシが心変わりしたのか それはやはり二人の
間に新たに命が宿つたせいなのか 新しい命とはそれほどま
でに人に変化をもたらす事ができるのかと、色んな感情が沸き上が
ってきた。

だがその感情たちは、不快なものではなかった。
イチシが生きる意志を繋いでくれるかもしれない それは今の
リュクシーにとって、一番うれしい事だった。

教会の中には数人の観光客と、イバ教信者らしき者が床の拭き掃除をしているだけで静かなものだった。

イチシは1時間前に見た恋人たちと同じように、祭壇横の教師の控え室のドアを叩き、返事を待たずに開けた。

中には口元をもぐもぐと動かした教師が、ぎょっとしたような顔をして慌てて立ち上がる。

どうやら早めの昼食の時間だったらしい。

みつともない姿を見られたと思ったのか、一瞬反対側を向いて、慌てて口の中のを飲み込むと、澄ました顔で客人に向き直る。

「何か御用ですか？」

「式を挙げたい」

イチシが告げると、教師はまたあの尊大そうな咳払いをした。

「分かりました。では、簡単ですが準備をいたしましょう」

そばにあった布巾でさりげなく手を拭くと、部屋の隅に置かれた胸像にかけられた額宛てとヴェールを手取る。

リククシーは言葉もなく、自分にヴェールがかぶせられるのをただ

見ていた。

イチシも無言だった
られた。

額には、ランドクレスの水神の紋章が飾

「では祭壇へどうぞ」

リュクシーはイチシの顔を見た

イチシは深く頷いた。

「行こう」

これは
だろうか？

イチシが生きる事に奮起してくれたと考えてもいいの

お互いを唯一と誓い合う儀式
うのだ。

それをリュクシーとしようとい

そうとしか考えられない

リュクシーの中には安堵が広がった。

二人は祭壇の前に辿り着くと、教師と向き合う。

「ここで巡り合ったのも水神様のご縁、この二人の愛の誓いを皆様も祝福してやってください」

教師は背後にいる観光客たちに声をかけると、再び咳払いをした。振り返り、祭壇に祭られた水神像に一礼する。

「命を司りしイバの娘マリカラリアよ、御名の下に愛を誓いし二人が訪れました。彼らの揺るぎなき心の証を母なるイバより受け賜りたまえ」

神聖なる言葉を唱えると、教師はイチシたちに向き直る。

「汝の名は？」

「イチシ」タカツキだ」

「そして汝は？」

「リユクシー」シンガプーラ」

「よろしい」

教師は祭壇に供えられた聖なる水を二人の頭に振りかけ、耳元には供物の白いララックの花を一輪ずつ挿した。

「イチシよ。そなたはリユクシーを唯一の伴侶とし、富める時も病

める時も、生と死が二人を別つまで共に生きる事を誓うか？」

教師の言葉を聞いた時、リュクシーの体は凍りついた。

イチシは リュクシーに誓わせようとしているのだ。
こんなにも残酷な運命を。

《生と死が二人を別つまで
》

これは愛の誓いなんかじゃない。
リュクシーにとっては絶望の誓い以外の何物でもなかった。

「イチシ？誓うか？」

教師の再びの問いかけに
イチシの顔を見つめていた。

リュクシーはさすがのような想いで、

イチシは本当に誓う気なのか？
本当に？

だからこそリユクシーをこの場に連れて来たのだと、嫌と言っほど分かってはいたが、絶対に信じたくはなかった。
生と、死　二人はそんなもので引き離されなくてはならないのか。

「ああ……誓う」

搾り出すようにそう言ったイチシは、もうリユクシーから目を逸らさなかった。

生きる、と 自分がいなくなったとしても、リユクシーは生きると。

イチシのシェイドを断ち切り、生きていけと 頬に伝う涙が、リユクシーを見つめる強い意志が、全てを物語っていた。

「よろしい。ではリユクシー」

教師の言葉は何も分からなかった。

リュクシーの頬にもイチシと同じものが伝っていた。

二人はただ見つめ合う　言葉などいらない。
お互いのシェイドを感じれば、何もかもが理解できた。

「リュクシー？」

何度問いかけても何も言葉を発しないリュクシーに、教師が戸惑った表情を浮かべていた。

誓いの言葉の後に感極まって泣く恋人たちはたまに見るが、誓いの言葉の途中で進行できないほどに泣き合うのは初めてだった。

リュクシーのこの時の想いを

誰も推し量る事はできまい。

自分でさえも溢れ出す感情は抑えきれなかった。
全ては滴となって、瞳から零れ落ちた。

「リュクシー？そなたは誓うか？」

何度目かの問いかけに、リュクシーは現実に戻ってきた。

リュクシーは答えなければならない。
イチシのこの想いに。

リュクシーはゆっくりと口を開いた。

「私は
」

EPISODE i - 15 (後書き)

2回目の分岐です。

…が、執筆中の為、まだ先に進めません。

どちらを先にUPしようか模索中なので、こっちを先に見たい！…
なんて感想をいただけると喜びます。

分岐型にしておきながら、まだまだ途中段階で申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3232d/>

SHADE-I

2010年12月30日02時29分発行